

かんまち むかいまち
上町 遺跡 向町 地点

2013

飛驒市教育委員会



安峰山より古川盆地を望む



上町遺跡向町地点全景（手前A区／北西から）



9号住居跡弥生鉢（3）縮尺1/2



9号住居跡弥生高坏（2）縮尺2/5



14号住居跡土器壺（11）縮尺1/4



古代造構外灰釉陶器塊（210）縮尺3/4



15号住居跡軒丸瓦（11）縮尺1/3

序

岐阜県の最北端に位置する飛騨市は、平成 16 年 2 月 1 日に、古川町・河合村宮川村・神岡町の旧 2 町 2 村が合併して誕生しました。北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接し、面積 792.31km²、内、森林が約 92% を占める山間地域に約 26,700 人の人々が生活しています。

この 4 町（合併後、河合村は河合町に、宮川村は宮川町に名称変更）において最も多くの人口を擁するのが古川町で、町の西寄りを清流宮川が貫流しています。そして、その周囲に形成されている市街地には、古墳や古代寺院・古代遺跡が数多く分布し、旧国府町域（現高山市国府町）とともに古代飛騨の中心地であったことを物語っています。

さて、本報告書における上町遺跡向町地点の埋蔵文化財発掘調査は、旧吉城郡向町字古町・嵯峨山・流（現飛騨市古川町南成町）にかけて計画された古川町向町第 2 土地区画整理事業の実施に当たり、古川町（現飛騨市）が施工を計画した町道の新設改良工事に伴ってのものです。

当初、上町 C・D 地点が中心と考えられていましたが、発掘調査を進めるにしたがって、遺跡の範囲が北西側では向町字古町・嵯峨山附近にまで及ぶことが明らかになりました。そして、その結果から、遺跡の広がりは、国道 41 号を中心に宮川右岸の上位段丘面に沿って南北最大 1.5km、東西約 500m の範囲に及ぶことが推定され、現存する遺跡としては、飛騨はもとより県内で最大級の遺跡であることが確実になったのです。遺構に関しては、古墳時代後期、奈良・平安時代、さらには中近世にかけて営まれた複合遺跡として、専門家の皆様より希有の価値があると評価されています。

よって、今回まとめられた文献は、今後、先人の生きた足跡を紐解き、今後の考古学研究の礎として、さらには、文化財保護への関心を高めるための一助になるであろうと確信しています。

終わりに、発掘調査及び出土遺物の整理、そして本報告書の作成等に対しまして、多大なるご指導・ご支援を賜りました関係諸機関・関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

岐阜県飛騨市教育委員会
教育長 山 本 幸 一

例　言

1. 本書は、岐阜県飛騨市古川町南成町1～3・5～7丁目ほか（旧吉城郡古川町向町字古町109-1ほか嵯峨山・流）に所在する上町遺跡向町地点（上町遺跡／岐阜県遺跡番号21217-06433）の発掘調査報告書である。なお、調査当時は（仮称）向町南部地区遺跡として調査を行い、その結果、調査範囲は上町遺跡の南西側の広がりと考えられた。この成果を受け、飛騨市教育委員会では平成19年2月26日付け飛騨市教第2769号にて岐阜県教育委員会に岐阜県遺跡地図の変更を報告した。岐阜県教育委員会では、平成19年2月27日付け社文第351号の11にて、飛騨市教育委員会に遺跡範囲拡大の通知を行った。
2. 本調査は、古川町（現飛騨市）が向町地区に計画した町道の新設改良工事（土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財の事前調査である。
3. 発掘調査は、町道改良工事に伴う道路予定地区約9,600m²を対象とした遺構の存否確認ならびにその資料作成を目的とした試掘調査を経て、遺跡の存在が予測された河岸段丘上位面2,200m²を本調査の対象地区とした。
4. 試掘調査は、岐阜県教育委員会指導部文化課の指導のもと、古川町教育委員会（現飛騨市教育委員会）より委託を受けた株式会社玉川文化財研究所が行った。また、本調査は古川町教育委員会が調査主体となり、調査團を組織して発掘調査にあたった。以下に本調査の調査体制を記す。

調査主体 古川町教育委員会

顧問 大野 政雄 岐阜県文化財保護審議会会長・日本考古学协会会员

調査团长 戸田 哲也 玉川大学文学部非常勤講師・日本考古学协会会员

調査主任 河合 英夫 （株）玉川文化財研究所主任研究员・日本考古学协会会员

調査員 中山 良 （株）玉川文化財研究所研究员

調査員 北平 朗久 （株）玉川文化財研究所所員

補助員 橋本真由美

事務局 白川 修平 古川町教育委員会社会教育課文化係長

調査期間 試掘調査 平成1（1989）年12月1日～平成2（1990）年2月2日

本調査 平成2（1990）年6月1日～平成2（1990）年12月27日

調査面積 対象面積 9,600m²（町道改良工事事業区域）

試掘調査 372m²

本調査 2,200m²

（肩書きは調査当时）

5. 報告書作成作業は、飛騨市教育委員会よりの業務委託を受けた株式会社玉川文化財研究所が担当した。委託業務案件は埋蔵文化財発掘調査等事業－件名飛市教委－13号、遺跡名－上町遺跡（向町南部地点）二次整理作業等委託業務である。

二次整理作業等委託業務担当

調査主任 河合 英夫 （株）玉川文化財研究所調査研究部長・日本考古学协会会员

調査員 北平 朗久 （株）玉川文化財研究所主任研究員・日本考古学协会会员

補助員 玉川 久子 （株）玉川文化財研究所主任研究員

毛利 靖子 （株）玉川文化財研究所研究員

御代 七重 （株）玉川文化財研究所研究員

6. 本件二次整理作業等委託業務に係わる履行期間は、平成23（2011）年6月1日～平成24年（2012）3月31日迄である。

7. 本書の執筆は、飛騨市教育委員会の指導のもと、河合英夫、北平朗久が担当し、河合が一部記述内容の統一をはかった。なお、第1章第1節の調査に至る経緯については白川修平が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

白川 修平 第1章第1節

河合 英夫 第1章第2節、第2章第1・2節、第3章第1・2節、第3章4節～10節の前段、第5・9節、第3章各遺構の出土遺物、第3章第11節、第4章、遺構計測表、遺物観察表

北平 朗久 第1章第3節、第3章第3・4・6～10節の遺構、遺構計測表、遺物観察表

8. 発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から指導・協力を賜った。記して謝意を表する（敬称略・五十音順）。

岐阜県教育委員会、（故）大野政雄（岐阜県文化財保護審議会会长・日本考古学协会会员）、町川克巳（岐阜県教育委員会指導部文化課）
(肩書きは調査当時)

9. 本文中の方位は座標北を示し、国土交通省告示の平面直角座標系第VII系日本測地系に対応する。

10. 土層の土色は、小山正忠・竹原秀雄1988『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

11. 調査記録ならびに出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管・公開している。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
1. 試掘調査	2
2. 本調査	9
3. 報告書整理作業	10
第3節 遺跡の層序	11
第2章 遺跡の立地と環境	13
第1節 遺跡の地理的環境	13
第2節 周辺の歴史的環境	14
第3章 発見された遺構と遺物	22
第1節 遺構および遺物の概要	22
第2節 坂穴住居跡	27
第3節 掘立柱建物跡	82
第4節 坂穴状遺構	82
第5節 溝状遺構	86
第6節 焼土跡	91
第7節 土 坑	92
第8節 集石土坑	93
第9節 配石遺構	111
第10節 ピット群	126
第11節 遺構外出土遺物	129
1. 古代の遺構外出土遺物	129
2. 中近世の遺構外出土遺物	145
3. 縄文時代の遺構外出土遺物	149
第4章 総 括	151
引用・参考文献	1 , 10, 11, 21, 150, 153
別表	154
遺構計測表	154
遺物観察表	158
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	上町遺跡向町地点の調査範囲と周辺の地形 (1/4,000)	3
第2図	上町遺跡向町地点の試掘および本調査範囲 (1/2,500)	5
第3図	上町遺跡向町地点の層序柱状図 (1/50)	12
第4図	上町遺跡の位置と周辺の主な遺跡 1 (1/60,000) (国土地理院1984『飛騨古川』1/50,000を縮小)	15
第5図	上町遺跡の位置と周辺の主な遺跡 2 (1/25,000) (国土地理院2001『飛騨古川』1/25,000)	16
第6図	上町遺跡向町地点A・B区遺構配置図 (1/250)	23
第7図	上町遺跡向町地点C・D区遺構配置図 (1/250)	25
第8図	1号住居跡およびカマド実測図 (1/60、1/30)	28
第9図	2号住居跡実測図 (1/60)	29
第10図	3号住居跡実測図 (1/60)	30
第11図	3号住居跡カマド実測図 (1/30)	31
第12図	3号住居跡出土遺物 (1/4)	32
第13図	4号住居跡実測図 (1/60)	34
第14図	4号住居跡カマド実測図 (1/30)	35
第15図	4号住居跡出土遺物 (1/4)	35
第16図	5号住居跡実測図 (1/60)	37
第17図	5号住居跡カマド実測図 (1/30)	38
第18図	5号住居跡出土遺物 (1/4)	38
第19図	6号住居跡実測図 (1/60)	39
第20図	6号住居跡カマド実測図 (1/30)	40
第21図	6号住居跡出土遺物 (1/4)	41
第22図	7号住居跡実測図 (1/60)	42
第23図	7号住居跡カマド実測図 (1/30)	43
第24図	7号住居跡出土遺物 (1/4)	43
第25図	8号住居跡実測図 (1/60)	44
第26図	8号住居跡カマド実測図 (1/30)	45
第27図	8号住居跡出土遺物 (1/4)	46
第28図	9号住居跡および炉跡実測図 (1/60、1/30)	48
第29図	9号住居跡出土遺物 (1/4、1/3)	49
第30図	10号住居跡実測図 (1/60)	50
第31図	11号住居跡実測図 (1/60)	51
第32図	11号住居跡出土遺物 (1/4)	52
第33図	12号住居跡実測図および土鍤分布図 (1/60、1/30)	53
第34図	12号住居跡出土遺物 1 (1/4、1/2)	54
第35図	12号住居跡出土遺物 2 (1/2)	55

第36図	13号住居跡実測図 (1/60).....	56
第37図	14号住居跡実測図 (1/60).....	57
第38図	14号住居跡カマド実測図 (1/30).....	58
第39図	14号住居跡出土遺物 1 (1/4).....	59
第40図	14号住居跡出土遺物 2 (1/5、1/3).....	60
第41図	15号住居跡実測図 (1/60).....	61
第42図	15号住居跡カマド実測図 (1/30).....	62
第43図	15号住居跡出土遺物 (1/4).....	63
第44図	16号住居跡およびカマド実測図 (1/60、1/30).....	65
第45図	16号住居跡出土遺物 (1/4).....	66
第46図	17号住居跡実測図 (1/60).....	66
第47図	17号住居跡出土遺物 (1/4).....	67
第48図	18号住居跡実測図 (1/60).....	68
第49図	18号住居跡出土遺物 (1/4).....	68
第50図	19号住居跡およびカマド実測図 (1/60、1/30).....	69
第51図	19号住居跡出土遺物 (1/4).....	69
第52図	20号住居跡およびカマド実測図 (1/60、1/30).....	70
第53図	20号住居跡出土遺物 (1/4).....	71
第54図	21号住居跡およびカマド実測図 (1/60、1/30).....	71
第55図	22号住居跡およびカマド実測図 (1/60、1/30).....	73
第56図	23~25号住居跡実測図 (1/60).....	74
第57図	22号住居跡出土遺物 (1/4).....	75
第58図	23号住居跡カマド実測図 (1/30).....	75
第59図	25号住居跡出土遺物 (1/4、1/3).....	77
第60図	26号住居跡実測図 (1/60).....	78
第61図	26号住居跡カマド実測図 (1/30).....	79
第62図	26号住居跡出土遺物 (1/4).....	80
第63図	27号住居跡実測図 (1/60).....	81
第64図	27号住居跡出土遺物 (1/4).....	81
第65図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	82
第66図	1号堅穴状遺構実測図 (1/60).....	83
第67図	1号堅穴状遺構出土遺物 (1/3、1/4).....	85
第68図	1号溝状遺構実測図 (1/50).....	87
第69図	2号溝状遺構実測図 (1/50).....	88
第70図	2号溝状遺構出土遺物 (1/3、1/4).....	89
第71図	3号溝状遺構実測図 (1/60).....	90
第72図	3号溝状遺構出土遺物 (1/4).....	90
第73図	1号焼土跡実測図 (1/20).....	91

第74図	1～4号土坑実測図(1/40).....	92
第75図	2号土坑出土遺物(1/30).....	93
第76図	1～12号集石土坑実測図(1/40).....	95
第77図	13～24号集石土坑実測図(1/40).....	99
第78図	25～30号集石土坑実測図(1/40).....	102
第79図	31～37号集石土坑実測図(1/40).....	105
第80図	38号集石土坑出土遺物(1/3).....	106
第81図	38～42号集石土坑実測図(1/40).....	107
第82図	42号集石土坑出土遺物(1/3).....	108
第83図	44号集石土坑出土遺物(1/3、1/4).....	109
第84図	43～48号集石土坑実測図(1/40).....	110
第85図	1号配石遺構出土遺物(1/4、1/2).....	112
第86図	1・2号配石遺構実測図(1/50).....	113
第87図	3号配石遺構実測図(1/50).....	114
第88図	4・5号配石遺構実測図(1/50).....	115
第89図	4号配石遺構出土遺物(1/4).....	116
第90図	6号配石遺構実測図(1/50).....	117
第91図	6号配石遺構出土遺物(1/3、1/4).....	118
第92図	7号配石遺構実測図(1/50).....	120
第93図	8号配石遺構実測図(1/50).....	121
第94図	8号配石遺構出土遺物(1/3).....	121
第95図	C区南東側配石群実測図1(1/50).....	123
第96図	C区南東側配石群実測図2(1/50).....	124
第97図	C区南東側配石群実測図3(1/50).....	125
第98図	C区南東側配石群2・3周辺の出土遺物(1/4).....	126
第99図	A・B・D区ピット群実測図(1/100).....	127
第100図	C区ピット群実測図(1/100).....	128
第101図	遺構外出土古代遺物－須恵器実測図1(1/4).....	131
第102図	遺構外出土古代遺物－須恵器実測図2(1/4).....	132
第103図	遺構外出土古代遺物－須恵器実測図3(1/4).....	133
第104図	遺構外出土古代遺物－須恵器実測図4・灰釉陶器実測図1(1/4).....	134
第105図	遺構外出土古代遺物－灰釉陶器実測図2(1/4).....	136
第106図	遺構外出土古代遺物－灰釉陶器実測図3(1/4).....	137
第107図	遺構外出土古代遺物－灰釉陶器実測図4(1/4).....	138
第108図	遺構外出土古代遺物－瓦実測図1(1/4).....	139
第109図	遺構外出土古代遺物－瓦実測図2(1/4).....	140
第110図	遺構外出土古代遺物－瓦実測図3(1/4).....	141
第111図	遺構外出土古代遺物－瓦実測図4(1/4).....	142

第112図 遺構外出土古代遺物－土製品実測図(1/3).....	142
第113図 遺構外出土古代遺物－石製品実測図1(1/3).....	143
第114図 遺構外出土古代遺物－石製品実測図2(1/4).....	144
第115図 遺構外出土古代遺物－金属製品(1/2).....	145
第116図 遺構外出土中近世遺物－陶磁器1(1/3).....	146
第117図 遺構外出土中近世遺物－陶磁器2(1/3).....	147
第118図 遺構外出土中近世遺物－中国錢貨(2/3).....	148
第119図 遺構外出土繩文時代遺物－石器(1/3).....	149
第120図 上町遺跡の存続期間と盛衰.....	152

表 目 次

第1表 試掘調査における発掘区別調査概要一覧.....	7
第2表 上町遺跡と周辺の主な遺跡一覧.....	17
第3表 地区別遺構集計表.....	22
第4表 堪穴住居跡計測表.....	154
第5表 掘立柱建物跡計測表.....	155
第6表 堪穴状遺構計測表.....	155
第7表 溝状遺構計測表.....	155
第8表 焼土跡計測表.....	155
第9表 土坑計測表.....	155
第10表 集石土坑計測表.....	156
第11表 配石遺構計測表.....	157
第12表 ピット計測表.....	157
第13表 3号住居跡出土遺物観察表.....	158
第14表 4号住居跡出土遺物観察表.....	159
第15表 5号住居跡出土遺物観察表.....	159
第16表 6号住居跡出土遺物観察表.....	159
第17表 7号住居跡出土遺物観察表.....	159
第18表 8号住居跡出土遺物観察表.....	159
第19表 9号住居跡出土遺物観察表.....	160
第20表 11号住居跡出土遺物観察表.....	160
第21表 12号住居跡出土遺物観察表.....	160
第22表 14号住居跡出土遺物観察表.....	162
第23表 15号住居跡出土遺物観察表.....	163
第24表 16号住居跡出土遺物観察表.....	163
第25表 17号住居跡出土遺物観察表.....	163
第26表 18号住居跡出土遺物観察表.....	163

第27表	19号住居跡出土遺物観察表	163
第28表	20号住居跡出土遺物観察表	164
第29表	22号住居跡出土遺物観察表	164
第30表	25号住居跡出土遺物観察表	164
第31表	26号住居跡出土遺物観察表	164
第32表	27号住居跡出土遺物観察表	164
第33表	1号堅穴状遺構出土遺物観察表	164
第34表	2号溝状遺構出土遺物観察表	165
第35表	3号溝状遺構出土遺物観察表	165
第36表	2号土坑出土遺物観察表	166
第37表	38号集石土坑出土遺物観察表	166
第38表	42号集石土坑出土遺物観察表	166
第39表	44号集石土坑出土遺物観察表	166
第40表	1号配石遺構出土遺物観察表	166
第41表	4号配石遺構出土遺物観察表	166
第42表	6号配石遺構出土遺物観察表	166
第43表	8号配石遺構出土遺物観察表	167
第44表	C区南側配石群2周辺出土遺物観察表	167
第45表	C区南側配石群3周辺出土遺物観察表	167
第46表	古代遺構外出土土器観察表	168
第47表	古代遺構外出土瓦観察表	176
第48表	古代遺構外出土土製品観察表	177
第49表	古代遺構外出土石製品(砥石)観察表	177
第50表	古代遺構外出土金属製品観察表	177
第51表	中近世遺構外出土遺物観察表	177
第52表	遺構外出土中国錢貨観察表	179
第53表	縄文時代遺構外出土石器観察表	179

写真図版目次

- 巻頭図版 1 安峰山より古川盆地を望む
 　上町遺跡向町地点遺跡全景（手前A区／北西から）
- 巻頭図版 2 9号住居跡弥生鉢（3）縮尺1/2
 　9号住居跡弥生高坏（2）縮尺2/5
 　14号住居跡土師器壺（11）縮尺1/4
 　古代遺構外灰釉陶器塊（210）縮尺3/4
 　15号住居跡軒丸瓦（11）縮尺1/3

図版 1	上町遺跡向町地点遺跡全景 1 上町遺跡向町地点遺跡全景 2	17号住居跡全景（東から） 18号住居跡全景（南西から）
図版 2	向町地点 A 区全景（南東から） 向町地点 A 区全景（北西から）	19号住居跡全景（西から） 19号住居跡カマド掘り方（南東から）
図版 3	向町地点 B 区全景（南西から） 向町地点 B 区南西側全景（北東から）	20号住居跡全景（南西から） 21号住居跡全景（南東から）
図版 4	向町地点 C 区南東側全景（北西から） 向町地点 C 区北西側全景（南東から）	22号住居跡全景（南西から） 23号住居跡全景（南西から）
図版 5	向町地点 D 区全景（南東から） 向町地点 D 区全景（北西から）	23号住居跡カマド全景（南東から） 図版11 24号住居跡全景（南西から）
図版 6	1号住居跡全景（南から） 1号住居跡カマド掘り方（南から） 2号住居跡全景（北東から） 3号住居跡全景（南西から） 3号住居跡カマド全景（南西から） 4号住居跡全景（北西から） 4号住居跡カマド全景（南西から） 4号住居跡貯蔵穴土層断面（南西から）	25号住居跡全景（南西から） 26号住居跡全景（南から） 26号住居跡カマド全景（南から） 27号住居跡全景（南西から） 1号掘立柱建物跡全景（南西から） 1号堅穴状遺構遺物出土状態（南から） 1号堅穴状遺構掘り方全景（北西から）
図版 7	5号住居跡全景（北西から） 5号住居跡カマド土層断面（南東から） 6～9号住居跡全景（南東から） 6号住居跡カマド全景（南西から） 7号住居跡全景（南から）	図版12 1号溝状遺構・1号土坑全景（西から） 2号溝状遺構全景（南から） 3号溝状遺構全景（南西から） 2号土坑全景（東から） 4号土坑全景（北東から） 1号集石土坑全景（南西から） 2号集石土坑全景（南西から） 3号集石土坑全景（南西から）
図版 8	7号住居跡カマド全景（南から） 8号住居跡カマド全景（南から） 9号住居跡全景（南西から） 9号住居跡炉跡全景（北から） 10号住居跡全景（南西から） 11号住居跡全景（南から） 12号住居跡全景（南西から） 13号住居跡全景（北東から）	図版13 1～24号集石土坑全景（北西から） 4号集石土坑全景（東から） 5号集石土坑全景（西から） 6号集石土坑全景（北から） 7号集石土坑全景（北東から）
図版 9	14号住居跡全景（北西から） 14号住居跡カマド全景（南西から） 15号住居跡遺物出土状態（南東から） 15号住居跡軒丸瓦出土状態（東から） 15号住居跡カマド全景（西から） 16号住居跡全景（南西から） 16号住居跡カマド全景（南西から）	図版14 8～10・13～16号集石土坑全景（北西から） 8 a・b号集石土坑全景（南西から） 9 a・b号、10号集石土坑全景（北西から） 11号集石土坑全景（南西から） 12号集石土坑全景（南西から） 13号集石土坑全景（北西から）

	14号集石土坑全景（北西から）	調査風景（南西から）
	15号集石土坑全景（北西から）	図版20 テストピット12全景および土層断面
図版15	16~20号集石土坑全景（西から）	テストピット14全景および土層断面
	16・17号集石土坑全景（北東から）	テストピット19全景および土層断面
	18・19号集石土坑全景（北東から）	テストピット91全景および土層断面
	20号集石土坑全景（北東から）	テストピット43全景および土層断面
	21号集石土坑全景（南西から）	テストピット63全景および土層断面
	22・23号集石土坑全景（西から）	テストピット9全景および土層断面
	25号集石土坑全景（南東から）	調査区全景（南西から）
	26・27号集石土坑全景（北から）	図版21 3号住居跡出土遺物（1/3）
図版16	27号集石土坑全景（南西から）	4号住居跡出土遺物（1/3）
	28号集石土坑全景（南東から）	5号住居跡出土遺物（1/3）
	29・43・44号集石土坑全景（北東から）	図版22 6号住居跡出土遺物（1/3）
	31・36・37号集石土坑全景（南東から）	7号住居跡出土遺物（1/3）
	31号集石土坑全景（北東から）	8号住居跡出土遺物（1/3）
	33号集石土坑全景（北東から）	9号住居跡出土遺物（1/3）
	38・39号集石土坑全景（北東から）	図版23 11号住居跡出土遺物（1/3）
	40・41号集石土坑全景（北東から）	12号住居跡出土遺物（1/3）
図版17	42号集石土坑全景（南東から）	図版24 14号住居跡出土遺物1（1/3・1/4）
	44号集石土坑全景（北西から）	図版25 14号住居跡出土遺物2（1/3・1/4）
	43号集石土坑全景（北西から）	図版26 15号住居跡出土遺物1（1/3・1/4）
	46~48号集石土坑全景（北東から）	図版27 15号住居跡出土遺物2（1/4）
	1号配石遺構全景（西から）	図版28 16号住居跡出土遺物（1/3）
	2号配石遺構全景（西から）	18号住居跡出土遺物（1/3）
	3号配石遺構全景（西から）	19号住居跡出土遺物（1/3）
	4号配石遺構全景（北から）	20号住居跡出土遺物（1/3）
図版18	5号配石遺構全景（北東から）	22号住居跡出土遺物（1/3）
	6号配石遺構全景（南西から）	25号住居跡出土遺物（1/3）
	7号配石遺構全景（南東から）	26号住居跡出土遺物（1/3）
	8号配石遺構全景（北西から）	27号住居跡出土遺物（1/3）
	C区南東側配石遺構群全景（北西から）	図版29 1号堅穴状遺構出土遺物（1/3）
図版19	C区南東側配石遺構群全景（西から）	2号溝状遺構出土遺物（1/3）
	C区南東側配石遺構群近景1（西から）	3号溝状遺構出土遺物（1/3）
	C区南東側配石遺構群近景2（西から）	2号土坑出土遺物（1/3）
	C区南東側配石遺構群近景3（南から）	図版30 38号集石土坑出土遺物（1/3）
	C区南東側配石遺構群近景4（北から）	44号集石土坑出土遺物（1/3）
	K-55号貨出土地點（東から）	1号配石遺構出土遺物（1/3）
	C区遺構外軒丸瓦出土地點（西から）	4号配石遺構出土遺物（1/3）

- 6号配石遺構出土遺物（1/3）
- 図版31 C区南東側配石遺構群2周辺出土遺物（1/3）
C区南東側配石遺構群3周辺出土遺物（1/3）
- 図版32 遺構外出土古代遺物－須恵器1（1/3）
- 図版33 遺構外出土古代遺物－須恵器2（1/3）
- 図版34 遺構外出土古代遺物－須恵器3（1/3）
- 図版35 遺構外出土古代遺物－須恵器4、灰釉陶器1（1/3）
- 図版36 遺構外出土古代遺物－灰釉陶器2（1/3）
- 図版37 遺構外出土古代遺物－灰釉陶器3（1/3）
- 図版38 遺構外出土古代遺物－灰釉陶器4（1/3）
古代遺構外出土墨書き土器文字資料
- 図版39 遺構外出土古代遺物－瓦1（1/3）
- 図版40 遺構外出土古代遺物－瓦2（1/3）
- 図版41 遺構外出土古代遺物－瓦3（1/3）
- 図版42 遺構外出土古代遺物－土製品（1/3）
遺構外出土古代遺物－石製品（1/3）
遺構外出土古代遺物－金属製品（1/1）
- 図版43 遺構外出土中近世遺物－中国錢貨（1/1）
遺構外出土中近世遺物－陶磁器（1/3）
- 図版44 遺構外出土縄文時代遺物－石器（1/3）

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

上町遺跡向町地点の発掘調査は、吉城郡古川町向町字古町・嵯峨山・流（現飛騨市古川町南成町）にかけて計画された古川町向町第二土地区画整理事業の実施にあたり、古川町（現飛騨市）が施工を計画した町道の新設改良に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当時、事業予定地の南東側では国道41号線の国府古川バイパスの建設に伴う「上町遺跡D地点」の発掘調査が行われており、古墳時代から奈良・平安時代、中世と、多岐にわたる遺跡であることが明らかにされつつあり、また過去に事業地内からは礎石や瓦類が発見されたことでも知られていた。

上述の上町遺跡の発掘調査は、岐阜県教育委員会が昭和57年に行った国道41号線国府古川バイパス道路新設予定地に対する遺物分布調査がその発端となっている。分布調査の結果、古川町上町地区を中心とする田畠から奈良時代中葉を中心とする須恵器が分布していることが判明し、併せて大規模な集落跡の存在が予測されていた。

平成1年3月、古川町向町第二土地区画整理組合から古川町教育委員会（現飛騨市教育委員会）に対して土地区画整理事業計画に伴う事前協議書が提出され、予定地における埋蔵文化財の有無とその取扱いについて照会がなされた。古川町教育委員会は岐阜県教育委員会指導部文化課と協議を行った結果、町道新設改良部分について試掘調査の実施を決めた。平成1年12月1日、古川町教育委員会は、株式会社玉川文化財研究所に予備調査を委託し、翌平成2年2月2日まで試掘調査を実施した。

試掘調査は、向町字古町・嵯峨山・流の三地区に行い、古町・嵯峨山の二地区からは古墳時代後期から奈良・平安時代にわたる堅穴住居跡6軒のほか、集石跡やピット、土坑などが発見された。また、流の地区では遺構・遺物ともまったく存在しないことを確認した。

町道新設改良事業の遂行にあたって、本格調査の実施が必要と結論づけた古川町教育委員会では、調査団（団長戸田哲也 玉川大学文学部非常勤講師）を組織し、直ちに調査に対処することを決定した。

町道新設改良部分の本調査は、岐阜県の補助対象事業に採択され、平成2年6月1日より本調査を開始した。同年12月27日まで行った発掘の成果は後述のとおりであるが、当初の予想どおり隣接する上町遺跡D地点と一的な広がりをもつ、広義の上町遺跡群内に含まれることが確認された。寺院跡の発見までには至らなかったものの、今回もまた瓦類が多少出土しており、上町遺跡D地点の報告書（古川町教育委員会 1991）の中で提起した古町麻寺跡の存在がより現実的なものになったといえる。飛騨においても古代史研究の主軸は文献から考古資料に移る趨勢にあるが、古代寺院の研究を含め、まだ緒に就いたばかりである。しかし、この成果を悉く比較検討することにより内包する課題の究明に一歩でも近づければ、この調査の果たした意義は大きいものといえよう。

古川町教育委員会は本調査の実施に先立ち、当区画整理地区内の民有地について開発行為の際には、その都度発掘調査を行うことを古川町向町第二土地区画整理組合との間で確認しており、今後の調査により上町遺跡向町地点の全容が明らかになることを期待する。

（白川 修平）

引用・参考文献

岐阜県吉城郡古川町教育委員会 1991『上町遺跡D地点発掘調査報告書』

第2節 調査の方法と経過

1. 試掘調査（平成1年12月1日～平成2年2月2日）

向町地点の試掘調査は、吉城郡古川町向町字古町・嵯峨山・流（現飛騨市古川町南成町）にかけて計画された古川町向町第二土地区画整理事業地内における町道の新設改良工事部分に伴う道路予定地約9,600m²を対象とした埋蔵文化財の存否確認とその資料作成を目的としている。また、当該地区は上町遺跡D地点や古町廃寺推定地に隣接することから両者との関連も注目されていた。

試掘調査は、古川町教育委員会より委託を受けた株式会社玉川文化財研究所（戸田哲也・河合英夫）が担当した。調査は平成1年12月3日より開始し、平成2年2月2日までの約2ヶ月間で行った。

調査は、道路予定地の中心部分に沿って幅2mのトレンチを設定し、事前に行った事業予定地内の踏査結果に基づき、遺物が密に分布する宮川段丘上位面については10m置きに、疎らな下位面については6m置きに発掘区を設けて対応した。発掘区は2mトレンチに収まる範囲を基本とし、一部耕作中の畠地も存在していたことから必ずしも一定でないが、発掘区は概ね2m四方を目安としている。また、発掘区には道路予定地区の南東隅から算用数字を付して発掘区名称とし、全体で91箇所を調査した。発掘調査は表土層からすべて人力で行い、遺構・遺物が確認できなかった調査区は地山層にあたる第IV層の黄砂層ないし第V層の河岸疊層まで掘り下げて精査し、各発掘区の土層図の作成と写真撮影を行った。12月中は飛騨特有の不順な天候に悩まされたが、翌1月には調査も順調に進み、翌2月1日をもってすべての調査を終了することができた。調査面積は372m²である。試掘調査時の出土遺物はコンテナ（55×39×13cm）で約2箱分に相当する。

91箇所の発掘区のうち、発掘区1～40までが宮川の段丘上位面にあたり、遺構および遺物が濃密に分布することが判明した。また、そこでは遺物包含層の状態も比較的良好で、数時期にわたる遺物を発見した。その概要については別表に示したとおりである（第1表）。

発見された遺構は、堅穴住居跡6軒（発掘区19・20・25・26・37）、集石遺構6箇所（同16・17・21・23・29・35）、ピット群1箇所（同27）、硬化面6箇所（同9～14）、土坑2基（同27）である。堅穴住居跡については上町遺跡の広がりとして捉えられる。時期は伴出遺物から7世紀代と8世紀代、9世紀代の時期に求めることができる。集石遺構については上町遺跡D地点での調査成果から中世の所産と考えられる。硬化面については多々問題を残すが、古町廃寺跡に係わる地業層と考えることもできるが本調査に委ねることとなった。ピット群については上町D地点から確認された古代末ないし中世頃の建物跡になる可能性が推測された。また、土坑についてはプラン確認したのみで詳細は不明であるが、平面形・規模などから考えると古代の掘立柱建物跡となる可能性もある。遺物については、堅穴住居跡から出土した古墳時代後期から奈良・平安時代の須恵器や土師器類を中心とするが、弥生時代後期の土器や中世の陶器類も多少出土している。

一方、段丘下位面については、遺構はまったく確認できず、遺物はわずかに出土したが、いずれも表土中からの出土で遺物包含層は認められなかった。

試掘調査による以上の結果、91箇所の発掘区のうち、21箇所の発掘区から堅穴住居跡、集石遺構、ピット群、硬化面、土坑などの遺構が確認され、これらは宮川の段丘上位面（発掘区1～32、35～40）に限られ、段丘上位面の縁辺部を境に段丘下位面には存在しないことが判明した。

古川町教育委員会（現飛騨市教育委員会）は、この調査結果を受けて岐阜県教育委員会指導部文化

第1表 試掘調査における発掘区分別調査概要一覧

発掘区	遺構	遺物(点数)				土層堆積(深度cm)	備考
		須恵器	土師器	瓦	陶磁器		
1	ビット2					I・III・IV (30)	上町D地点ビット群の広がり
2		1				I・III・IV (60)	発掘区1~31・35~40 河岸段丘上位面
3						I・III・IV (50)	
4						I・III・IV (60)	
5						I・III・(IV)・V (50)	IV層はラミナ状
6						I・III・V (50)	疊起伏?
7						I・III・(IV)・V (45)	IV層はラミナ状
8						I・III・(IV)・V (60)	IV層はラミナ状
9	硬化面					I・II・III (50)	
10	硬化面	5				I・II・III (60)	硬化面は粘土・黄砂により形成
11	硬化面・集石?	2	1			1 I・II・III (40)	
12	硬化面	10	7	12		3 I・II・III (70)	
13	硬化面	27	1			6 I・II・III (80)	
14	硬化面	11	1	1		1 I・II・III (70)	
15		27	2	1		1 I・III・V (45)	疊起伏
16	集石	46	6	1		3 I・II (40)	II層以下未発掘
17	集石	26	7	4		2 I・II・III・IV (50)	
18		13	4			6 I・III・IV (40)	
19	堅穴住居跡2(重複)	11	12	2		1 I・II・III・IV (60)	
20	堅穴住居跡	3	2			2 I・II・III・IV (50)	
21	集石遺構	12	5	1		2 I・II・III (60)	
22		7				2 I・II・III・(IV) ・V (70)	IV層はラミナ状
23	集石遺構	20	2	3		4 I・II・III (40)	
24		11	2	4		3 I・II・III・IV (75)	
25	堅穴住居跡	75	12	1		12 I・II・III・IV (70)	
26	堅穴住居跡	75	6			2 I・II・III・IV (60)	
27	土坑2	64	1			8 I・II・III・IV (60)	
28		1				I・III・IV (40)	
29	集石遺構	17	1	1		3 I・III・IV (40)	
30		13				3 I・III・IV (40)	
31		8				1 I・IV (40)	
32		2				2 I・IV (50)	発掘区32~34は河岸段丘下位面
33		1	2			I・IV (20)	
34						1 I・IV (20)	
35	集石遺構	20	1			4 I・III・IV I・III・IV	
36	堅穴住居跡	1					
37	堅穴住居跡	52	4	1		6 I・III・IV (60)	
38		58	8			8 I・III・IV I・III・IV	
39	焼土跡	27	3			4 I・III・IV I・III・(IV)・V (40)	焼土跡はIII層中層 IV層はラミナ状
40		15	1				(30)
41						I・IV (30)	発掘区41以降は河岸段丘下位面
42						I・IV (40)	41以降の深度は表土層(耕作土) の厚さを示す
43		2	1			I・IV (40)	調査深度現地表下12m
44		1				I・IV (40)	
45		1				2 I・IV (30)	
46		1	4			I・IV (20)	
47						I・IV (20)	

発掘区	遺構	遺物(点数)				土層堆積(深度cm)	備考
		須恵器	土師器	瓦	陶磁器		
48					4	I・IV (25)	
49		2	3			I・IV (20)	
50						I・IV (25)	
51						I・IV (25)	
52						I・IV (20)	旧用水路(1950年代)
53		3				I・IV (50)	調査深度現地表下1.2m
54					1	I・IV (30)	
55			5			I・IV (20)	
56						I・IV (40)	
57		1			1	I・IV (50)	
58			2			I・IV (40)	
59		2	1			I・IV (50)	
60			2			I・IV (25)	
61		3	1			I・IV (40)	
62			1		2	I・IV (20)	
63		1	1			I・IV (20)	
64		1	2			I・IV (25)	
65		1	1			I・IV (25)	
66			1			I・IV (20)	
67						I・IV (20)	
68		1				I・IV (25)	
69		1	1		2	I・IV (30)	
70			3		2	I・IV (20)	
71		2	1			I・IV (20)	
72			1		4	I・IV (30)	
73						I・IV (25)	
74						I・IV (40)	
75			2		1	I・IV (20)	
76			1		1	I・IV (25)	
77					1	I・IV (20)	
78						I・IV (20)	
79						I・IV (10)	
80					2	I・IV (20)	
81			1			I・IV (30)	
82			1		2	I・IV・V (35)	礫起伏?
83				1		I・IV (30)	調査深度現地表下1.2m
84			2		4	I・IV (40)	
85					1	I・IV (30)	
86			1			I・IV (40)	
87						I・IV (35)	
88			2		1	I・IV (35)	
89			1			I・IV (30)	
90			1		1	I・IV (20)	
91			1		1	I・IV (20)	

課と協議を重ねた結果、河岸段丘上位面に計画された町道改良工事（土地区画整理事業）に伴う道路予定地約2,200m²については埋蔵文化財の事前調査として本調査を実施することを決定し、また段丘下位面の調査については本調査の対象から除外することとした。

2. 本調査（平成2年6月1日～平成2年12月27日）

本調査では試掘調査の調査結果を受けて、遺構・遺物を確認した段丘上位面の町道新設改良部分に伴う道路予定地部分約2,200m²について発掘調査を行うこととなった。古川町教育委員会は、直ちに調査団（团长戸田哲也／玉川大学文学部非常勤講師・日本考古学協会会員）を組織し、本調査に対処することを決定した。調査は平成2年6月1日から開始し、平成2年12月27日までの約7ヶ月間にわたる2,200m²の本調査がスタートすることとなった。

調査区の設定にあたっては、調査対象地区が十字に交差した道路予定地部分であるとから十字路を起点に調査区を4つに区分してA～D区と命名した。A区は北西から南東に延びる十字路の北西部、B区は十字路を跨ぎ北東から南西に延びる道路部分、C区は北西から南東に延びる十字路の南東部分、DはC区の南東側延長部分である。

調査は平成2年6月1日から開始し、調査事務所・休憩所の設営、調査器材の準備、安全対策等を講じたのち、A区、B区、C区、D区の順で発掘調査を進めることとなった。

発掘区の設営にあたってはグリッド法を採用し、北西から南東に延びるA・C区道路予定地部分の北東側法面を基準に調査区全体を4mグリッドで網羅した。グリッド名称は、A区北西端から南東側のC・D区へは算用数字（0～79）、直交するB区北東端から南西側へはアルファベット（A～W）で付し、両者の組み合わせにより発掘グリッド内を表示区分した。

発掘調査は、各区とも試掘調査による結果をもとに、重機で表土層（耕作土層）を除去したのち、人力による遺構および遺物の確認作業を行った。遺構は試掘調査の所見どおり、中世の陶磁器などが伴出する堅穴状遺構や溝状遺構、土坑、集石土坑、配石遺構、ピット群などが発見された。とくに、配石遺構は規模の大きなものであり、航空測量を併用して記録を行った。遺物からは近世に所属するものも若干含まれていた。

古代の遺構については中世の遺構調査が終了したのち、適宜確認に努めて調査を行った。その結果、弥生時代後期末・古墳時代後期・奈良・平安時代に該当する堅穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が発見された。また、期待されていた古町庵寺跡については発見できなかつたが、より限定された範囲内での検討が可能となつた。

発掘調査はA区より順次B区・C区・D区と実施し、各区の遺構の精査・写真撮影・実測を経て、それぞれの発掘区の埋め戻しを行った。平成2年12月27日には、施設および調査器材の撤収をもってすべての発掘調査を終了した。調査面積は2,200m²である。発見された遺構を大まかにまとめると、古くは弥生時代後期末・古墳時代後期・奈良・平安時代の堅穴住居跡計27軒、他に掘立柱建物跡1棟、ピット群6箇所。中世以降では、堅穴状遺構1基、溝状遺構3条、焼土跡1基、土坑4基、集石土坑49基、配石遺構8基、配石群、ピット群などである。

翌平成3年には、遺構図の整理、遺物洗浄・注記、接合・復元、遺物実測・拓本などの基礎整理や二次整理を行つたが、報告書作成業務については一旦中断することとなつた。

3. 報告書整理作業（平成23年7月29日～平成24年3月31日）

飛騨市は平成23年度に至って、未報告分であった「上町遺跡向町地点」の報告書の刊行について、委託業務案件〔埋蔵文化財発掘調査等事業－件名飛市教委13号、遺跡名－上町遺跡（向町南部地点）〕に基づく二次整理作業等委託業務の実施を決定し、飛騨市教育委員会事務局より平成23年7月28日に業務委託を受けた株式会社玉川文化財研究所がその整理業務を担うこととなった。

業務期間は、平成23年7月29日から平成24年3月31日までの9ヶ月間である。本業務の管理技術者として河合英夫、副管理技術者として北平朗久が担当することとなった。

上町遺跡向町地点の二次整理業務として以下の整理作業を行った。全測図・各遺構図などの作成、同トレースと版下作成、実測遺物のトレースと版下作成、遺構写真の焼き付けと版下作成、実測遺物の写真撮影と版下作成、そして原稿執筆、最後に割付を行い業務を終了した。

引用・参考文献

- 岐阜県教育委員会 1990『改訂版岐阜県遺跡地図』
- 岐阜県吉城郡古川町教育委員会 1989『上町遺跡C地点発掘調査報告書』
- 岐阜県吉城郡古川町教育委員会 1991『上町遺跡D地点発掘調査報告書』
- 岐阜県古川町教育委員会 1994『上町遺跡トヨタ地点・O地点・栗原センター地点発掘調査報告書』
- 古川町教育委員会 2001『上町遺跡金子地点・水見地点発掘調査報告書』

第3節 遺跡の層序

町道改良工事(土地区画整理事業)に伴う上町遺跡向町地点の試掘調査区は、宮川右岸の河岸段丘上位面と段丘下位面に位置している。既述したように、上位面(発掘区4~31・35~40)では良好な土層堆積がみられるのに対して、下位面(発掘区32~34・41~92)では表土直下すぐに地山の第IV層黄砂層ないし第V層河岸礫層となっていた。深掘り調査を実施した段丘下位面の発掘区63では澁水によって形成されたと考えられる斑鉄層(チヨコ帶)が観察された。また、基質中にも鉄・マンガン斑がみられることから下位面では宮川の氾濫が近年に至るまでくり返されてきたことを物語っている。

事業地区内の現況は主に水田域であり、段丘上位面と下位面にわかれている。それらは一見すると平坦のようにもみてとれるが、土層図からもわかるように過去の土地改良事業による影響が窺われる。遺跡地の全体的な地形としては、宮川の流路に沿ってなだらかに傾斜しながら多少の凹凸面をもって変化していることが感じられる。向町地点の土層堆積状態は、こうした影響に制約されながら河川の運搬作用とその人為的な変化によって形成されたものと考えられる。

土地区画整理事業区域の北西側の小字名「流」^{ながれ}は、こうしたことによるのであろう。なお、土層の堆積状態は上町遺跡C・D地点の基本層序に対応し、層名もそれに準拠している(古川町教育委員会 1989・1991)

以下、試掘調査の土層断面から本調査に移行したB区(発掘区25)、C区(同12・20)、D区(同9)、および本調査区から除外された段丘下位面(同43・63・91)の土層図を示して本地区的説明を行う。

第I層 揭灰色~黒褐色土(10YR4/1~3/2)。表土層(耕作土)。水田土壤で上位の作土層(a層)と下位のスキ床層(b層)に分かれ。一部は畑として使用。層厚は20~50cm。

第II層 黒褐色土(10YR2/2)。砂質植壟土。亜角塊状。上町遺跡C・D地点では層上位と層下位に区分できたが、上町向町地点では区分できなかった。土性はやや密で粘性を有する。本層は遺構が存在する段丘上位面に分布し、段丘下位面には認められない。中世から近世の遺物が含まれる。層厚は15~20cm。I層との層界は平坦で明瞭である。

第III層 黒色土(10YR2/1)。砂壟土。亜角塊状。層上位(a層)と層下位(b層)に分かれ。上位では ϕ 0.2~0.8mmの亜角礫5%・黄色粒子2%・赤色粒子1%を含む。層下位は上位に比べてややザラつく。層上位のa層が遺構の切り込み面となっており、この層中が古墳時代から奈良・平安時代までの遺物が含まれる。層厚は15~25cm。

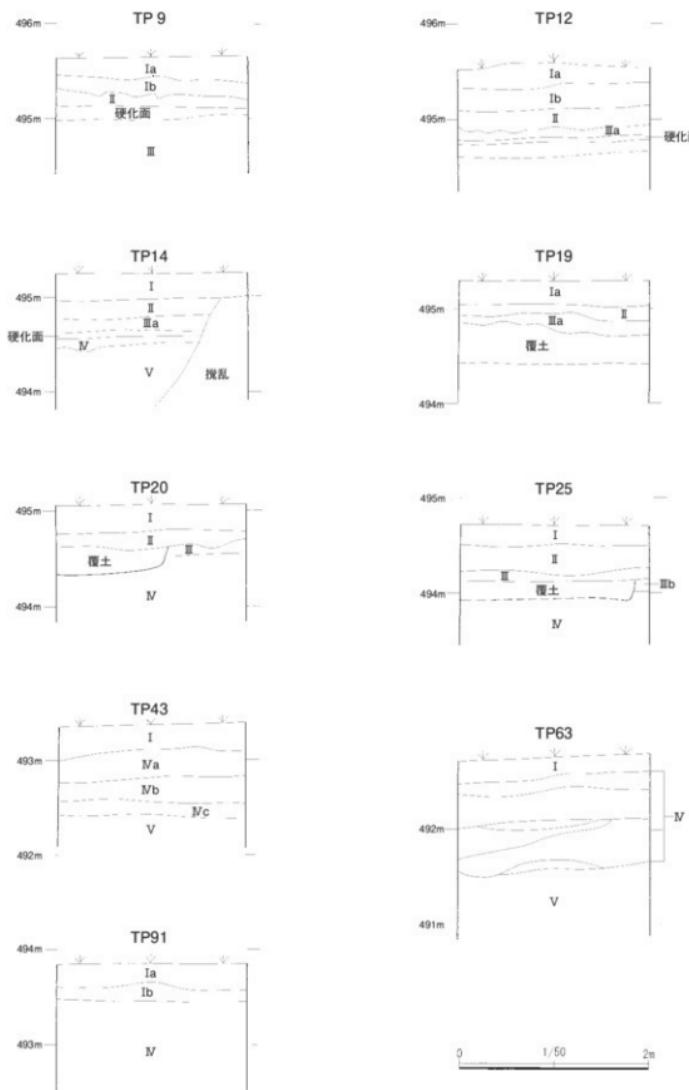
第IV層 にぶい黄橙色土(10YR4/3)。砂土。單粒状構造。いわゆる地山層で、黄砂(層)と呼称。遺構の大半は本土層中に掘り込まれている。段丘下位面では1.5m以上の堆積が認められ、斑鉄を含み、明褐色(7.5YR5/6)を呈する。無遺物層。層厚は段丘上位面では10~20cm、下位面では60~100cm以上。

第V層 河岸礫層。上町遺跡内では礫起伏となる部分が認められ、窪みには第IV層の砂土が堆積し、また層中にはシルトや砂が互層となっており、宮川の河岸礫層としての堆積物と考えられる。

引用・参考文献

岐阜県吉城郡古川町教育委員会 1989『上町遺跡C地点発掘調査報告書』

岐阜県吉城郡古川町教育委員会 1991『上町遺跡D地点発掘調査報告書』



第3図 上町遺跡向町地点の層序柱状図（1/50）

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的環境

上町遺跡向町地点は、岐阜県飛騨市古川町南成町1～3・5～7丁目ほか（旧吉城郡古川町向町字古町109-11ほか嵯峨山・流）に所在し、JR高山本線飛騨古川駅の南方約1.2kmに位置する。本地点に先行して調査が行われた上町遺跡D地点は当該地の南東側に隣接し、現在の国道41号線上に位置する。

遺跡が所在する岐阜県飛騨市は県の最北端にあたり、北は富山県、南は高山市、西は白川村と接し、県庁所在地の岐阜市から北へ150km、高山市の中心部から北へ15km、富山市の中心部から南へ70kmに位置する。平成16年2月1日に、吉城郡内の古川町、河合村、宮川村、神岡町の2町2村が合併し、飛騨市が誕生した。市の周囲は海拔3,000mを超える北アルプスや飛騨山脈などの山並みに囲まれ、総面積792.31km²のうち、大半（92%）が森林で占められる。

市内で唯一のまとまった平地は、飛騨市の南端にある古川町から旧国府町（現高山市国府町）に広がる古川盆地である。この盆地は宮川と荒城川の合流点を中心に古川町と国府町に跨り、古川町野口北方の飛騨変成岩地帯の隆起に伴って宮川の浸食が止まり、河岸域の低地に堆積した砂礫層によって形成された。現在の市街地や耕作地は、その流域の海拔500m前後の河岸段丘の平地を中心として小河川の氾濫によって形成された三角州性の沖積低地や扇状地などの上につくられており、盆地の周囲は1,000m前後の山々で囲まれている。

上町遺跡向町地点は、古川町向町第二土地区画整理事業の完成に伴って、向町から南成町に町名が変わったが、当時は向町字古町、嵯峨山、流の三地区に属していた。また、かつて向町地区からは、礎石や瓦類の出土が伝えられていた。近年では国道41号線の国府古川バイパスの建設が契機となって上町C・D・O地点の調査や、国道41号沿いでトヨタ地点や金子地点、氷見地点などの調査が行われ、これら一連の調査により上町地区を中心とする宮川右岸の段丘崖から旧国道41号線（県道古川国府線）までの微高地に弥生後期末葉以降、古墳時代後期、奈良・平安時代、さらには中近世に至るまでの多岐にわたる遺跡の存在が知られるようになってきた。

また、今回の調査によって遺跡の北西限が上町と隣り合う向町字古町、嵯峨山付近まで及ぶことが明確となり、現状では宮川の流路に沿って上町栗原神社付近までの長さ約1.5km、幅約500mにも及ぶ飛騨地方屈指の遺跡であることが明らかになった。

ここで上町向町地点の立地についてもう少し概観してみると、隣接する上町D地点やトヨタ地点と同様に宮川の右岸域に所在し、河川の流路に沿ってやや勾配が認められるものの差はほとんどなく、周囲は海拔496m前後のほぼ平坦な地形を呈する。また、流路に調和するように遺跡の南西側の端で2mほどの段丘崖となって宮川の氾濫原に至る。段丘崖と宮川とは70～180mの距離を取っており、遺跡地と現河床面とは5～6mの差が認められる。一方、遺跡の対岸は宮川による浸食を絶えず受け、急峻な地形となって立ち上がっており、この中腹には中世城郭として知られる古河城（蛤城）があり、そこに立てば眼下に盆地を眺望することができる。

調査当時は、風光明媚な田園地帯であったが、現在は国道41号線の国府古川バイパスの開通により店舗や住宅地が増え、すでに当時の面影は失われている。

第2節 周辺の歴史的環境

飛騨市古川町内には、縄文時代から中近世に至る時代の遺跡が数多く発見されているが、ここでは上町遺跡向町地点に関連する盆地内の古墳時代以降、奈良・平安時代、および中世までの主な遺跡について概観したい。

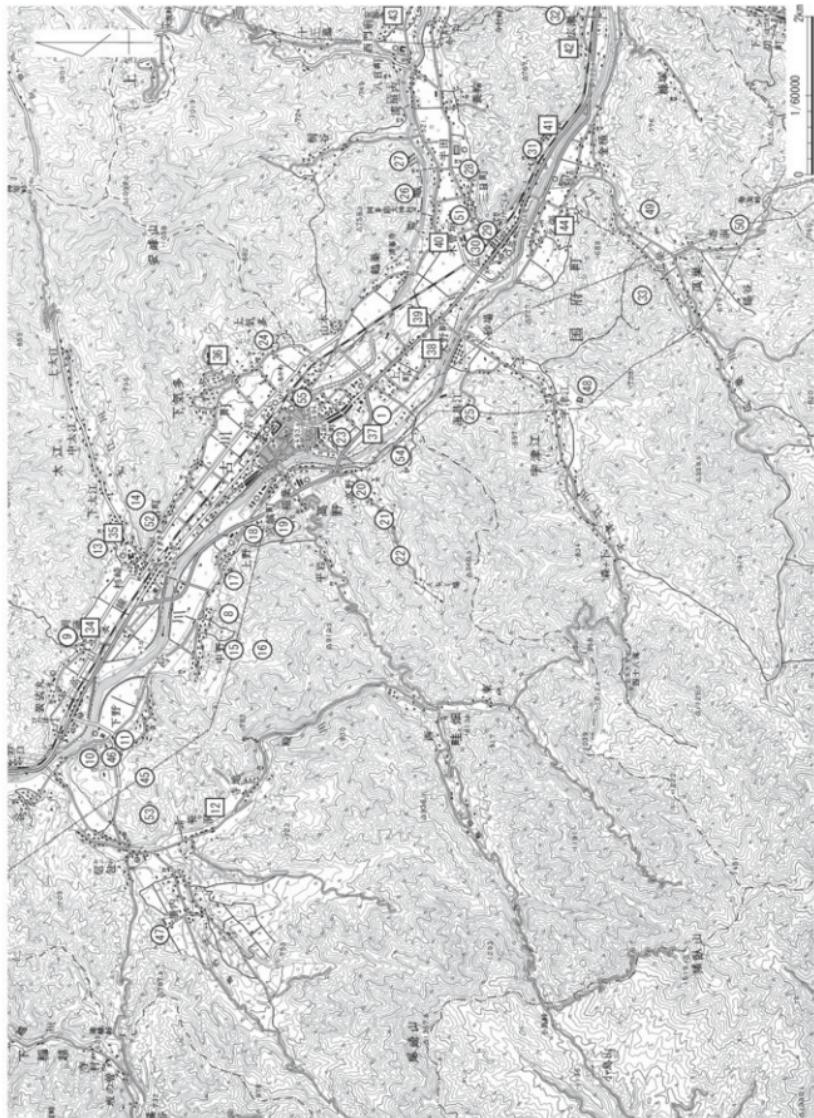
古川盆地が古墳時代以降、高山盆地とともに飛騨の中心をなしていたことは古墳の数や古代寺院の様相からも窺い知ることができる。はじめに古墳の数について概観すると、現在までに知られているだけでも古川町で103基、国府町で387基を数え、盆地内の古墳の数はすでに消滅したものも含めると優に500基を超すと推測されている（岐阜県教育委員会 1990、国府町史刊行委員会 2007）。これらの多くは横穴式石室を内部主体にもつ後期古墳とみられているが、発掘調査が行われた古墳がきわめて少ないことから、その具体相については今後の課題である。

盆地内における古墳の成立の時期については、近年国府町の南垣内遺跡で3基の円墳が調査され、5世紀初頭のものであることがわかつてき。古川町の上町D地点③では一辺の中央に陸橋をもつ、古墳時代前期初頭の方形周溝墓の存在も明らかにされており、飛騨に前期古墳が確認される日もそう遠くないものと思われる。また、近年国府町の三日町大塚古墳⑦では周溝の確認により前方後円墳の存在が確認され、飛騨地域では最大の古墳であることがわかつてき（国府町史刊行委員会 2007）。古墳の築造年代については主体部の調査を待たなければならぬが、墳形の形状から4世紀代に遡る可能性も十分あり、飛騨における前期古墳の存在もいよいよ現実味を帯びてきたといえる。

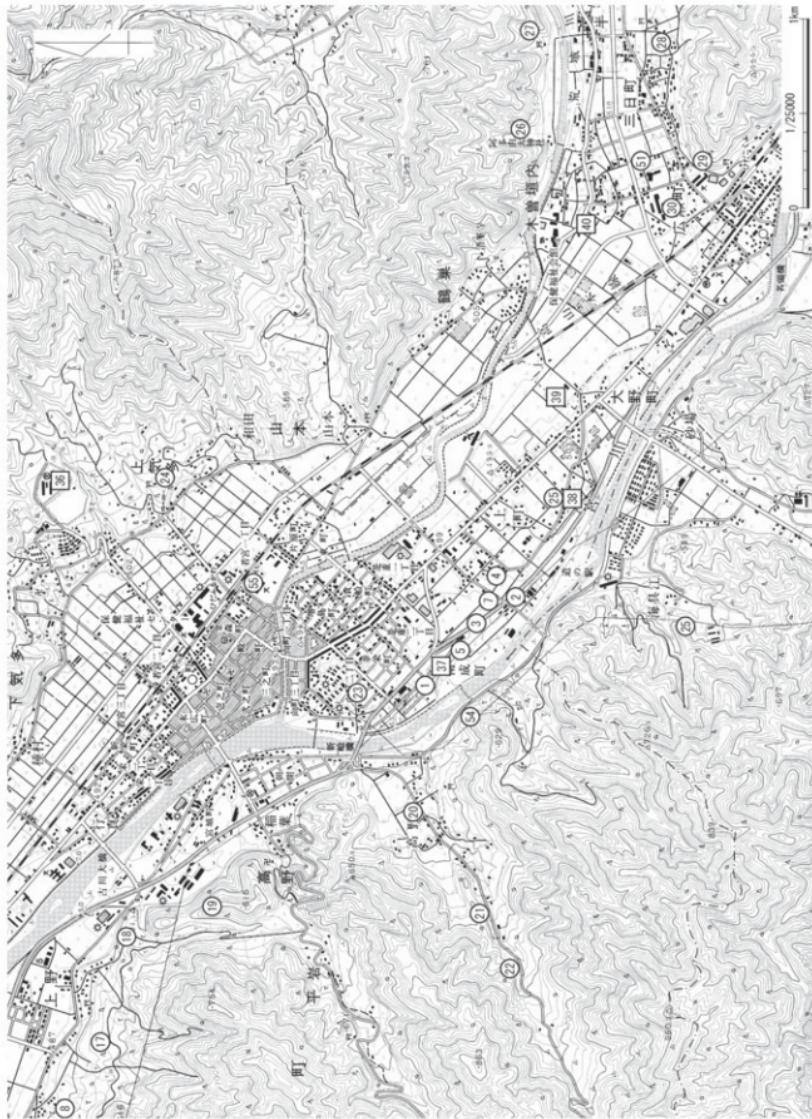
前述までの資料が公にされるまでは、飛騨地方で最古の古墳とされてきた国府町広瀬の亀塚古墳は5世紀前半頃に位置づけられてきた大形の円墳である。明治28年に小学校建設により削り取られたが、明治期の字絵図によると径60mにも及ぶと考えられている。埋葬主体は、当時の記録によれば割石を本口積みした堅穴式石室で、甲冑・鉄刀・鉄劍・鉄鋒・鐵鎌などの副葬品が出土している（国府町史刊行委員会 2007）。一方、高山盆地における初期古墳の事例では、冬頭王塚古墳や赤保木5号墳などの小円墳がわずかに知られるのみである。埋葬主体はいずれも川原石積の堅穴式石室で、5世紀中頃から後半の年代が与えられている（高山市教育委員会 1971・1985）。なお、高山盆地に前方後円墳は、現在までのところ確認されていない。

このように飛騨における古墳時代初期の展開をみると、古川盆地でもとくに旧国府町荒城谷寄りの南側に面する平野部から緩斜面にかけて築造されていく傾向が窺え、この地域が飛騨における初期の古墳を築造し得る豪族の中心基盤地域であったと考えられる。

盆地内の後期の様相は、古川町信包の信包八幡神社古墳⑪に示される定型化した大形の前方後円墳が注目される。明治24年に主体部の発掘が行われ、その際に勾玉をはじめとする馬具や武器類などの副葬品が出土している。これらの資料は京都国立博物館に保管され、近年八賀晋氏による測量調査の成果とともにまとめられている（八賀 1995、飛騨市教育委員会 2004）。これらの調査成果によれば、全長64mの前方後円墳で、石室は扁平な割石を小口積みにして構築した無袖式の横穴式石室である。本古墳の年代観は馬具や鐵鎌の型式から6世紀初頭に位置づけられおり、この年代観を飛騨の横穴式石室の導入時期としている。一般に飛騨の古墳文化を考えるとき、美濃と飛騨の対比で捉える向きが多いが、扁平な割石を用いた小口積みの構築技術は美濃地方で確認できないことから藤田富士夫氏は石川県下の堅穴系横穴式石室と関連づけて説明している（藤田 1990）。この手法で築造された横穴式



第4図 上町遺跡の位置と周辺の主な道路 1 (1/60,000) (国土地理院 1994 「飛驒古川」 1/50,000を縮小)



第5図 上町遺跡の位置と周辺の主な遺跡2 (1 /25,000) (国土地理院2001「飛騨古川」1 /25,000)

第2表 上町遺跡と周辺の主な遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	種別	時代	備考
①～⑦	上町遺跡	G06F06433	古川町上町五反田	集落跡	古墳～中世	S62～H3年・H10年調査
①	上町向町地点	G06F06433	古川町上町南成町	集落跡	古墳～中世	H2年調査
②	上町C地点	G06F06433	古川町上町	集落跡	古墳～古代	S62～63年調査
③	上町D地点	G06F06433	古川町上町	集落跡	古墳～中世	S63年調査／官衛開闢
④	上町O地点	G06F06433	古川町上町	集落跡	奈良	S62年調査
⑤	上町トヨタ地点	G06F06433	古川町上町	集落跡	古墳～中世	H2年調査
⑥	上町栗原センター地点	G06F06433	古川町上町	集落跡	古墳～古代	H2年調査
⑦	上町金子・永見地点	G06F06433	古川町上町	集落跡	古墳～古代	金子H3年・永見H10年調査
⑧	中野山越遺跡	G06F01615	古川町中野山越	集落跡	縄文・平安	市史跡・S51～54年調査
⑨	岡前遺跡	G06F0150	古川町杉崎御構	集落跡	縄文・平安	H6年調査
⑩	羽根坂古墳群	G06F06526～06529	古川町下野中山	古墳	1～4号（円墳）	
⑪	信包八幡神社古墳	G06F01049	古川町信包八幡	古墳	古墳	県史跡（前方後円墳）
⑫	西ヶ洞廻寺跡	G06F06522	古川町寺地西ヶ洞	寺院跡	平安	H17年調査
⑬	太江多度古墳群	G06F0155～00157 06481～06485	古川町太江多度	古墳	古墳	1～8号（円墳）
⑭	太江中ヶ野古墳群	G06F01611～00163	古川町須磨東側	古墳	古墳	1～3号（円墳）
⑮	大洞平古墳群	G06F0166～00168 中野大洞平遺跡 06487～06488	古川町中野大洞平	古墳	古墳	円墳（3・4号）・方墳（1・2・5号） 県史跡（1・2号）
⑯	中野山越古墳群	G06F06536～06547	古川町中野大洞	古墳	古墳	1～12号（円墳）
⑰	上野上洞古墳群	G06F01619～00185	古川町上野上洞	古墳	古墳	1～17号（円墳）
⑱	上野井西古墳群	G06F06549～06555	古川町上野井西	古墳	古墳	1～7号（円墳）
⑲	上野城山古墳群	G06F01688～00192	古川町上野城山	古墳	古墳	1～5号（円墳）
⑳	高野溝添古墳	G06F01918	古川町高野溝添	古墳	古墳	前方後円墳
㉑	高野水上古墳	G06F00199	古川町高野水上	古墳	古墳	県史跡（円墳）
㉒	高野光景寺古墳	G06F02020	古川町高野光景寺988	古墳	古墳	県史跡（円墳）
㉓	五阿弥塚古墳	G06F01916	古川町向野2.7	古墳	古墳	円墳
㉔	上氣多古墳	G06F06496	古川町上氣多柳岡	古墳	古墳	円墳
㉕	海具江古墳	G06E00213	国府町宇佐江海具江	古墳	古墳	円墳
㉖	笛ヶ洞古墳	G06E00307	国府町木原山内籠笛ヶ洞	古墳	古墳	市史跡（円墳）
㉗	仲洞古墳群	G06K00205～00206	国府町牛田碑洞	古墳	古墳	1・2号（円墳）
㉘	三日町大塚古墳	G06K00234	国府町三日町塚の前	古墳	古墳	前方後円墳
㉙	十王堂古墳	G06K00232	国府町十王堂	古墳	古墳	円墳
㉚	龜塚古墳	175-342	国府町広瀬町	古墳	古墳	M24年調査
㉛	こうち野古墳	G06K00227	国府町広瀬町こうち野	古墳	古墳	県史跡（前方後円墳）
㉜	奥牟利古墳群	G06K00253～00263	国府町八瀬湖牟利	古墳	古墳	1～11号（円墳）
㉝	かうと洞古墳群	G06K00218～00219	国府町瓜栗かうと洞	古墳	古墳	1・2号（円墳）
㉞	杉崎廻寺跡	G06F0151	古川町杉崎淡原	寺院跡	白鳳	県史跡／日3～7・17・21・22年調査
㉟	寿楽寺廻寺跡	G06F06508	古川町太江左近	寺院跡	白鳳	別名：左近魔寺跡 H10～12年調査
㉟	太江道跡			集落跡	白鳳	別名：左近魔寺跡 H10～12年調査
㉞	洪福寺跡	G06F06086	古川町上氣多沢	寺院跡	白鳳	グランド造成により毀失
㉞	古町廻寺跡	G06F06492	古川町向野古町	寺院跡	白鳳	瓦が多量に出土
㉞	上町廻寺跡	G06F06085	古川町上町久中	寺院跡	白鳳	別名：久中魔寺跡
㉞	塔ノ腰廻寺跡	G06K00211	国府町広瀬町	寺院跡	白鳳	別名：大窓魔寺跡
㉞	堂前魔寺跡	134-559	国府町木原境内	寺院跡	白鳳	
㉞	石楠庵寺跡	G06K00225	国府町広瀬町石楠	寺院跡	白鳳	S60・61・63・H1年調査
㉞	光寿庵跡	G06E00248	国府町八瀬湖屋敷内	寺院跡	白鳳～平安	市史跡
㉞	安国寺廻寺跡	G06K06089	国府町八瀬町西門前	寺院跡	奈良	
㉞	名張魔寺跡	国府町名張	寺院跡	奈良		
㉞	信包中原田薬師	G06F06347・06516	古川町信包中原田264	古墳跡	奈良	瓦陶兼業窯／S54年調査
㉞	下野羽根坂古墳	G06F06525	古川町下野中山	古墳跡	奈良	須恵器窯
㉞	信包塙尾廻跡	G06F06515	古川町信包塙尾	古墳跡	奈良	須恵器窯
㉞	芦谷薬師	G06K06088	国府町芦谷江	古墳跡	奈良	瓦陶兼業窯／丸山窯
㉞	釜洞薬師	G06K06087	国府町釜洞	古墳跡	奈良	瓦陶兼業窯
㉞	瓜栗わせ洞古墳	G06K06562	国府町瓜栗下り谷	古墳跡	奈良	瓦陶兼業窯／S53年調査
㉞	半田田内遺跡	G06K06563	国府町半田田内	集落跡	古墳～平安	S61・H1年調査
㉞	小鳥城跡	G06F00164	古川町野沼前平	城郭跡	中世（京町）	県史跡
㉞	向小島城跡	G06F00167	古川町信包轟	城郭跡	中世	県史跡
㉞	古川城跡	G06F02021	古川町高野城山	城郭跡	中世（京町）	県史跡・別名：蛤城
㉞	埋鳥城跡	G06F00195	古川町野明8	城郭跡	安土桃山	県史跡／日9・16・17・20・21年調査

岐阜県道路地図・国府町史をもとに作成 凡例 古川町・飛騨市・国府町・高山市

石室は信包八幡神社古墳を初現として、高山市小丸山古墳や国府町かうと洞2号墳、うしろご3号墳、古川町沢2号墳、さらに7世紀代の小石室墳などにも採用され、系譜的な繋がりが指摘されている。

また、飛騨地方における古墳で注目されるのは7世紀代、とくに終末期の頃の横穴式石室墳である。その多くは円墳であるが、7世紀後半頃の築造とみられる4基の方墳は注目される。方墳はいずれも宮川左岸の山麓に位置し、古川町中野の大洞平1号墳・2号墳・5号墳[◎]の3基と、国府町宇津江の海具江古墳を加えた計4基で、これらは地域的にごく限られた範囲に築かれている点でも注意される。これらの方墳や当該期の円墳でとくに注目されるのは、巨石を用いて築造された横穴式石室墳である。盆地内でもっとも古いものとしては、県下最大の横穴式石室墳である国府町広瀬のこう岬古墳[◎]があげられる。石室は全長18m、高さ3m以上の規模をもつ古墳で、巨大化と巨石化を特徴としており、近年の地下探査の結果では前方後円墳の可能性が指摘されている（国府町史刊行委員会 2007）。

巨石を横穴式石室の石材にする例は7世紀後半の古墳に多くみられるが、先の海具江古墳の場合は奥壁に巨石2枚、側壁に方2mの巨石を含む8石、天井は2石で架構し、古川町高野の水上古墳[◎]の場合は奥壁に巨石1枚、左壁は上下2段積みで6石、右壁は下段2石・上段4石、天井は2石で架構している。古川町内では高野の光泉寺古墳[◎]や中野の大洞平1号墳[◎]などでも知られており、巨石を用いて構築された古川盆地の石室墳は、近畿の後期古墳と比べても遜色のない石室といえよう。なお、国府町のかうと洞1号墳[◎]では玄室に巨石を用いているが、渓道は割石を小口積みした形態である。

この他に盆地の山塊や山腹には小円墳からなる後期の群集墳が多く確認されている。前方後円墳より続く続縦性には乏しいが、これらの分布をもとに盆地内の地域圈を類推すると、南東側では荒城谷の開口部付近を中心とする広瀬・半田一帯、宮川左岸の海具江一帯、南西側では宮川左岸の高野一帯、やや下流の上野・中野一帯、北西側では下野・信包を中心とする一帯、北東側では宮川右岸の太江を中心とする一帯などの小地域を基盤とする、それぞれまとまりをもっていたことが看取される。

次に本地点とも関連する飛騨地方の古代寺院についてみると、古川と高山の両盆地における寺院の分布は、白鳳期の寺院では古川盆地に11ヶ寺（杉崎庵寺[◎]・寿楽寺庵寺[◎]・沢庵寺[◎]・古町庵寺[◎]・上町庵寺[◎]・塔ノ腰庵寺[◎]・堂前庵寺[◎]・石橋庵寺[◎]・光寿庵跡[◎]・安国寺庵寺[◎]・名張庵寺[◎]）、高山盆地に3ヶ寺（三仏寺庵寺・東光寺跡・大輪寺跡）の計14ヶ寺が知られる。これらに飛騨国分寺と尼寺を加えると、実に16ヶ寺を数え、これらの寺が狹小な飛騨の地に菴を並べていたことになり、飛鳥や奈良の寺院建立の姿を彷彿させる。この分布からもわかるように初期の寺院造営の中心は古川盆地であったことが窺えるとともに、寺院造営主体者の地域領域の姿がみえるようである。

これらのうちで、調査が行われた寺院は、古川盆地では杉崎庵寺[◎]・寿楽寺庵寺[◎]・古町庵寺[◎]、石橋庵寺[◎]の4ヶ寺と、高山盆地では三仏寺庵寺の1箇所のみである。

杉崎庵寺[◎]は、古くから金堂の礎石と二重孔式の塔心礎の存在が知られており、県営土地改良総合整備事業が計画されたために、平成3年度から範囲確認に発掘調査が実施され、白鳳期に創建された主要伽藍が明確になるとともに、伽藍中枢部の区画施設や内部に敷設された石敷などが明らかにされた。また西側の排水施設からは郷名が記された郡符木簡が出土しており、行政末端機構に結びつくものとしてとくに注目された。また、最近では寺域の確認調査が行われ、寺院空間の様相が判明しつつある（飛騨市教育委員会 2012）。

寿楽寺庵寺[◎]は、杉崎庵寺跡の東へ約1.5kmに位置する。平成10年から12年にかけて岐阜県文化財保護センターにより調査が行われ、飛騨ではもっとも古い寺院の一つと考えられており、その創建は

7世紀後半と推測されている。遺構は、講堂跡とそれに取りつく回廊跡が発見されている。遺物では、「高家寺」と墨書きされた郷名を冠した須恵器坏が注目される。また、鷹尾や塑像、蹄脚硯、三足火舎など寺院に関わる資料も多く出土している。素弁系蓮華文軒丸瓦は創建期の軒丸瓦で、この瓦は西へ4kmほどの信包中原田窯跡[◎]で焼かれおり、「一本作り軒丸瓦」という特徴的な作りのものである。この軒丸瓦は、近江衣川庵寺、信濃明科庵寺、甲斐天狗沢瓦窯などにも分布しており、同じ系統の瓦が畿内（近江）から延びる交通路（東山道／駿路）に沿って点在することは瓦の伝播を考える上でも注目される（柳原ほか 1990）。また、尾張元興寺や河内野中寺と同系の忍冬文軒丸瓦も数点であるが出土しており、この事例も中央との関わりが窺えるもので、飛驒で最古の寺といわれる所以である。

古町庵寺跡は、上町遺跡D地点③の調査で瓦類がまとまって出土したことから、岐阜県遺跡地図の改訂版で命名された庵寺跡である（岐阜県教育委員会 1990）。寺院関連の遺構は確認されなかつたが、出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦は盆地南部の芦谷窯跡（丸山窯跡）[◎]や瓜巣わせ洞窯跡（下り谷窯跡）[◎]などからの供給であるのに対して、盆地北部の杉崎庵寺跡や寿楽寺庵寺跡などの供給元である信包中原田窯跡[◎]の供給領域とは異なっている。

石橋庵寺跡[◎]は、国府町上広瀬に所在する寺院推定地で、戦前から塔心礎や人物壁画が線刻された平瓦が知られており、昭和60年代に調査が行われたが寺院に関わる遺構は発見されていない。また、飛驒地方では初めての畿内土師器が出土している。

高山盆地では三仏寺庵寺跡がその代表例である。寿楽寺庵寺跡と並んで飛驒地方ではもっとも古い寺院跡の一つとみられている。創建年代は寿楽寺庵寺跡と同様に7世紀後半に遡ると考えられており、「大寺山田寺」と箋書きされた平瓦も出土しており、後の官の寺として性格をもつものもみられる。

飛驒に寺院があったことが、初めて文献に登場するのは『日本書紀』朱鳥元年（686）の大津皇子の謀反に連座して新羅僧行^{こうこう}が「飛驒の伽藍」へ移配されたという記事である。これが事実であれば、7世紀後半には中央にまで知られた寺院が飛驒にあったことがわかる。飛驒はまた、古代にあっては木工技術を背景に、調庸を納める代わりに木工が交替で京師に勤番し、造宮省や木工寮で各種建物の造営に從事する「匠丁の國」としても知られ、大宝令の賦役令斐陀国条は飛驒国のみに適用された、きわめて例外的な規程であった。

狭い盆地内に伽藍が立ち並ぶ景観は、当地域の先進性の象徴ともなっているが、律令制下における飛驒の特殊性を考慮すれば、賦役令斐陀国条にみえる工匠との関係が想定されるのである。

大宝2（702）年に大宝律令が施行され、飛驒国は東山道に属し、大野郡と荒城郡からなる下国で、国府の所在地は明確ではないが、高山市内に比定する説が有力である。国分寺は高山市内の現国分寺の場所にあったとみられ、国分尼寺跡はその西方の現辻ヶ森三社において金堂跡が見出されている。この頃になると政治や行政の中心は古川盆地から高山盆地に移ったものと考えられる。

これらの寺に瓦を供給した瓦窯としては、古川町では信包中原田窯跡[◎]、国府町では芦谷窯跡[◎]や釜洞窯跡[◎]、瓜巣わせ洞窯跡[◎]などがあり、いずれも瓦陶兼業窯と考えられている。町内の須恵器窯としては、下野羽根坂窯跡[◎]、信包塙屋窯跡[◎]などがある。

一方、古墳や寺院関連以外で時期的に重複する遺跡として、古川町内では上町遺跡①、太江遺跡[◎]、岡前遺跡②、杉崎庵寺跡[◎]、中野山腹遺跡③、中野大洞平遺跡[◎]などの調査事例がある。

上町遺跡①は、国道41号線の国府古川バイパスの新設工事が契機となって発見された遺跡である。昭和62年以来今回の向町地点を含めると、これまでに8地点の発掘調査が行われ、調査面積はすでに

15,000m²を超えており、古墳時代から中近世にかけての遺構が分布しており、遺跡は東西約1.5km、南北約500mにわたると推測される（古川町教育委員会 1991）。古代の遺構としては、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多く確認された。D地点で発見された大形の掘立柱建物跡は、律令制下の地方支配の拠点である郡衙関連施設もしくは豪族居宅をイメージできる遺跡である（古川町教育委員会 2001）。その後、バイパスの波及効果による土地利用の進展に伴い、国道41号線沿いのD地点に面したトヨタ地点⑤（古川町教育委員会 1994）や向町地点①、金子・氷見地点⑦（古川町教育委員会 2001）などの事前調査が行われている。この間、上町から向町にかけての国道41号線沿いが飛騨では前例のない、古代から中近世に及ぶ屈指の遺跡であることが判明している。

太江遺跡⑥は、古川盆地北西隅の高台に位置する遺跡で、県道の拡幅工事に伴う一環として寿楽寺廃寺跡の北側を含む一帯が平成10年から3ヶ年にわたりて県文化財保護センターにより調査された。寺院跡については先に示したとおりであるが、周辺には古墳時代後期から平安時代にわたる居住城があることが判明し、両者の消長関係についてまとめられている（財團法人岐阜県教育文化財団 2005）。

岡前遺跡⑨は、杉崎廃寺跡の北側の高台に位置する遺跡で、平安期の竪穴住居跡が確認されたほか、飛騨では最初の和同開珎が出土した遺跡（財團法人岐阜県教育文化財団 1995）として知られている。

杉崎廃寺跡⑩は、古代の寺院跡として著名であるが、廃寺跡の周辺からは古墳時代前期から後期の竪穴住居跡や5世紀代の円墳も確認されている（古川町教育委員会 1998・飛騨市教育委員会 2012）。また、出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器には北陸系の影響が顕著に認められる。

中野大洞平遺跡⑪は宮川左岸の段丘上に位置する遺跡で、縄文時代および奈良時代の竪穴住居跡が確認されている（財團法人岐阜県教育文化財団 1995）。この遺跡の並びには縄文中期の集落跡として著名な中野山腰遺跡⑫が調査されているが、この地区からは平安時代の竪穴住居跡が発見されている（古川町教育委員会 1993）。また、宮川支流の殿川流域の段丘上には平安時代の山林寺院跡とされる西ヶ洞廃寺跡⑬が調査されている（財團法人岐阜県教育文化財団 2006）。

中世では、上町遺跡D地点③で得られた資料が特筆される。ここでは、掘立柱建物跡や竪穴状遺構、配石遺構、集石遺構、溝、道路遺構などが確認されている。また、遺物としては12世紀から16世紀代の舶載陶磁器（龍泉窯系青磁碗類）や国産陶器（山茶碗・天目碗・常滑瓶・瀬戸灰釉瓶子・摺鉢・平鉢類）などが出土している。また、発見された遺構・遺物の多くは、宮川対岸の山塊に築かれた古川城（蛤城）⑭との関連が窺える資料と考えられる。調査例としては少ないが、杉崎廃寺跡の調査では中世と考えられる集石遺構が確認されている。また、地元では杉崎廃寺跡の礎石について宮谷寺跡という伝承がある。小島時光の菩提寺とされるもので、杉崎廃寺跡の背後の谷を宮谷^{みやや}とい。宮谷寺という名称は、宮谷のほとりにあってこそ然るべきあり、今後の考古学的課題でもある。

南北朝時代に至ると姉小路家綱が飛騨国司に補任され、初めは黒内城に入城し、のちに小島城⑮へ移り北方に拠点を置いたとされる。一方、幕府は南朝に対抗し、佐々木（京極）高氏氏を飛騨守護に補任し、南の益田から大野郡を勢力範囲に治めた。姉小路氏はこの抗争に敗れ、小島（小島城⑯）、小鷹利（向小島城⑰）、古河（古川城⑱）の三家に分かれて鼎立することになった。応仁の乱の影響は山国飛騨にも及び、戦国期には北部の江馬氏、南部の三木氏（京極氏の被官）が勢力をほぼ二分していた。当時飛騨は甲斐の武田、越後の上杉の対立抗争の渦中にあって去就が定まらなかつたが、天正10（1582）年に三木氏が江馬氏を破り飛騨の大部分を平定した。その後、まもなく秀吉の意を受けた

金森長近が飛騨を攻略して三木氏を滅ぼして飛騨一円を平定した。長近は入部当初、鍋山城を居城としたが、天正16（1588）年頃より高山城の築城に着手したとみられる。ほぼ同じ頃より飛騨では唯一の平城である増島城砦が荒城川沿いに築かれる。平成9年より本丸・二の丸曲輪を中心に確認調査が行われ、石垣・堀割などの曲輪の状況が明らかにされている（飛騨市教育委員会 2010）。

引用・参考文献

高山市教育委員会 1971『冬頭大塚発掘報告書』

高山市教育委員会 1985「赤保木5号古墳」「高山市内遺跡発掘調査報告書」高山市埋蔵文化財調査報告第22号

岐阜県高山市教育委員会 1986『高山城跡発掘調査報告書Ⅰ』

岐阜県高山市教育委員会 1988『高山城跡発掘調査報告書Ⅱ』

国府町教育委員会 1988『飛騨国府シンポジウム 古代の飛騨－その先進性を問う－』

古川町教育委員会 1989『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡C地点発掘調査報告書』

藤田富士夫 1990「4 北陸から見た飛騨」「第1回 飛騨国府シンポジウム 古代の飛騨－その先進性を問う－」国府町教育委員会

岐阜県教育委員会 1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』

古川町教育委員会 1991『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡D地点発掘調査報告書』

国府町教育委員会 1993『半田垣内遺跡 1次・2次発掘調査報告書』

財團法人岐阜県文化財保護センター 1995『岡前遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第20集

古川町教育委員会 1994『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡トヨタ地点・O地点・栗原センター地点発掘調査報告書』

名古屋市教育委員会 1994『尾張元興寺発掘調査報告書』

森浩一・八賀晋編者 1997『飛騨 よみがえる山国歴史』株式会社大巧社

古川町教育委員会 1998『岐阜県吉城郡古川町 杉崎庵寺跡発掘調査報告書』

国府町教育委員会 1998『桜本遺跡発掘報告書』

古川町教育委員会 2001『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡金子地点・水見地点発掘調査報告書』

財團法人岐阜県教育文化財団 2002『太江遺跡・寿楽寺庵寺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第74集

岐阜県吉城郡国府町教育委員会 2003『三日町大塚古墳』

飛騨市教育委員会 2004『岐阜県史跡 信包八幡神社古墳測量調査報告書』

国府町教育委員会 2004『海具江古墳発掘報告書』

財團法人岐阜県教育文化財団 2005『太江遺跡Ⅱ』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第94集

国府町教育委員会 2005『三日町大塚遺跡範囲確認調査』

国府町教育委員会 2005『かうと洞1号古墳・2号古墳調査報告書』

国府町教育委員会 2005『南垣内遺跡発掘報告書』

国府町教育委員会 2005『石橋庵寺調査報告書』

岡本淳一郎 2006『下老子並川遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告V－第五分冊 自然科学分析・考察編』財團法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

財團法人岐阜県教育文化財団 2006『西ヶ洞庵寺跡 中野山越遺跡 中野大洞平遺跡 大洞平5号古墳』

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第98集

国府町史刊行委員会 2007『国府町史』考古・指定文化財編

飛騨市教育委員会 2010『増島城跡』飛騨市文化財調査報告書第3集

飛騨市教育委員会 2012『杉崎庵寺跡2』飛騨市文化財調査報告書第5集

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺構および遺物の概要

上町遺跡向町地点で検出した遺構は、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、ピット、堅穴状遺構、溝状遺構、焼土跡、土坑、集石土坑、配石遺構などであり、地区別（A～D区）で示すと下記の表のようになる。

道路幅という限られた調査であったことや、遺構の遺存状態が必ずしも良好ではなかったことから、確認したものの、遺構の形状や構造を把握するのが難しいものも少なくなかった。そのため、過去の上町遺跡C・D地点ほかでの調査経験に基づいて遺構名称を付したものもある。また、遺構の内部に炉跡やカマドをもつ堅穴状の遺構については従来どおり堅穴住居跡の名称を用いた。但し、調査区の関係から炉跡やカマドが確認できなかった遺構（堅穴状の遺構）については、出土遺物や覆土の検討から判断したものもある。ピット名を付した遺構については、建物の柱穴や杭穴の可能性を想定して、平面形や柱間寸法などの検討を行ったが、具体的な遺構を見出すまでは至らなかった。

これらの遺構の時期については、出土遺物をもとにした時期区分では堅穴住居跡の大半は古墳時代後期から概ね平安時代前期までの遺構で、唯一9号住居跡のみが弥生後期末葉に属する遺構であった。掘立柱建物跡の時期については有力な時期比定に繋がる材料はなかったが、柱掘り方や柱間などから推測すると古墳時代後期から平安時代までの範疇と考えられる。ピット（群）とした遺構については特定できないが、他遺構との重複関係もとに推測すると中世以降の所産と考えることができる。また、堅穴状遺構や配石遺構、溝状遺構、集石土坑などについては、概ね12世紀から16世紀代に比定される。舶載磁器や国産陶器などが出土している関係から平安後期以降、室町期ないしは戦国期までの範疇と考えられる。

各遺構とその出土遺物の記載にあたっては、大きく弥生時代後期から平安時代前期までの資料と、平安時代後期以降に分けることができるが、記述にあたっては前者のものより進めていくことにする。

第3表 地区別遺構集計表

遺構種別	A区	B区	C区	D区	合計
堅穴住居跡	11軒	9軒	7軒	—	27軒
掘立柱建物跡	—	—	—	1棟	1棟
ピット（群）	1群	1群	3群	1群	6群
堅穴状遺構	1基	—	—	—	1基
溝状遺構	2条	—	1条	—	3条
焼土跡	1基	—	—	—	1基
土坑	2基	—	—	2基	4基
集石土坑	27基	13基	9基	—	49基
配石遺構	1基	—	7基	—	8基

第2節 壓穴住居跡

上町遺跡向町地点の本調査で検出した壓穴住居跡は合計27軒である。これらは旧字古町、嵯峨山の二地区に位置しており、調査区内ではA区からC区の道路予定範囲内であった。河岸段丘の縁辺部にあたるD区には及んでいなかった。また、調査区が約5m幅の道路範囲であったことから全容が捉え切れていない壓穴住居跡も多く存在していた。

もっとも古い時期の壓穴住居跡は、A区で調査した弥生時代後期末に比定される9号住居跡の1例のみで、他の壓穴住居跡は出土遺物や覆土の様相から判断すると、古墳時代後期以降の壓穴住居跡と考えられる。厨房施設として明確にカマドが確認された壓穴住居跡は16例で、他の10例は未調査区に存在するものと推測される。遺物が出土していない壓穴住居跡もあるために時期を明確にすることはできないが、カマドをもつ壓穴住居は古墳後期以降、年代的には6世紀後半から10世紀代までの間で、若干のヒアタスを介して営まれてきたものと考えられる。

壓穴住居跡の時期区分にあたっては、型式学的に捉えやすい須恵器や灰釉陶器の食膳具に着目して時期を決めている。また、各地域の編年研究の援用にあたっては、当時の主要生産国であった和泉や尾張、美濃などの地域における古窯跡群の編年体系を準用した(田込 1966・1981、齊藤 1994、賛 2000・2001、尾野 1997・2009など)。

1号住居跡(第8図、図版6)

位置 A区の北西側に位置し、発掘区ではK・L-1・2区に所在する。

重複関係 他遺構との重複関係では、本住居→1号溝状遺構・ピット群の順で新旧を確認している。

遺存状態 遺構との重複関係および削平の影響により、床面とカマドの一部が残存するのみである。

平面形 詳細は不明であるが、カマドを有することから方形の壓穴住居跡と推測される。

規模 床面の残存部より現存長を計測すると、東西約3.4m、南北約3.5mを測る。

主軸方位 カマドを基準とする主軸方位は、N-5°-Wである。

壁 削平の影響により残存部分はない。

床面 残存部分は塊状・斑文状の黄砂および暗褐色土で貼り床が形成され、全体に硬く締まる。

柱穴 本遺構に伴う柱穴は確認されていない。

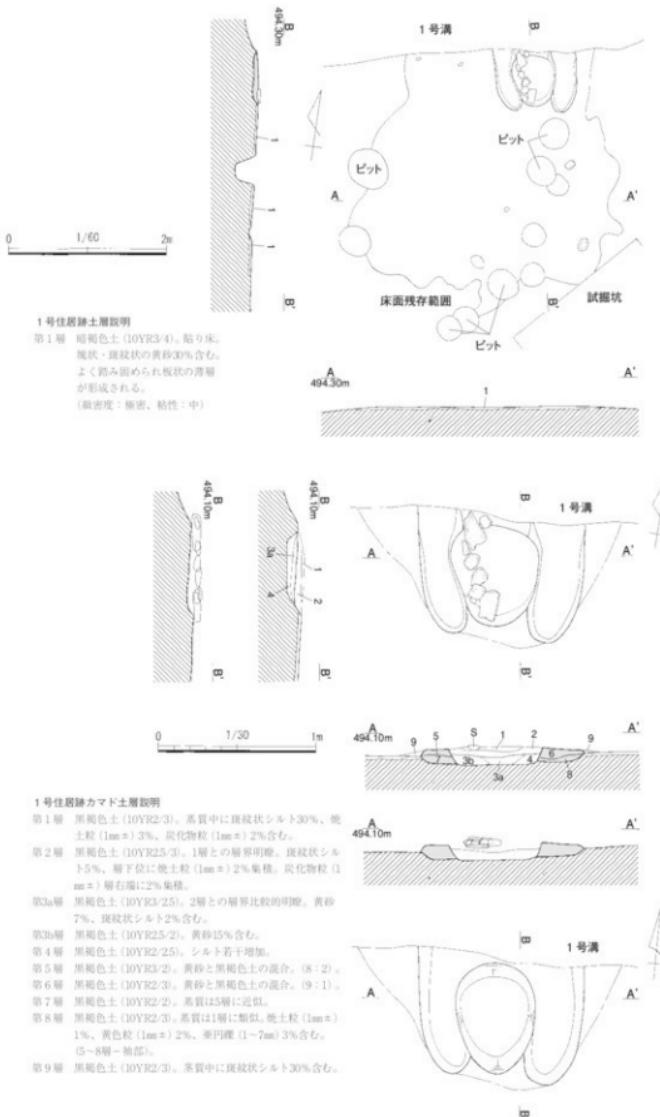
周溝 周溝の有無は削平の影響により不明である。

覆土 覆土は削平の影響により残存していない。

カマド(第8図、図版6)

カマドは北側に設けられている。削平の影響により天井部の大半は壊され、また煙道部は1号溝との重複により失われている。最終的に検出された範囲は、焚口部から奥壁の立ち上がり今まで約70cm、両袖部最大幅は105cm、焚口幅は約40cmほどである。袖部は黄砂と黒褐色土の混合土で形成されている。火床面は皿状を呈し、左袖部の内壁側には扁平な礫が列状に検出されている。

出土遺物 遺構のプラン確認時およびカマドの調査時に土師器や須恵器の小破片がわずかに出土したのみで、図示し得た資料はない。本遺構の時期については、カマドを備えた壓穴住居跡であることから古墳時代後期もしくはそれ以降と推測される。



第8図 1号住居跡およびカマド実測図 (1/60, 1/30)

2号住居跡(第9図、図版6)

位置 A区の北西側に位置し、発掘区ではL-2・3区に所在する。

重複関係 調査区内では遺構間との重複はみられない。

遺存状態 検出部分は北東隅の一部のみであるが、範囲内は比較的良好であった。

平面形 調査範囲より推測すると方形であったと考えられる。

規模 現状では不明である。

主軸方位 東壁より求めると、N-37°-Wである。

壁 検出された範囲内は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最大で30cmほどである。

床面 北東隅では掘り込み面をならした直床式の構造である。

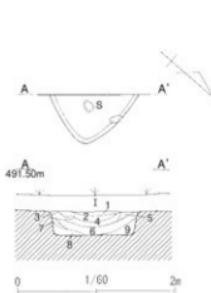
柱穴 調査した範囲内からは検出されていない。

周溝 調査した範囲内からは検出されていない。

覆土 9層に区分され、上層の層界は不明瞭であったが、中層以下は明瞭に分層できた。

厨房施設 不明。

出土遺物 本遺構出土の遺物は、土師器の小破片が覆土中よりわずかに出土したのみで、図示し得た資料はない。時期の詳細は不明であるが、出土した土師器片や覆土より推測すると、古墳時代後期もしくはそれ以降の所産と考えられる。



第9図 2号住居跡実測図(1/60)

3号住居跡(第10図、図版6)

位置 A区の北西側に位置し、発掘区ではK・L-3・4区に所在する。

重複関係 遺構間との重複関係では本遺構→2号溝状遺構の順で新旧関係を確認している。

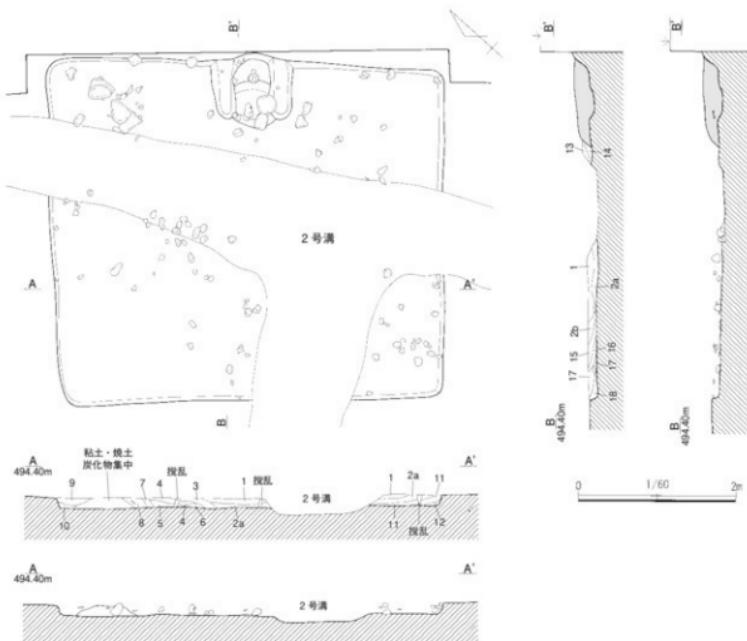
遺存状態 本遺構の中央部分が2号溝状遺構により壊されている。

平面形 全体が捉えられた堅穴住居跡で、平面形は方形である。

規模 長軸(北西~南東)4.90m~5.10m、短軸(北東~南西)4.15~4.40mを測り、床面積は約19m²である。

主軸方位 カマドを基準に求めると、N-55°-Eである。

壁 壁高は10~15cmを測り、やや開きぎみに立ち上がる。



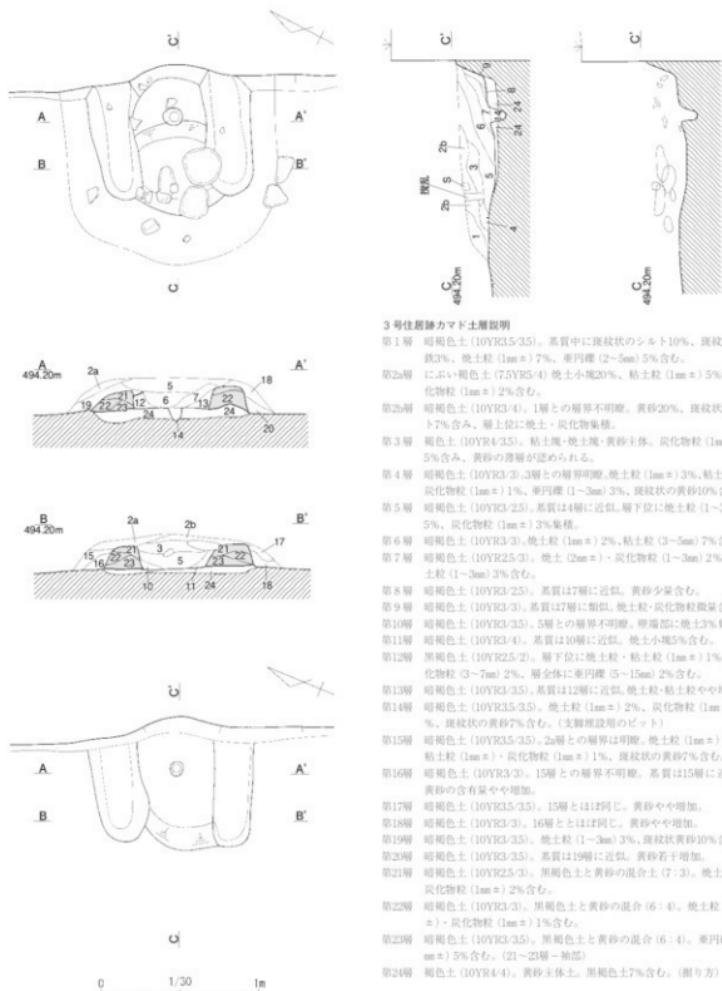
3号住居跡土層説明

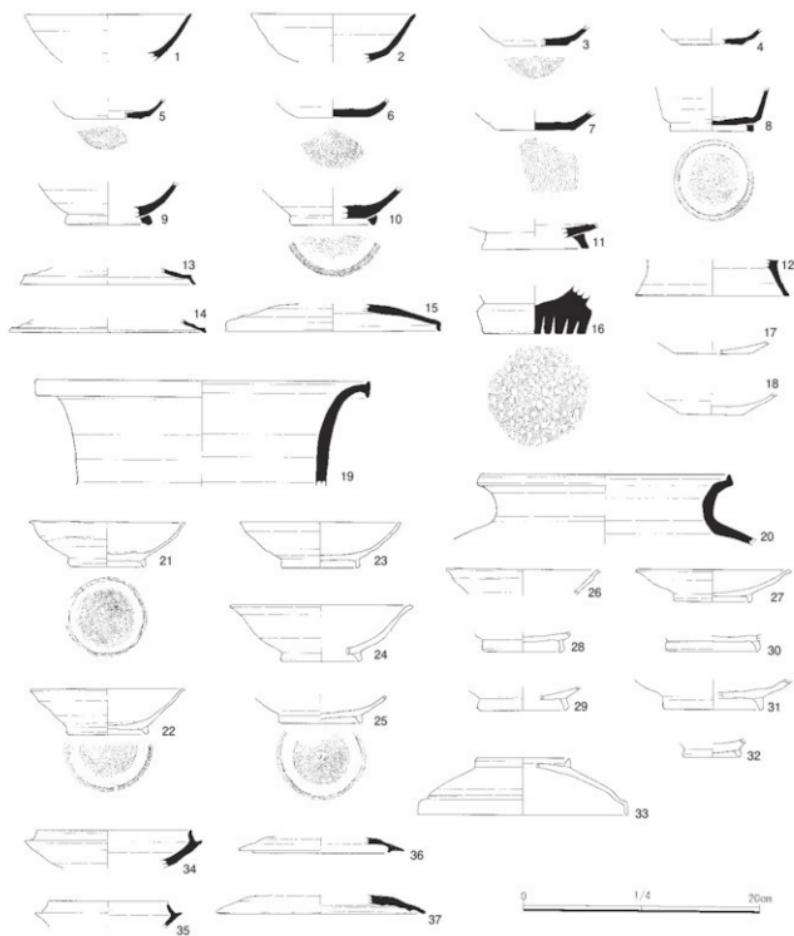
- 第1層 單褐色土 (10YR35-2)。縫紋状の鉄7%、燒土粒 (2~3mm) 1%、黃色粒 (1~3mm) 3%、炭化物粒 (1~7mm)、縫紋状黃砂7%、亜円窪 (2~20mm) 2%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第2a層 明褐色土 (10YR3-3)。1層との層界明瞭。基質中に黄砂40%、縫紋状のマンガン・黃色粒 (1mm±) 3%、炭化物粒 (2mm±) 1%、亜円窪 (3~20mm) 4%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中~弱)
- 第2b層 黒褐色土 (10YR3-2)。基質は2a層に近似。黄砂30%、炭化物粒5%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中~弱)
- 第3層 黑褐色土 (10YR3-2)。基質は2a層に近似。黄砂60%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中~弱)
- 第4層 黑褐色土 (10YR25-2)。層界明瞭。層下位に縫紋状マンガン7%、黃色粒 (1~2mm) 5%、亜円窪 (2~7mm) 4%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中)
- 第5層 明褐色土 (10YR35-3)。層界不明瞭。縫紋状のマンガン7%、縫紋状黄砂7%、亜円窪 (5~10mm) 3%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中)
- 第6層 明褐色土 (10YR3-3)。基質は5層に近似。黄砂25%、縫紋状のマンガン5%、亜円窪 (2~5mm) 2%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中)
- 第7層 黑褐色土 (10YR4-4)。黄砂土 (70%)。層間色土5%、亜円窪 (2~15mm) 3%含む。(緻密度: 粗、粘性: 弱)
- 第8層 にぶい黒褐色土 (10YR4-3)。基質中に黄砂30%、縫紋状マンガン3%、亜円窪 (5~7mm) 5%、炭化物粒 (1~3mm) 3%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第9層 單褐色土 (10YR3-3)。基質中に黄砂25%、燒土粒 (1~3mm) 2%、縫紋状マンガン・黃色粒・炭化物粒 (1~3mm) 1%、層下位に亜円窪 (3

~7mm) 5%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中)

- 第10層 にぶい 黑褐色土 (10YR4-3)。黄砂土体 (70%)。炭化物粒 (2mm±) 1%含む。(緻密度: 粗、粘性: 弱)
- 第11層 黑褐色土 (10YR3-2)。層界明瞭。黄砂15%、炭化物 (2~3mm) 2%含む。(緻密度: 粗、粘性: 中)
- 第12層 單褐色土 (10YR3-3)。層界明瞭、後段灰質約30%、亜円窪 (3~10mm) 3%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中~弱)
- 第13層 黑褐色土 (10YR25-3)。縫紋状マンガン2%、燒土粒・粘土粒 (1mm±) 1%、亜円窪 (3~10mm) 2%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中)
- 第14層 黑褐色土 (10YR3-2)。層界明瞭。縫紋状のマンガン5%、粘土粒 (1~2mm±) 2%、炭化物粒 (1~2mm)、亜円窪 (3~15mm) 1%含む。(緻密度: やや粗、粘性: やや弱)
- 第15層 單褐色土 (10YR3-3)。25層との層界比較的明瞭。縫紋状マンガン3%、燒土粒・炭化物粒 (3mm±)、亜円窪 (5mm±) 1%含む。(緻密度: やや密、粘性: 弱~中)
- 第16層 單褐色土 (10YR3-3)。15層との層界不明瞭。縫紋状マンガン3%、燒土粒 (0.5mm±) 1%、層下位に黄色土 (1mm±)、亜円窪 (3~10mm) 1%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 中)
- 第17層 黑褐色土 (10YR25-3)。16層との層界やや不明瞭。縫紋状のマンガン30%、層中位に燒土粒 (1mm±) 3%、亜円窪 (3~20mm) 1%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第18層 單褐色土 (10YR3-3)。黄砂40%、縫紋状マンガン2%、燒土粒・黃色粒 (0.5mm±)、亜円窪 (3~5mm) 1%含む。(緻密度: やや粗、粘性: やや弱)

第10図 3号住居跡実測図 (1/60)





第12図 3号住居跡出土遺物（1/4）

- 床 面** 堀り込み面をならした直床式の構造である。
- 柱 穴** 堅穴の遺存部分からは検出されていない。
- 周 溝** 掘られていない。
- 覆 土** 18層に区分される。各層の層界は比較的明瞭で、下層で確認された粘土・焼土・炭化物は凸状に集積している。また、遺物は上層から床面直上まで分布している。
- カマド** (第11図、図版6)

北東壁のほぼ中央に付設され、天井部はすでに失われていた。最終的に検出された範囲は焚口部から煙道の立ち上がり今までが95cm、両袖部最大幅は105cm、焚口幅は約55cmである。袖部は黒色土と黄砂の混合土により形成されている。火床面は浅く、奥壁寄りが一段高い構造となって煙道に移行している。また、火床面の上段には支脚用の埋設穴と推測される小穴が確認されている。

出土遺物 (第12図、第13表、図版21)

本遺構出土の遺物は、須恵器や灰釉陶器の食膳具を中心にして土下層から比較的まとまって出土したが、カマド内からはほとんど確認されていない。また、覆土下層からは拳大から掌などの礫が出土している。図示し得た資料は、須恵器・灰釉陶器を中心とする計37点で、いずれも破片資料である。1~16・19・20・34~37が須恵器、17・18が土師器、21~33が灰釉陶器である。1~33までが本遺構に関連する遺物と考えられ、これら以外の4点(34~37)は参考資料として掲載した。以下に器種の内訳を示すと、1・2が須恵器壇(A or B)の範疇、3~7が須恵器壇A、8が須恵器壇B、9・10が須恵器壇B、11・12が須恵器壇B、13~15が須恵器蓋、16が須恵器鉢、17・18が土師器壇、19・20が須恵器壺、21~31が灰釉陶器壇、32が灰釉陶器小塊、33が灰釉陶器蓋、34・35が須恵器壇H身、36・37が須恵器壇G蓋である。

これらの資料より出土遺物の特徴を考えると、須恵器の食膳具では壇類が中心に構成され、壺類の割合は少ない。灰釉陶器の食膳具では黒笠90号窯式に比定されるもので占められる。以上より本遺構の年代を推測すると、9世紀後半を下限年代とすることができよう。なお、灰釉陶器蓋の出土は本地域では希少な例といえる。

4号住居跡 (第13図、図版6)

- 位 置** A区の北西側に位置し、発掘区ではL-5・6区を中心に所在する。
- 重複関係** 調査区内では他遺構との重複は認められていない。
- 遺存状態** 本遺構の南西側は調査区外となっているが、調査した範囲内は比較的良好である。
- 平 面 形** 調査範囲内より推測すると方形のプランと考えられる。
- 規 模** カマドが設置された北西壁側で3.10mを測る。ほぼ3m四方の堅穴住居跡と推測される。
- 主軸方位** カマドを基準に求めると、N-48°-Eである。
- 壁** 現存範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、東隅側で最大20cmを測る。
- 床 面** 現存範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、全体に固く締まっている。
- 柱 穴** 調査した範囲内には存在していない。
- 周 溝** 調査した範囲内には存在していない。

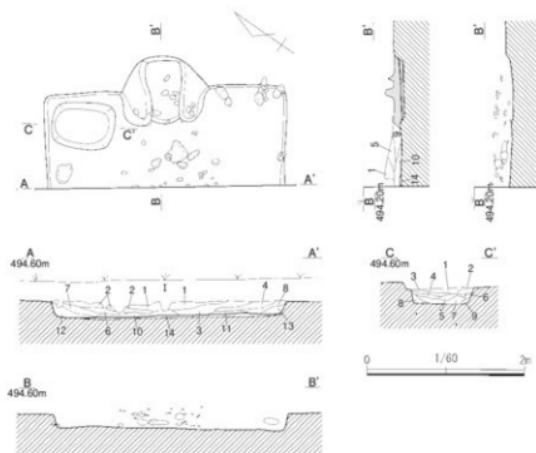
貯蔵穴 壁穴の北隅に位置し、平面形は隅丸方形を呈し、長軸80cm、短軸60cm、深さ20cmを測る。

覆土は9層に区分され、各層の層界は比較的明瞭で、人為的な影響が看取される。

覆土 13層に区分され、各層の層界は比較的明瞭で、部分的に焼土や炭化物が集積する。

カマド(第14図、図版6)

北東壁のほぼ中央に付設され、天井部はすでに失われていた。最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで85cm、両袖部最大幅は110cm、焚口幅は36cmほどである。袖部用材は黒褐色土と黄砂の混合土で形成され、火床面は皿状を呈している。



4号住跡土層説明

- 第1層 黒褐色土 (10YR25-3). 繊維状マンガン3%、燒土 (1mm±)・炭化物 (1mm±) 1% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第2層 黒褐色土 (10YR3-3). 繊維状マンガン2%、繊維状黄砂3%、燒土 (1mm±)・重円錐 (1-3mm) 1% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第3層 黒褐色土 (10YR25-5). 繊維状マンガン15%、燒土・炭化物 (1mm±)・重円錐 (1-3mm) 1% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第4層 黒褐色土 (10YR3-3). 3層との層界比較的明瞭。繊維状のマンガン3%、燒土粒 (1mm±)・炭化物粒 (1mm±) 1% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第5層 黒褐色土 (10YR25-25). 基質は1層に近似。粘土粒含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第6層 黒褐色土 (10YR3-25). 2層との層界比較的明瞭。繊維状のマンガン2%、燒土粒・炭化物粒 (1mm±) 1% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第7層 黒褐色土 (10YR3-25). 繊維状マンガン5%、繊維状の黄砂3% 含む。下部に炭化物3%集積。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第8層 黒褐色土 (10YR25-3). 繊維状マンガン5%、燒土粒・炭化物粒 (1mm±) 1%、重円錐 (2mm±) 2% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第9層 黒褐色土 (10YR25-3). 基質は5層に近似。粘土若干增加。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第10層 黒褐色土 (10YR3-4). 黄砂主体 (60%)。繊維状のマンガン2%、燒土 (1mm±) 1% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第11層 明褐色土 (10YR3-3). 繊維状のマンガン・燒土粒 (1mm±)・炭化物

(1mm±) 1%、層下位に重円錐 (3mm±) 3% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第12層 黒褐色土 (10YR4-4). 基質は10層に近似。隙間を中心に燒土粒 (1mm±) 2% 集積。(緻密度: やや粗、粘性: 須)

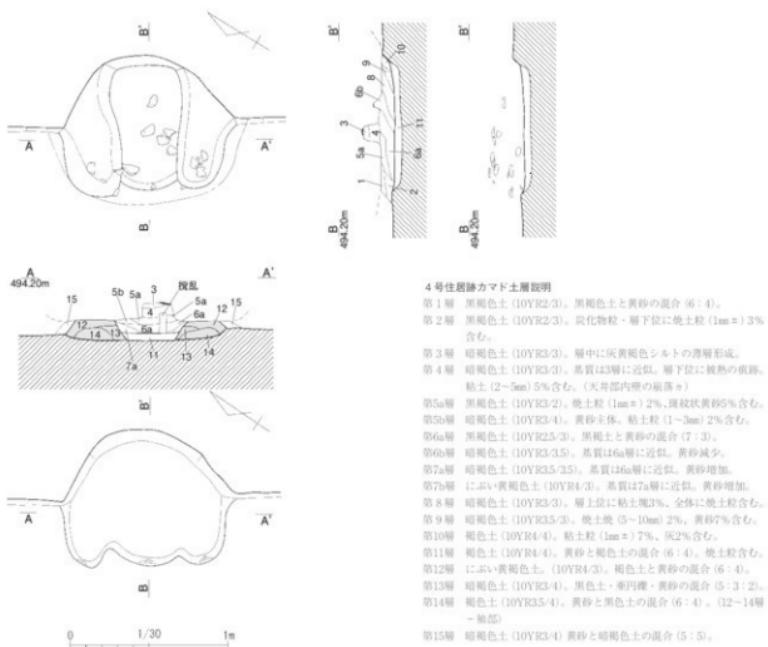
第13層 黒褐色土 (10YR2-2). 燃土粒 (1mm±)・炭化物粒 (1-3mm±) 1%、下位に重円錐 (1-3mm) 2% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第14層 明褐色土 (10YR3-3). 粘り無。暗褐色土と黄砂で構成。(緻密度: やや密、粘性: 中-弱)

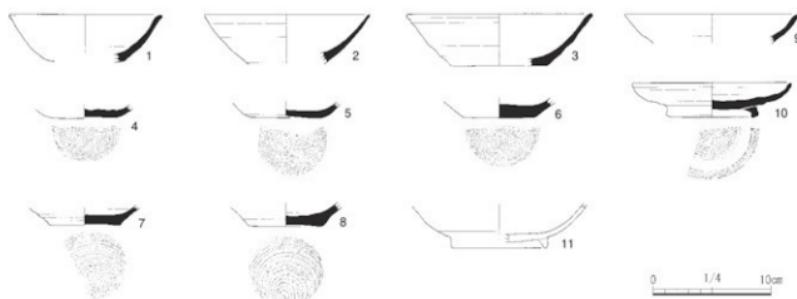
4号住跡跡藏土層説明

- 第1層 黒褐色土 (10YR3-2). 繊維状のマンガン7%、燒土粒・炭化物粒・重円錐 (1-3mm) 2% 含む。
- 第2層 黑褐色土 (10YR3-25). 基質は1層に近似。繊維状・塊状の黄砂5% 含む。
- 第3層 黑褐色土 (10YR25-3). 基質は2層に近似。黄砂2% 含む。
- 第4層 黑褐色土 (10YR3-2). 繊維状マンガン5%、繊維状の黄砂10%、炭化物粒 (1mm±) 1% 含む。
- 第5層 明褐色土 (10YR3-3). 基質は4層に近似。黄砂15% 含む。
- 第6層 暗褐色土 (10YR35-3). 基質は5層に近似。黄砂20% 含む。
- 第7層 暗褐色土 (10YR3-25). 繊維・塊状の黄砂40%、燒土小塊 (5mm±) 1%、重円錐 (2-5mm) 2% 含む。
- 第8層 にぶく黃褐色土 (10YR4-3). 黄砂土主体 (80%)。炭化物粒 (1mm±) 1%、重円錐 (2mm±) 10% 含む。
- 第9層 暗褐色土 (10YR35-3). 炭化物粒 (1mm±) 2% 含む。

第13図 4号住跡実測図 (1/60)



第14図 4号住跡カマド実測図 (1/30)



第15図 4号住跡出土遺物 (1/4)

出土遺物 (第15図、第14表、図版21)

本遺構出土の遺物は、須恵器の食膳具を中心に、覆土上層から下層までの範囲にわたって出土したが、カマド内からはほとんど確認されていない。また、覆土中には3号住と同様に拳大から掌ほどの縁が出土している。図示し得た資料は、須恵器を中心とする計11点の土器類で、いずれも破片資料である。1~10が須恵器、11が灰釉陶器である。以下に器種の内訳を示すと、1~8が須恵器塊A、9・10が須恵器皿B、11が灰釉陶器塊である。

これらの資料より出土遺物の特徴を考えると、須恵器の食膳具では塊Aを中心となる器種構成で、前代までの坏類はまったくみられない。灰釉陶器は食膳具の1例のみであるが、黒笠90号窯式期に比定されるものである。

以上より本遺構の年代を推測すると、概ね9世紀後半を下限年代とすることができよう。

5号住居跡 (第16図、図版7)

位置 A区のほぼ中央に位置し、発掘区ではL-8・9区を中心所在する。

重複関係 調査区内では他遺構との重複は認められていない。

遺存状態 本遺構の南西側は調査区外となっているが、調査した範囲内は比較的良好である。

平面形 調査範囲内より推測すると方形プランと考えられる。

規模 カマドが設置された北壁側で3.80mを有する。ほぼ4m四方の堅穴住居跡と推測される。

主軸方位 カマドを基準に求めると、N-18°-Eである。

壁 現存範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、現存部分では最大30cmを測る。

床面 現存範囲内では、黒褐色土と黄砂で貼り床が形成され、全体に固く締まっている。

柱穴 調査した範囲内には存在していない。

周溝 調査した範囲内では、カマド部分を除いて全周する。規模は幅10~20cm、深さ5~10cmを有し、断面形はU字形を呈する。

覆土 15層に区分され、各層の層界は比較的明瞭である。

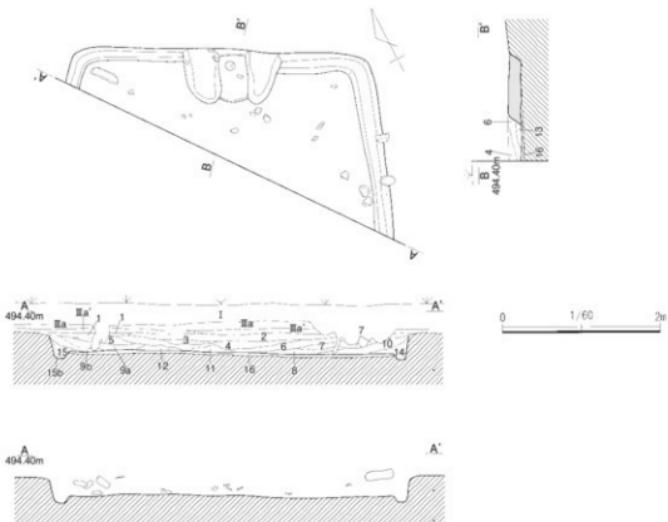
カマド (第17図、図版7)

北壁のほぼ中央に付設され、天井部はすでに失われていた。最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで66cm、両袖部最大幅は120cm、焚口幅は35cmほどである。袖部用材は粘土と黄砂を含む暗褐色土と黒褐色土で形成されている。火床面はほぼ平坦で、奥壁部で急激に立ち上がる。また、火床面には支脚用の埋設穴と推測される小穴がある。

出土遺物 (第18図、第15表、図版21)

本遺構出土の遺物は、須恵器の食膳具を中心に、覆土中層から下層にかけて出土したが、カマド内からは土師器壺や須恵器片などの小破片がわずかに出土したに過ぎない。また、拳大ほどの縁が出土したが、出土量は少ない。図示し得た資料は、須恵器類を中心とする計6点の土器類で、いずれも破片資料である。1~4・6が須恵器、5が土師器である。1~5までが本遺構に関連する遺物と考えられ、6の須恵器は参考資料として掲載した。以下に器種の内訳を示すと、1~4が須恵器塊B、5が土師器塊、6が古墳後期の須恵器塊H蓋である。

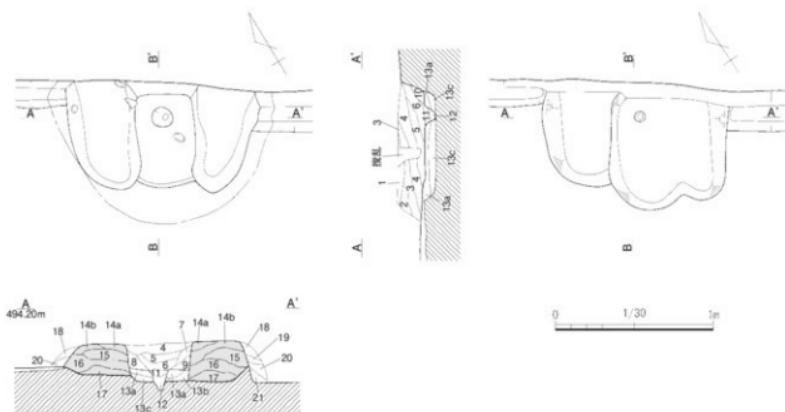
これらの資料より本遺構の特徴をみると、食膳具では須恵器塊Bが中心となる器種構成で、



- 5号住跡断面図
- 第1層 黒褐色土 (10YR25-2)。塊状のマンガン、塊状黄鉄5%、炭化物粒 (1mm±) 1%含む。(緯密度: やや密、粘性: 弱)
- 第2層 黒褐色土 (10YR3-2)。塊状のマンガン5%、他土粒 (1~2mm)・
亜円錐 (3~30mm) 3%含む。(緯密度: 密、粘性: 中)
- 第3層 凋黃褐色土 (10YR45-2)。炭化物マンガン7%、黄鉄3%、炭化物 (3~30mm) 1%含む。(緯密度: やや粗、粘性: 中)
- 第4層 黒褐色土 (10YR2/2)。上層との層界明瞭。黄鉄7%、亜円錐 (3~30mm) 2%含む。(緯密度: やや密、粘性: 中~弱)
- 第5層 黒褐色土 (10YR2-2)。上層との層界比較的明瞭。塊状のマンガ
ン10%、黄鉄7%、炭化物 (3mm±)・亜円錐 (2~20mm) 2%含む。(緯
密度: やや密、粘性: 中~弱)
- 第6層 黑褐色土・黑褐色土 (10YR2-15)。上層との層界不明。塊状のマン
ガン7%、黄鉄9%、亜円錐 (1~10mm)・炭化物粒 (1mm±) 1%含む。
(緯密度: 密、粘性: 中)
- 第7層 黑褐色土 (10YR2-2)。基質は6層に類似。黄鉄5%含む。(緯密度: 密、
粘性: 中)
- 第8層 黑褐色土 (10YR3-2)。塊状のマンガン、塊状の黄鉄20%、亜円錐 (2~15mm) 3%、炭化物粒 (1~2mm) 2%含む。(緯密度: やや密、粘性: 中~弱)
- 第9a層 黑褐色土 (10YR2-3)。基質は5層に近似。黄鉄15%含む。(緯密度:
- 第9b層 黑褐色土 (10YR2-2)。基質は9a層に近似。黄鉄10%含む。(緯密度:
やや密、粘性: 中)
- 第10層 黑褐色土 (10YR3-2)。塊状のマンガン35%、塊状の黄鉄20%、
亜円錐 (2~15mm)・炭化物粒 (1mm±) 2%含む。(緯密度: やや密、
粘性: 中)
- 第11層 黑褐色土 (10YR2-1)。基質は6層に近似。黄鉄10%含む。(緯密度:
やや密、粘性: 中)
- 第12層 單褐色土 (10YR3-2)。黄鉄主体 (60%)。炭化物粒 (1~2mm)・亜円
錐 (2~7mm) 2%含む。(緯密度: 粗、粘性: 弱)
- 第13層 黑褐色土 (10YR25-2)。基質は6層に近似。粘土微量含む。(緯密度:
密、粘性: 中)
- 第14層 黑褐色土 (10YR25-2)。基質は10層に近似。マンガン5%、亜円錐1
%含む。(緯密度: やや密、粘性: 中~弱)
- 第15a層 黑褐色土 (10YR25-2)。塊状のマンガン7%、塊状の黄鉄30%、
炭化物粒 (1~5mm)・亜円錐 (2~15mm) 1%含む。(緯密度: やや密、
粘性: 中~強)
- 第15b層 黑褐色土 (10YR3-3)。基質は15a層に近似。黄鉄40%含む。(緯密度:
やや密、粘性: 中)
- 第16層 單褐色土 (10YR3-2)。貼り床。黑褐色土と黄鉄で構成。(緯密度:
やや密、粘性: 中)

第16図 5号住跡実測図 (1/60)

底部糸切り未調整の塊類はみられない。土師器環は底部が不安定な器種である。以上より本遺構の年代を推測すると、概ね8世紀中葉を下限年代とすることができよう。



5号住居跡カマド土層説明

- 第1層 黒褐色土 (10YR3/2.5)。斑紋状のマシガン15%、粘土粒 (1mm±)・焼土粒 (1mm±) 1%、炭化物粒 (1~3mm) 2%含む。
- 第2層 暗褐色土 (10YR3/5.2)。斑紋状のマシガン10%、焼土粒 (1mm±)・亜円窓 (2~5mm) 1%、炭化物粒 (1mm±) 2%含む。
- 第3層 黒褐色土 (10YR3/2)。炭化物は2層に近似。
- 第4層 暗褐色土 (10YR3/3)。斑紋状のマシガン7%、粘土小塊 (3~5mm) 10%、焼土粒・炭化物粒 (1~2mm)・亜円窓 (3mm±) 1%含む。(天井部崩落土)
- 第5層 黒褐色土 (10YR25/2)。基質は4層に近似。黄砂2%含む。
- 第6層 黒褐色土 (10YR25.2)。基質は5層に近似。層下位に焼土粒 (1~5mm) 5%集積する。
- 第7層 黒褐色土 (10YR3/2)。基質は5層に近似し、層全体に焼土層 (3~5mm)・炭化物 (2~5mm) 3%含む。
- 第8層 黒褐色土 (10YR2/2)。基質は5層に近似。黄砂5%含む。
- 第9層 黒褐色土 (10YR3/1.5)。斑紋状のマシガン10%、焼土粒 (1mm±)・炭化物粒 (1~3mm)・亜円窓 (2~5mm) 2%、斑紋状の黄砂3%、層下位に灰3%含む。
- 第10層 黒褐色土 (10YR2/2.5)。斑紋状の黄砂・焼土粒 (2~3mm)・炭化物粒 (1mm±) 2%、層上位に粘土粒 (1~3mm) 3%含む。
- 第11層 黒褐色土 (10YR2/2)。層上位に焼土粒 (1~5mm) 3%・炭化物粒 (1mm±) 2%含む。
- 第12層 暗褐色土 (10YR3/3)。基質は11層に近似。支脚の埋設穴。
- 第13a層 暗褐色土 (10YR3/3)。斑紋状の黄砂15%、焼土粒・炭化物粒 (1mm±) 2%含む。
- 第13b層 暗褐色土 (10YR3/4)。斑紋状の黄砂20%、焼土粒 (1mm±)・炭化物粒 (1mm±) 1%含む。
- 第13c層 暗褐色土 (10YR3/4)。基質は13層に近似。黄砂25%含む。
- 第14層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘土粒 (2mm±) 2%、亜円窓 (3~5mm) 3%、斑紋状の黄砂2%含む。
- 第14b層 にぶく黄褐色土 (10YR4/3)。基質は14層に近似。黄砂25%・黒褐色土 (10YR2/3)。粘土・炭化物 (2~5mm) 3%含む。
- 第15層 暗褐色土 (10YR25/3)。基質は15層に近似。黄砂7%含む。
- 第17層 暗褐色土 (10YR4/3.5)。基質は14b層に近似。黄砂30%含む。(14a~17層一部)
- 第18層 暗褐色土 (10YR3.5/4)。粘土粒・亜円窓 (1~3mm) 2%含む。
- 第19層 暗褐色土 (10YR4/4)。粘土粒 (1~3mm) 3%、黄砂30%含む。
- 第20層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘土粒 (1mm±) 3%含む。
- 第21層 暗褐色土 (10YR3/3.5) 黒褐色土と黄砂の混成 (6~14)。

第17図 5号住居跡カマド実測図 (1/30)



第18図 5号住居跡出土遺物 (1/4)

6号住居跡(第19図、図版7)

位置 A区のほぼ中央に位置し、発掘区ではL-10・11区に所在する。

重複関係 遺構間との重複関係では、9号住→7号住→本遺構の順で新旧関係を確認している。

遺存状態 カマドが付設された北東壁側と東隅のみの調査であるが、その範囲内は比較的良好である。

平面形 確認した範囲内より推測すると方形プランと考えられる。

規模 詳細は不明。北東壁の現存長で4.60mを測る。仮にカマドが北東壁の中心に付設されたとすると一辺6.6m前後の堅穴住居跡と考えられる。

主軸方位 カマドを基準に求めると、N-32°-Wである。

壁 現存範囲内ではほぼ垂直に立ち上がり、壁高は18~28cmを測る。

床面 現存範囲内では、黒褐色土と黄砂で貼り床が形成され、とくにカマドの周辺は全体に固く締まっている。

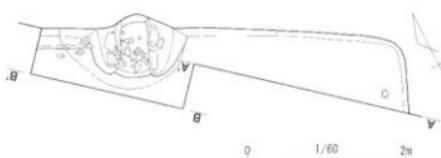
柱穴 調査した範囲内には存在していない。

周溝 北東壁に付設されたカマドの西側部分から確認されたのみである。幅は15cm前後、深さは5cmほどで、断面形は断面形はU字形を呈する。

覆土 14層に区分され、各層の層界は不明瞭な部分が多い。自然埋没の様相が強いが、部分的に人為的な影響も看取される。

カマド(第20図、図版7)

北東壁に付設され、最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで78cm、両袖部最大幅は125cm、焚口幅は45cmなどを測る。両袖部とも河原石を芯材として用いて左右対称に配置し、粘土と黄砂を混ぜた黒褐色土で芯材を覆って両袖部を形成している。火床面は皿状を呈し、奥壁で急激に立ち上がる。



6号住居跡断面図

第1層 黒褐色土 (10YR25-2.5)。炭化物粒 (1~3mm) 1%、黄色・赤色粒 (1mm) 3%、斑紋状のシルト2%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)

第2層 黑褐色土 (10YR25-3)。1層との層界不明瞭。基質は1層に近似。色調や明瞭。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第3層 明褐色土 (10YR3-3)。2層との層界は不明瞭。基質は2層に近似。シルトや砂を加。(緻密度: やや密、粘性: 中)

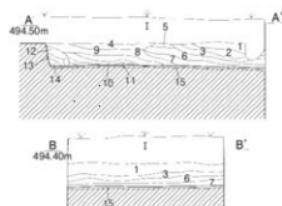
第4層 明褐色土 (10YR3-3.5)。斑紋状のマンガン3%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)

第5層 明褐色土 (7.5YR3-4)。斑紋状のマンガンにより構成。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第6層 黑褐色土 (10YR3-2.5)。垂円窓 (1~5mm) 3%、斑紋状のマンガン5%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第7層 明褐色土 (10YR3-3)。6層との層界不明瞭。基質は6層に近似。黄砂を含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第8層 明褐色土 (10YR3-3)。基質14層に近似。垂円窓 (5~10mm) 3%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)



第9層 黑褐色土 (10YR2-3)。炭化物粒・垂円窓 (1~5mm) 2%、黄色粒 (1mm) 3%、斑紋状の黄砂5%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第10層 黑褐色土 (10YR25-2.5)。基質は9層に近似。垂円窓。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第11層 明褐色土 (10YR4-4)。黄砂主体。(緻密度: 密、粘性: 弱)

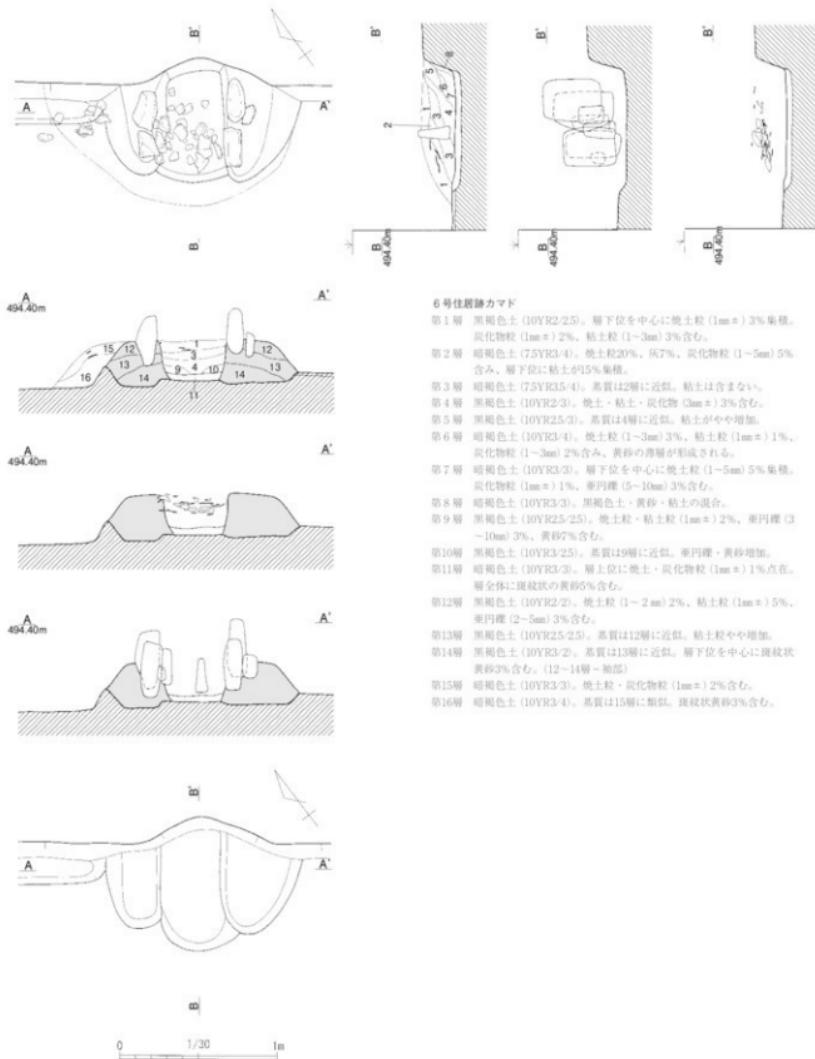
第12層 明褐色土 (10YR2-3)。基質は10層に近似。黄砂減少。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第13層 黑褐色土 (10YR25-2)。12層との層界不明瞭。垂円窓 (1~5mm) 4%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第14層 明褐色土 (10YR3-4)。黄色土 (1mm) 3%、斑紋状黄砂25%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第15層 明褐色土 (10YR3-2)。粘り床。黒褐色土と黄砂で構成。硬く締まる。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第19図 6号住居跡実測図(1/60)

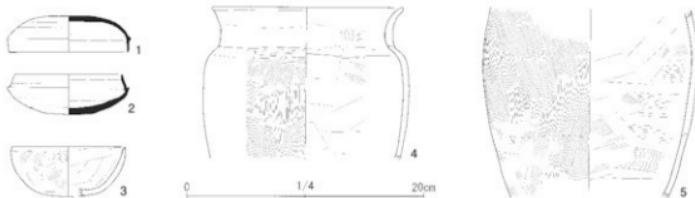


第20図 6号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物（第21図、第16表、図版22）

本遺構出土の遺物は、カマドおよびその周辺に限られる。出土遺物の中心はカマド内出土の土師器壺類で、器体には細かいハケメを残す調整技法を特徴とする壺類である。図示し得た資料は計5点の土器類で、完形資料はない。1・2が須恵器、3～5が土師器である。以下に器種の内訳を示すと、1が須恵器環口蓋、2が須恵器環口身、3が土師器環、4・5が土師器壺である。

これらの資料より本遺構の特徴を考えると、食膳具では須恵器環口蓋・身が土師器環類に換わって器種構成をなすものと思われる。これらの器種はとくに小形化が顕著で、これを手がかりにすると、猿投窓編年ではH-44窓式期と考えられる。以上より本遺構の年代を推測すると、概ね7世紀の第2四半期を下限年代とすることができよう。



第21図 6号住居跡出土遺物（1/4）

7号住居跡（第22図、図版7）

位置 A区のほぼ中央に位置し、発掘区ではK・L-10・11区に所在する。

重複関係 遺構間との重複関係では、6・8・9号住居跡および41号集石土坑と重複し、出土遺物に基づく新旧関係では9号住→8号住→本遺構→6号住→41号集石の順で構築されている。

遺存状態 本遺構の南側は6号住との重複により壊されているが、遺存部分は比較的良好である。

平面形 やや歪んでいるが、方形プランと推測される。

規模 東西長では北辺側4.50m、南北現存長では東辺側3.85mを測る。

主軸方位 カマドを基準に求めると、N-7°-Eである。

壁 現存範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、壁高は8~13cmを測る。

床面 現存範囲内では、黒褐色土と黄砂で貼り床が形成され、とくにカマドの周辺は全体に固く締まっている。

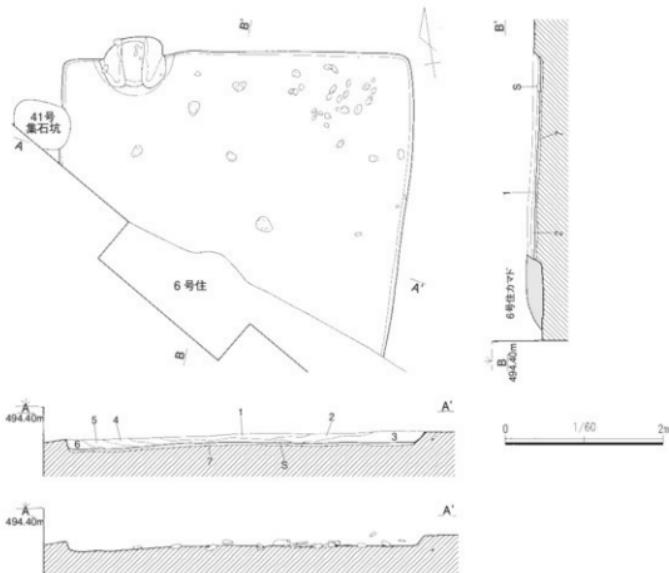
柱穴 調査した範囲内には存在していない。内部に柱をもたない無柱式構造の堅穴と考えられる。

周溝 調査した範囲内には存在していない。

覆土 6層に区分される。覆土の主体は黒褐色土と暗褐色土で、層界は比較的明瞭である。

カマド（第23図、図版8）

北壁の北西隅寄りに付設されている。最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで63cm、両袖部最大幅は83cm、焚口幅は約25cmである。袖部は黄褐色粘土と黄砂を含む暗褐色土もしくは黒褐色土で形成される。火床面は皿状を呈し、奥壁で急激に立ち上がる。また、両袖部および火床面の直下に掘り込みを有する。



7号住居跡土層説明

第1層 黒褐色土 (10YR2/25)。純土粒 (1mm±) 1%、炭化物粒子 (1mm±) 2

%、黄色粒 (1mm±) 4%含む。(緻密度：密、粘性：中)

第2層 黒褐色土 (10YR2/3)。1層との境界明瞭。層下位を中心に擬板状の
黄砂20%含む。(緻密度：やや密、粘性：中)第3層 細褐色土 (10YR3/3)。2層との境界比較的明瞭。炭化物粒 (1mm±)
1%、亜円礫 (3~10mm) 40%含む。(緻密度：稍、粘性：弱)

第4層 黒褐色土 (10YR2/2)。層上位に炭化物粒 (1~3mm) 1%点在。層中

に黄砂の薄層が形成。(緻密度：密、粘性：中)

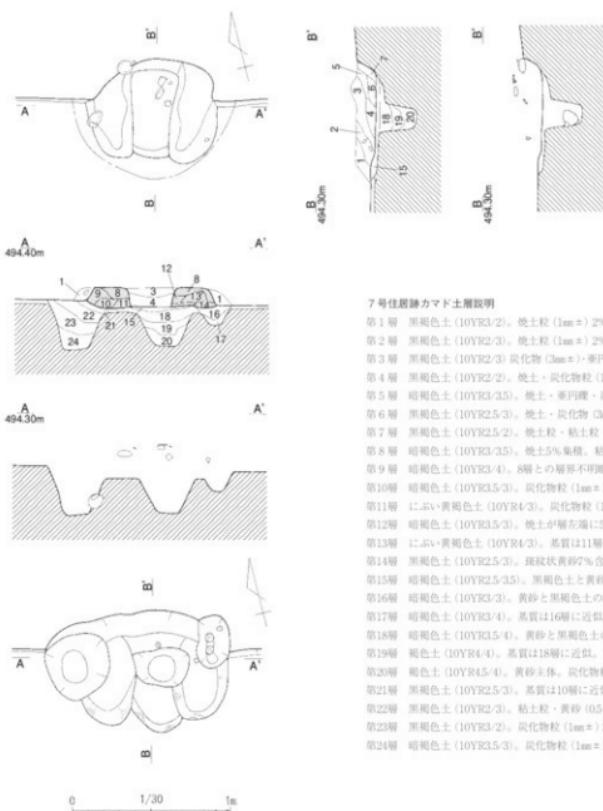
第5層 黒褐色土 (10YR3/2)。炭化物粒 (1mm±) 1%、亜円礫 (3~10mm) 5%、
織紋状黄砂10%含む。(緻密度：密、粘性：中)第6層 細褐色土 (10YR3/3)。基質は3層に近似。亜円礫や減少。(緻密度：
稍、粘性：弱)第7層 細褐色土 (10YR3/35)。貼り床。黒褐色土と黄砂で構成。(緻密度：
やや密、粘性：中)

第22図 7号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第24図、第17表、図版22)

遺構プラン確認時および覆土の調査時に、土師器や須恵器などの小破片が出土したのみで、図示し得た資料はわずかに2点である。これらもカマドの確認時に出土したもので、直接遺構の時期を示すものではない。図示し得た資料は、須恵器塊Aの底部片と縁釉陶器塊の口縁部から体部にかけての破片で、後者の縁釉陶器は遺跡内では唯一の資料である。

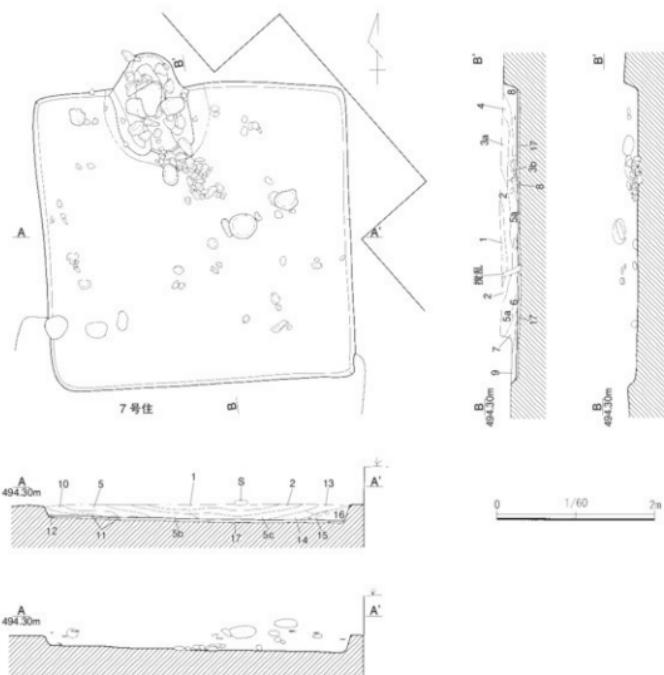
時期の詳細は不明であるが、他遺構との重複関係より推測すると7世紀第2四半期を下限年代とすることが考えられる。



第23図 7号住居跡カマド実測図 (1/30)



第24図 7号住居跡出土遺物 (1/4)



8号住居跡層説明

- 第1層 黒褐色土 (10YR2/2)。燒土粒 (1~5mm) 3%、塊状の粘土5%、炭化物粒 ($1mm\pm$) 2%含む。(緻密度: 密、粘性: 中-強)
 第2層 黑褐色土 (10YR3/2)。1層との境界不明瞭。基質は1層に近似。粘土10%増加。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第3a層 黑褐色土 (10YR3/2.5)。基質は2層に近似し、色調やや明化。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第3b層 黑褐色土 (10YR2/3)。基質は3a層に近似し、塊状の粘土15%集積。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第4層 黑褐色土 (10YR2/2)。3層との境界比較的明瞭。塊状の黄砂・粘土5%、炭化物粒 ($1mm\pm$) 2%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第5a層 明褐色土 (10YR3/3.5)。暗褐色土と黄砂の混合。(7:3)。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第5b層 明褐色土 (10YR3/3.5)。基質は5a層に近似し、黄砂増加。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第6層 黑褐色土 (10YR2/2)。炭化物粒 (2mm±) 2%、斑紋状の黄砂20%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第7層 明褐色土 (10YR3/3)。燒土粒 (1~2mm) 1%、粘土粒 (1~3mm) 2%、斑紋状黄砂7%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第8層 黑褐色土 (10YR2/3)。燒土粒 (1~3mm) 1%、炭化物粒 ($1mm\pm$) 2%、粘土粒 (1~3mm) 3%含む。(緻密度: 密、粘性: 中-強)
 第9層 明褐色土 (10YR3/3)。基質は7層に近似。黄砂増加。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第10層 にぶい明褐色土 (10YR4/3)。黄砂と暗褐色土の混合。(7:3)。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第11層 明褐色土 (10YR3/4.5)。黄砂主体 (80%)。(緻密度: やや粗、粘性: 弱)
 第12層 黑褐色土 (10YR2/2)。黄色粒 (1~2mm) 2%、層上位に炭化物 (3mm±) 1%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第13層 黑褐色土 (10YR2/2)。燒土粒・炭化物粒 (1~2mm) 2%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第14層 明褐色土 (10YR3/3)。炭化物粒 ($1mm\pm$) 1%、斑紋状の黄砂30%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第15層 明褐色土 (10YR3/3)。炭化物粒 ($1mm\pm$) 1%、斑紋状のシルト3%、黄砂20%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第16層 明褐色土 (10YR3/3.3)。基質は15層に近似。黄砂増。(緻密度: 密、粘性: 中)
 第17層 明褐色土 (10YR3/4)。粘り無、暗褐色と黄砂で構成。硬く締まる。(緻密度: 密、粘性: 中)

第25図 8号住居跡実測図 (1/60)

8号住居跡(第25図、図版7)

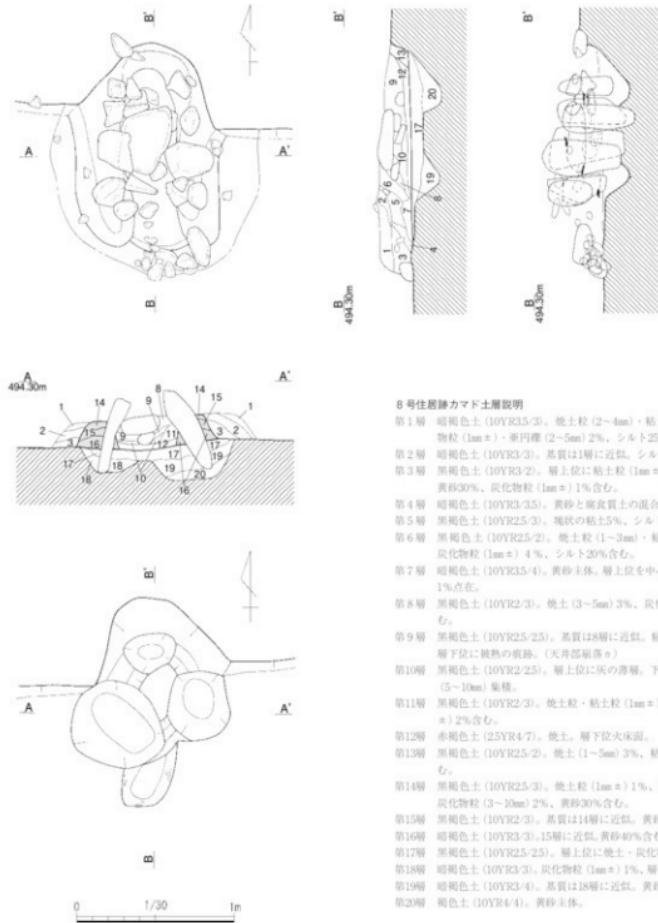
位置 A区のほぼ中央に位置し、発掘区ではK-9・10区を中心と所在する。

重複関係 7号住居跡と重複関係があり、本遺構→7号住の順で構築されている。

遺存状態 遺構の上面は削平され、南側では重複による影響も部分的に認められるが、遺構の全体が捉えられた堅穴住居跡である。

平面形 方形を呈する。

規模 長軸(東西)3.90~4.00m、短軸(南北)3.70~3.80m、床面積は約12mである。



第26図 8号住居跡カマド実測図 (1/30)

主軸方位 カマドを基準に求めると、N - 9° - Wである。

壁 全体にやや開きぎみに立ち上がり、遺存状態の良好な箇所で最大23cmを測る。

床 面 暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まっている。

柱 穴 竪穴の内部には存在していない。本遺構も内部に柱をもたない無柱式の構造と考えられる。

周溝 調査した範囲内には存在していない。

覆 土 内部は16層に区分される。上層は層界が不明瞭で、加えてレンズ状の堆積を示すことから自然埋没と考えられる。一方、下層は比較的明瞭で、礫の集中部分も認められることから埋没過程に人為的な影響が看取される。

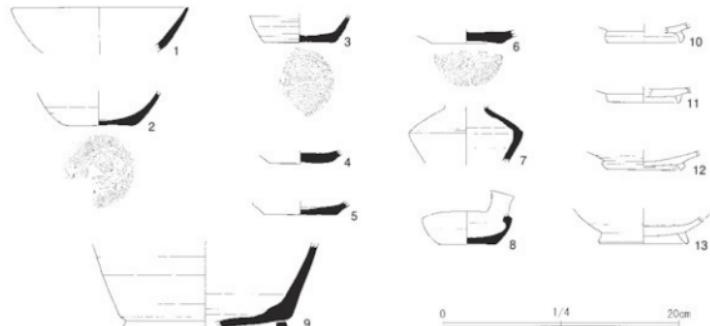
カマド(第26図、図版8)

北壁中央の西寄りに付設され、最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで133cm、両袖部最大幅は100cm、焚口幅は40cmほどである。両袖部とも河原石を芯材として用いて左右対称に配置しており、黄砂と黒褐色土で芯材を覆って袖部を形成している。火床面は皿状を呈し、その中央付近からは天井部の架構用材と推測される扁平な河原石が出土している。煙道部は急角度で立ち上がり、奥壁には黒褐色粘質土が塗り込まれている。

出土遺物(第27図、第18表、図版22)

遺構のプラン確認時および覆土の調査時に、須恵器や灰釉陶器などの小片が出土した。図示し得た資料は13点で、遺構の時期を直接示すものではないが、参考までに掲載した。

1～9が須恵器、10～13が灰釉陶器である。以下に器種の内訳を示すと、1～6が須恵器碗A、7が須恵器小形壺、8が須恵器平瓶、9が須恵器瓶、10～13が灰釉陶器壠である。時期の詳細は不明であるが、8号住居跡との重複関係より推測すると7世紀前半もしくはそれ以前と考えられる。



第27図 8号住居跡出土遺物(1/4)

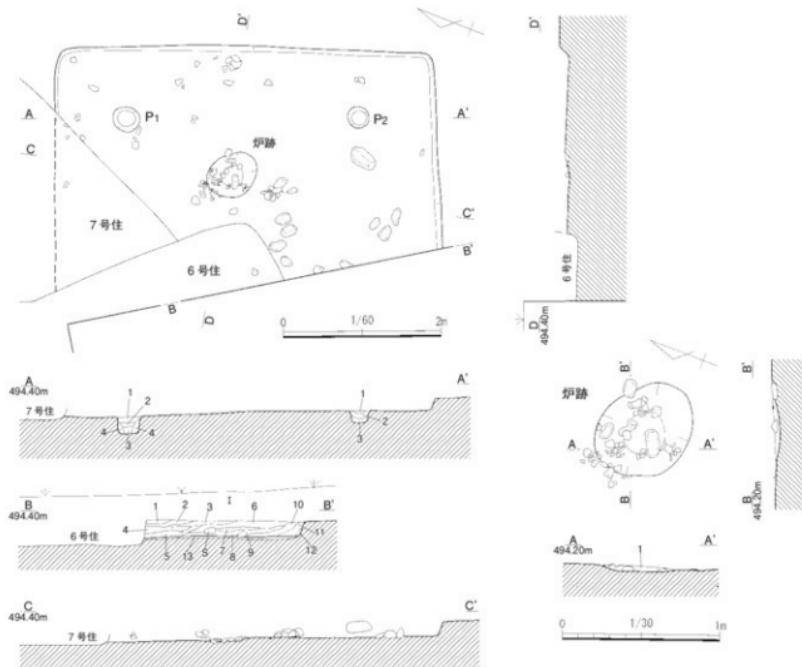
9号住居跡(第28図、図版7・8)

- 位置** A区のほぼ中央に位置し、発掘区ではK・L-11・12区に所在する。
- 重複関係** 6・7号住居跡と重複関係にあり、本遺構→7号住→6号住の順で構築されている。
- 遺存状態** 遺構の上面は削平され、失われている箇所もあるが、現存部分は比較的良好である。
- 平面形** 現存部分から推測すると方形と考えられる。
- 規模** 全容は不明であるが東辺側で485mを有する。柱穴の配置より推測すると485m四方のほぼ正方形の堪穴住居跡と考えられる。
- 主軸方位** 炉跡を基準を求めるに、N-53°-Eである。
- 壁** 全体にやや開きぎみに立ち上がり、遺存状態の良好な南東側では最大20cmを測る。
- 床面** 現存範囲は暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。
- 柱穴** 北辺側の二隅よりそれぞれ確認した。堪穴住居の対角線上に位置するものと考えられる。平面形は略円形を呈し、径25~30cm、深さはP1が20cm、P2が15cmを測る。また、P1の土層断面からは柱痕跡は確認されている。本来は四隅に柱穴が配されていたと考えられる。
- 周溝** 堪穴の内部には存在していない。
- 覆土** 12層に区分され、各層の層界は比較的明瞭である。また、覆土上層から床面直上にかけて土器や礫が出土したが、他遺構との重複がみられた部分では他時期の遺物が含まれていた。
- 炉跡**(第28図、図版8) 堪穴中軸線のやや東寄りに付設された地床炉である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸70cm、短軸54cm、断面形は皿状を呈し、深さは中心部で3cmほどを測る。炉内には枕石と考えられる20cmほどの礫が置かれていた。

出土遺物(第29図、第19表、図版22)

本遺構出土の遺物は地床炉とその周辺および覆土下層から出土した弥生後期末の土器類が本遺構に伴う遺物と考えられるが、覆土上層からも若干出土した。後者の資料は古墳後期以降の須恵器や土師器類で他遺構との重複によってもたらされた本遺構とは直接関わりのない副次的な遺物と考えられる。なお、参考資料として他時期の資料についても掲載した(4~11)。また、拳大から人頭大ほどの礫が主に覆土下層から中層にかけて出土したが、その中には砥石と磨石が含まれていた。図示し得た資料は、当該期の土師器3点と、参考資料として掲載した須恵器と土師器類の8点、それに砥石と磨石の計13点である。以下に器種の内訳を示すと、1が壺、2が高壺、3が鉢、4~11までが参考資料で、4~6が須恵器壺H蓋、7が須恵器壺H身、8が須恵器無蓋高壺、9が須恵器塊B、10が畿内産の土師器盤B、11が土師器壺、12が砥石、13が磨石である。

1~3の資料より本遺構の時期について検討すると、とくに2の高壺と3の鉢は北陸地方の弥生時代後期後半から古墳時代への転換期である広義の月影式特有の影響が看取される資料であることを前提にすると、概ね弥生時代後期末の範疇で理解できるものとみられる。また、飛騨地方と接する富山における編年研究に照らすと下老子Ⅲ式2~3に比定できるものと推測される(岡本 2006)。



9号住居跡土層説明

第1層 黒褐色土(10YR2.5/3)。炭化物粒(1mm±)1%、黄色粒(1mm±)・斑紋状シルト3%、赤色粒(1mm±)2%含む。(緻密度:密、粘性:中)

第2層 暗褐色土 (10YR3/3)。基質は1層に近似する。(緻密度:密、粘性:中)
第3層 黒褐色土 (10YR25/25)。基質は2層に近似。斑紋状の黄砂3%含む。
(緻密度:密、粘性:中)

第4層 暗褐色土(10YR25/35)。基質は3層に近似。層中央に黄砂薄く堆積。
黒色約2%、砂積土2%。(緻密度:やや密、粘性:中)

第5層 黑褐色土(10YR2/25)。炭化物粒(1~2mm)3%, 黃色粒(1mm±)1%含む。層下位に黃砂漿 \pm 堆積。(緻密度:やや密、粘性:中)

第6層 暗褐色土(10YR35/25)。炭化物粒(1~3mm)1%、黄砂3%、層下位に赤色粒($1mm\pm$)3%含む。(緻密度:やや密、粘性:中~弱)

第7層 黒褐色土(10YR3/25)。亜円礫(2~3mm)3%、層下位に黄砂2%含む。
(微密度:やや粗、粘性:弱~中)

第8層 暗褐色土(10YR3/3.5)。彫紋状・塊状の黄砂30%、層上位に炭化物粒・赤色粒(1mm±)2%含む。(緻密度:やや粗、粘性:中~弱)

第9層 暗褐色土(10YR3/4)。上層との層界比較的明瞭。炭化物粒(1mm±)
1%、黄色粒(1mm±)2%含む。(緻密度:密、粘性:中)

第10層 暗褐色土(10YR3.5/4)。基質は9層に近似し、斑紋状の黄砂20%含む。

第11層 暗色土 (10YRA/4)。基質は11層に近似。黄砂10%含む。(緯密度:

第12層 暗褐色土(10YR3/3)。炭化物粒(1~2mm)1%、斑紋状の黄砂約3%を含む。(鉄分高、粘性:中)

第13層 暗褐色土 (10YR3/4)。貼り床。暗褐色土と黄砂で構成。硬く締まる。
(緻密度: 密、粘性: 中)

(緻密度：やや密、粘性：中～弱)

卷八

第1層 黒褐色土 (10YR25/3)。粘土粒 (1~2mm) 2%, 砂化特群 (1~2mm) 1%, 垂円礫 (1~10mm) 3% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第2層 黑褐色土 (10YR25/25)。1層との層界不明瞭。基質は1層に近似。

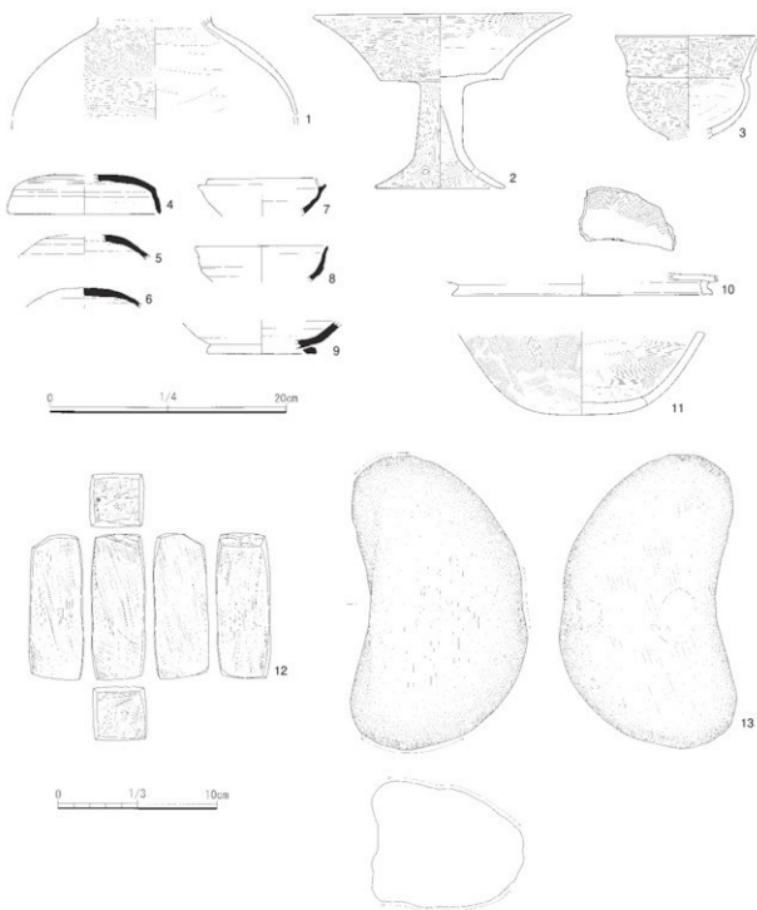
黒褐色土(10YR2/3)、2層との層界不明瞭、基質は2層に近似、細

左端に塊状の黃砂7%含む。(概密度:やや密、粘性:中)

第4層 黒褐色土(10YR3/25)。粘土粒(1~2mm)3%、炭化物粒(1~2mm)2%、層下位に亜円礫(1~15mm)10%含む。(総密度:やや粗、粘性:弱)

第1層 暗褐色土(7.5YR3/3)。層下位に燒土20%、炭化物(3~5mm)5%含む。

第28図 9号住居跡および炉跡実測図 (1/60、1/30)



第29図 9号住居跡出土遺物(1/4、1/3)

10号住居跡（第30図、図版8）

位置 A区の北西端に位置し、発掘区ではK-1・2区に所在する。

重複関係 1号溝状遺構と重複関係にあり、本遺構→1号溝の順に構築されている。

遺存状態 本遺構の北東側は調査区外となり、また南辺側は1号溝との重複により壊されている。

平面形 現存範囲より推測すると方形プランと考えられる。

規模 詳細は不明であるが、調査区境界の南東付近に堅穴の南東隅が位置するものと仮定すると、一辺3m前後の堅穴住居跡であったことが窺える。

主軸方位 出土遺物からみて厨房施設はカマドと考えられるが未確認のため詳細は不明である。仮に西壁に基準を求めるとき、N=7°Wである。

壁 現存範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、遺存状態の良好な西壁側では最大25cmを測る。

床面 現存範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。

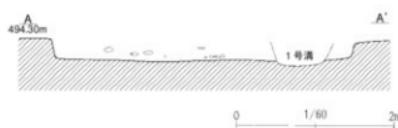
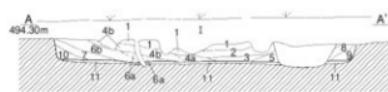
柱穴 調査した範囲内には存在していない。

溝 調査した範囲内には存在していない。

覆土 10層に区分され、層界は比較的明瞭である。覆土中層から下層にかけて礫と少量の遺物が確認された。

カマド 現状では不明であるが、未調査区側の北壁もしくは東壁に付設されていると考えられる。

出土遺物 遺構内出土の遺物は、覆土中より発見された土師器や須恵器の小破片のみで、図示し得た資料はない。本遺構の時期については詳細不明であるが、小破片の遺物より推測すると、古墳時代後期もしくはそれ以降と考えられる。



10号住居跡土層説明

- 第1層 黒褐色土 (10YR3-2), 塗被状マンガン20%, 茶化物粒 (1~2mm) 3%含む。(緻密度: 密, 粘性: 中)
- 第2層 黒褐色土 (10YR2-2) 1層との層界明瞭。斑紋状マンガン5%, 黄砂3%含む。(緻密度: 密, 粘性: 中)
- 第3層 黑褐色土 (10YR2-2), 2層との層界不明瞭。斑紋状の黄砂2%含む。(緻密度: やや密, 粘性: 中)
- 第4層 黑褐色土 (10YR2-2S). 上層との層界比較的明瞭。黄砂15%含む。(緻密度: やや密, 粘性: 中)
- 第5層 黑褐色土 (10YR3-2S), 層界比較的明瞭。斑紋状の黄砂10%, 茶円錐 (2~20mm) 3%含む。(緻密度: 密, 粘性: 中)
- 第6a層 黑褐色土 (10YR2-2), 基質は粘土に近似。茶円錐を (1~10mm) 3%含む。(緻密度: やや密, 粘性: 中)
- 第6b層 黑褐色土 (10YR3-2), 基質は6mmに近似。茶円錐が減少。(緻密度: やや密, 粘性: 中)
- 第7層 明褐色土 (10YR3-2), 層上位に斑紋状のマンガンが20%, 黄砂5%, 茶化物粒 (2~3mm) 10%, 茶円錐が (2~5mm) 5%含む。(緻密度: やや粗, 粘性: 中)
- 第8層 黑褐色土 (10YR3-2), 斑紋状マンガン7%, 黄砂5%含む。(緻密度: やや密, 粘性: 中)
- 第9層 明褐色土 (10YR3-3), 8層との層界比較的明瞭。塊状の黄砂40%含む。(緻密度: やや粗, 粘性: 中)
- 第10層 明褐色土 (10YR3-3), 黄砂主体 (60%). 茶円錐 (2~3mm) 3%含む。(緻密度: 粗, 粘性: 粗)
- 第11層 明褐色土 (10YR3-4), 貼り床。明褐色土と黄砂で構成。(緻密度: やや密, 粘性: 中)

第30図 10号住居跡実測図 (1/60)

11号住居跡（第31図、図版8）

位置 A区の北西側に位置し、発掘区ではK-5・6区に所在する。

重複関係 本遺構の東隅の一部分が1号堅穴状遺構により壊されている。

遺存状態 北東側は調査区外であるが、調査した範囲内は比較的良好である。

平面形 現状をより推測すると、長方形プランと考えられる。

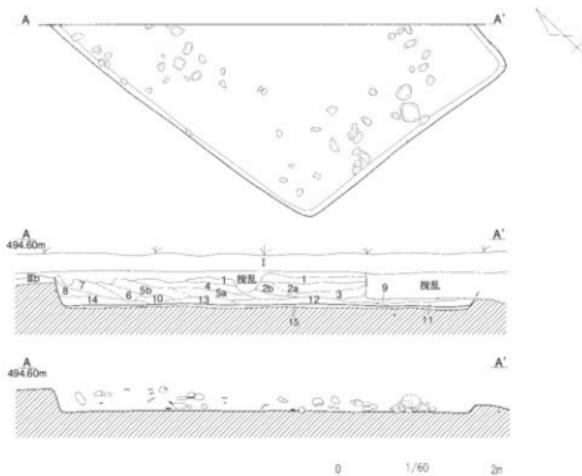
規模 長軸現存長（南北）4.10m、短軸（東西／南辺）3.30mを測る。

主軸方位 出土遺物からみて厨房施設はカマドと考えられるが未確認のため詳細は不明である。仮に東カマドであると、主軸方位はN-90°-Eである。

壁 調査した範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、壁高は北西側で最大35cmを測る。

床面 調査した範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。

柱穴 調査した範囲内には存在していない。



11号住居跡土層剖面

第1層 黒褐色土 (10YR3/2)。斑状のマンガン10%、炭化物粒 (2mm±)・
亜円粒 (2~5mm) 2%含む。(緻密度：密、粘性：中)

第2a層 黒褐色土 (10YR3/2)。1層との層界不明瞭。1層に比べ亜円粒若干減少。(緻密度：やや密、粘性：中)

第2b層 黒褐色土 (10YR2.5/3)。基質は2a層に近似。黄砂微量含む。(緻密度：
やや密、粘性：中)

第3層 黑褐色土 (10YR2.5/2)。上層との層界比較的明瞭。斑状含マンガン・
炭化物粒・亜円粒 (2~3mm) 1%含む。(緻密度：密、粘性：中)

第4層 黑褐色土 (10YR2.5/2)。層上位に斑状含マンガン7%、亜円粒 (3
~5mm) 1%、斑状含黄砂2%、炭化物粒 (1~3mm) 2%含む。(緻密度：
やや密、粘性：中)

第5a層 斑状含土 (10YR3/3)。4層との層界比較的明瞭。斑状含マンガン5%、
炭化物粒・亜円粒 (1~3mm) 2%含む。(緻密度：密、粘性：中)

第5b層 黑褐色土 (10YR2/2)。基質は5a層に近似。(緻密度：密、粘性：中)

第6層 黑褐色土 (10YR2.5/3)。5b層との層界比較的明瞭。斑状含マンガン
3%、炭化物粒 (1~3mm) 1%含む。層中に黄砂の薄層を確認。(緻密度：
やや密、粘性：中)

第7層 斑状含土 (10YR3/3)。斑状含黄砂・炭化物粒 (1~5mm) 3%点在。
(緻密度：やや密、粘性：中)

第8層 斑状含土 (10YR3/3)。層下位に炭化物 (1~3mm) 3%集積。(緻密度：
密、粘性：中)

第9層 斑状含土 (10YR3/3)。3層との層界比較的明瞭。斑状含マンガン
2%、黄砂2%含む。(緻密度：密、粘性：中~弱)

第10層 斑状含土 (10YR3/3)。上層との層界比較的明瞭。層下位に黄砂5%
含む。(緻密度：やや密、粘性：中~弱)

第11層 にぶい斑状含土 (10YR4/3)。斑状含マンガン20%、炭化物粒 (2mm±)
1%含む。(緻密度：やや密、粘性：固~中)

第12層 斑状含土 (10YR3/4)。黄砂土体 (20%)、亜円粒 (5~40mm) 5%含む。
(緻密度：粗、粘性：弱~弱)

第13層 黑褐色土 (10YR3/2)。黄砂2%、亜円粒 (2~5mm) 3%含む。(緻密度：
やや粗、粘性：弱~中)

第14層 斑状含土 (10YR4/4)。黄砂土体 (70%)、炭化物粒 (1mm±) 1%含む。(緻
密度：やや密、粘性：弱)

第15層 斑状含土 (10YR3.5/3.5)。貼り床。暗褐色土と黄砂で構成。硬く固
まる。(緻密度：密、粘性：弱~中)

第31図 11号住居跡実測図 (1/60)

周溝 調査した範囲内には存在していない。

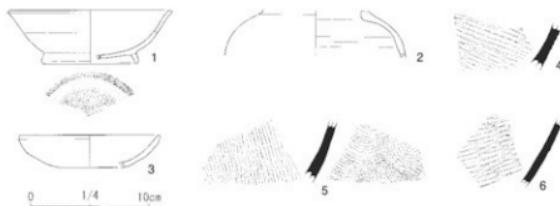
覆土 覆土は14層に区分され、層界は比較的明瞭であることから人為的な影響が看取される。

カマド 現状では不明であるが、未調査区側の東壁もしくは北壁に付設されていると考えられる。

出土遺物(第32図、第20表、図版23)

本遺構出土の遺物は量的には少ないが、層位的には覆土の全体から発見されている。また、拳大から掌大の礫も同様に確認されている。出土遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器などの小破片で占められている。図示し得た資料は計6点で、1・2が灰釉陶器、3が土師器、4～6が須恵器である。以下に器種の内訳を示すと、1が灰釉陶器壇、2が灰釉陶器広口瓶、4～6が須恵器壺である。

出土遺物より器種構成をみてみると、食膳具では灰釉陶器を主体とし、須恵器では糸切り未調整の壇A・壇Bや、土師器壺などがわずかに共伴するものと考えられる。図示し得た灰釉陶器より時期を求めるに、猿投窯編年では黒釜90号窯式期と推測され、9世紀後半を下限年代とすることができよう。



第32図 11号住居跡出土遺物(1/4)

12号住居跡(第33図、図版8)

位置 C区の北西側に位置し、発掘区ではK-24～26区に所在する。

重複関係 調査区内では他遺構との重複関係はみられない。

遺存状態 壑穴の北東側は調査区外に及んでおり、南西壁は攪乱により失われている。

平面形 現存部より推測すると、方形プランと考えられる。

規模 北西および南東間の距離より求めると、一辺740m前後の大形の壃穴住居跡と推測される。

主軸方位 仮に北東壁にカマドを想定すると、主軸方位はN-40°-Eである。

壁 現存部ではほぼ垂直に立ち上がる。北東側の土層断面で壁の立ち上がりを確認すると最大50cmを測る。

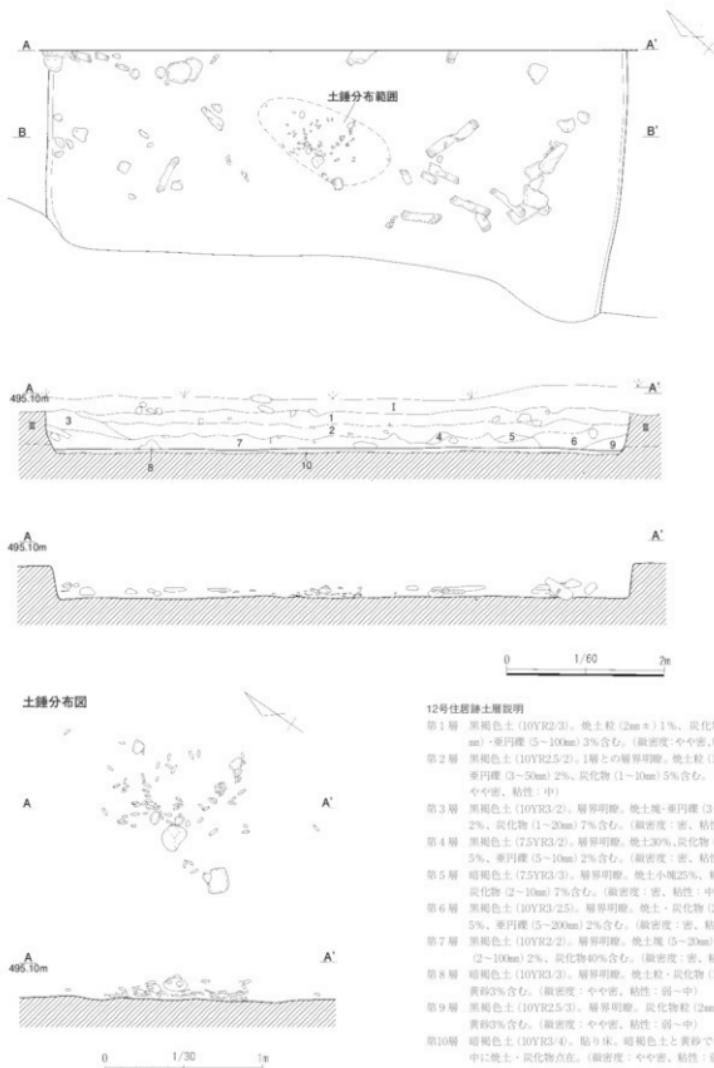
床面 調査した範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。

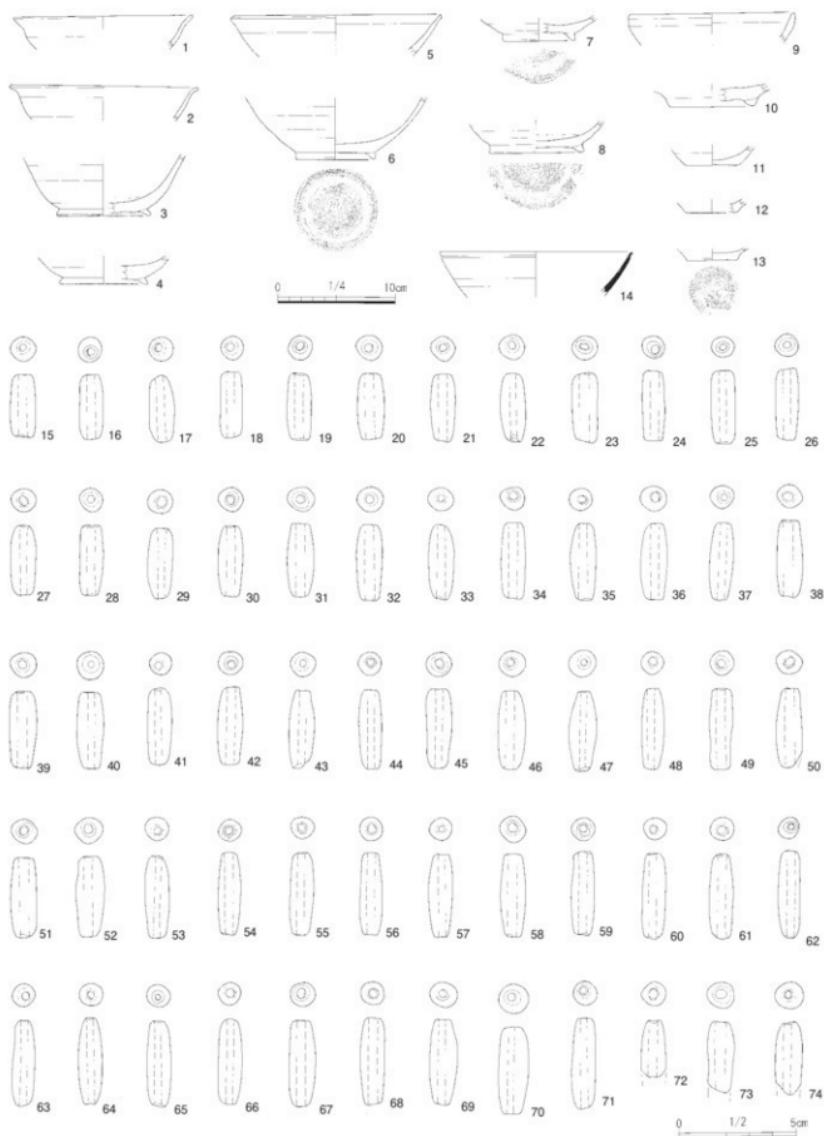
柱穴 調査した範囲内には存在していない。

周溝 調査した範囲内には存在していない。

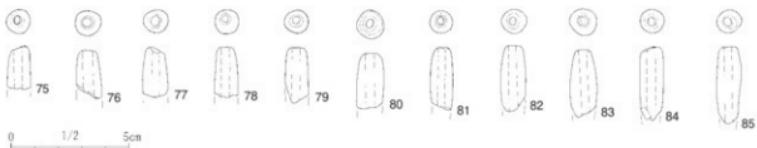
覆土 9層に区分される。各層の層界は明瞭で、焼土や炭化物が目立つ。とくに、覆土下層から床面直上にかけて炭化材や炭化物が多量に出土したことから焼失家屋と考えられる。また、灰釉陶器類を中心とする遺物や、拳大から掌大ほどの礫も層中より出土している。

カマド 出土遺物よりカマドの存在が考えられるが設置場所は不明。本遺跡の場合は北壁もしくは





第34図 12号住居跡出土遺物 1 (1/4、1/2)



第35図 12号住居跡出土遺物2(1/2)

北東壁に多いことから北東壁側に付設されている可能性が考えられる。

出土遺物(第34・35図、第21表、図版23)

本遺構出土の遺物は量的には少ないが、層位的には覆土の全体から発見されている。また、覆土下層から床面直上にかけて出土した土錘は注目される。食膳具は灰釉陶器が主体で、ロクロ土師器が客体的に存在している。須恵器では塊類がわずかに出土したのみである。煮炊具の詳細は不明である。図示し得た資料は、土錘を含めると計85点である。1～8が灰釉陶器、9～13がロクロ土師器、14が須恵器、15～85が土錘である。以下に器種の内訳を示すと、1～8が灰釉陶器塊、9がロクロ土師器塊AorB、10がロクロ土師器塊B、11がロクロ土師器塊A、12・13が小形のロクロ土師器塊A、14が須恵器塊AorB、15～85が細管状土錘である。図示し得た土錘は71点で、この他に小破片がわずかに存在する。形態はいずれも細形の管状土錘である。全体が現存する57点について長さ・重さを測ると、最小が15の3.9cm、最大が71の5.7cm、重さは最小が17の93g、最大が71の13.6gである。平均値では長さが約4.9cm、重さが約11.1gである。

主体となる灰釉陶器塊は、やや深みのある器形で、高台は形骸化し、断面三角形の三角高台や外に開くものなどで、全体に低いもので占められる。底部は糸切り未調整のものが目立つ。なお、小塊はみられない。図示し得た灰釉陶器より時期を求めるに、猿投窯編年では折戸53号窯式から東山72号窯式期と推測され、10世紀後半を下限年代とすることができよう。

13号住居跡(第36図、図版8)

位置 C区の南東側に位置し、発掘区ではL-53区に所在する。

重複関係 本遺構は14号住居跡と重複関係にあり、新旧関係では本遺構の方が新しい。

遺存状態 調査した範囲内は堪穴住居跡の北東隅の一部と考えられ、大半は調査区外に及んでいる。なお、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形 調査した範囲より推測すると方形プランと考えられる。

規模 現状では不明である。

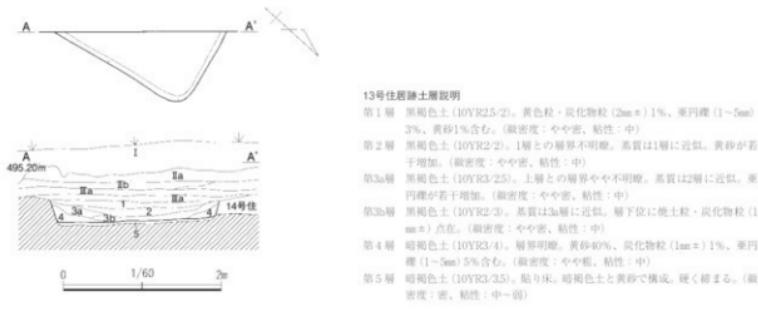
主軸方位 仮に北カマドと仮定すると、N-16°-Wである。

壁 現存部ではほぼ垂直に立ち上がる。調査区境界の土層断面で壁の立ち上がりを確認すると最大で30cmを測る。

床面 調査範囲内では、暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。

柱穴 調査範囲内には存在していない。

周溝 調査範囲内には存在していない。



第36図 13号住居跡実測図 (1 / 60)

覆 土 4層に区分される。各層の層界は不明瞭な部分が多く、またレンズ状堆積を示すことから自然埋没と考えられる。

カマド 出土遺物からみて厨房施設はカマドと考えられるが未確認のため詳細は不明である。但し、本遺跡で調査した竪穴住居跡のカマド設置場所から推測すると北カマドの可能性が高い。

出土遺物 遺構内出土の遺物は、覆土中より発見された土師器や須恵器の小破片のみで、図示し得た資料はない。時期の詳細は不明であるが、14号住との重複関係より推測すると8世紀前半以降の構築年代が考えられる。

14号住居跡（第37図、図版9）

位 置 C区の南東側に位置し、発掘区ではK・L-52・53区に所在する。

重複関係 13号住居跡およびC区南側配石群と重複関係にあり、新旧関係では本遺構→13号住→南側配石群の順で構築される。

遺存状態 南西側が調査区外となり、遺構間との重複により壁の一部が失われている。なお、遺構の現存部分は比較的良好である。

平面形 現存部分より推測すると方形プランである。

規 模 北西辺および南東辺間の距離より竪穴の規模を求めるに、北西 - 南東辺間で6.45mである。
主軸方位 N - 52° - E である。

壁 調査範囲内ではほぼ垂直に立ち上がる。また、調査区境界の土層断面で壁の立ち上がりを確認する。北面傾斜は最大12度を測る。

¹⁰ 例本著用は、これは略綱目上と並んで、日本形成され、中西は合体に因る結果である。

^註 実は調査範囲内では存在していない。堅牢の内部に柱をもたない無柱式の構造と考えられる。

溝 調査範囲内には存在しない。

土 10層に区分され、各層の層界は明瞭である。覆土上層から床面直上まで須恵器、土師器、瓦等の遺物が数多く出土しており、層上の相沿変遷によってその影響を受けていた。

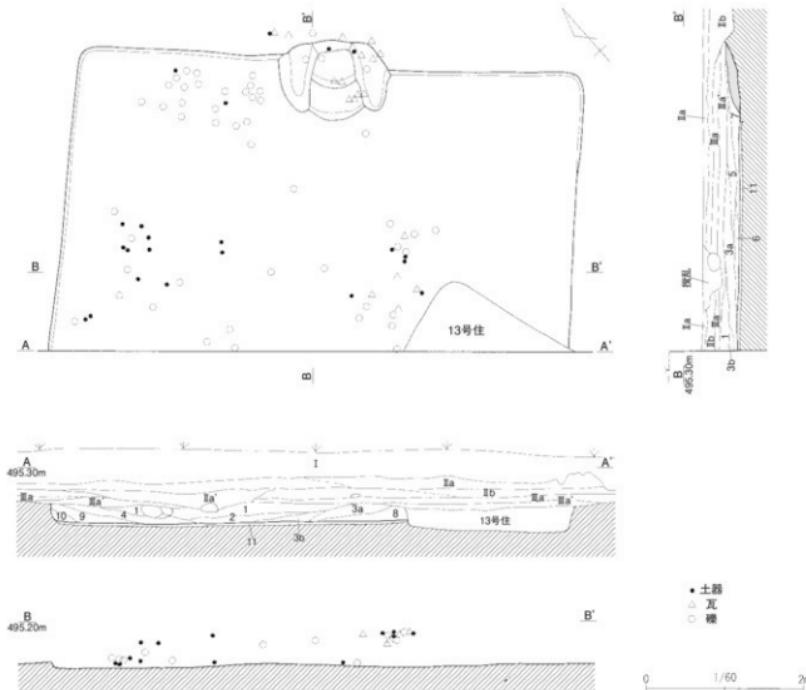
卷之二

此座標の位置を中心とした移動範囲は、最終的に検出された重心に適用され、軸回転から振幅の変化

上がりまで100cm、両袖部最大幅は146cm、焚口幅は約70cmである。天井部は壊れていたが、袖部は黒褐色土を主体とする用材で積まれる。火床面は皿状を呈し、奥壁寄りが一段低い構造となっており、最奥部で急激に立ち上がる。

出土遺物 (第39・40図、第22表、図版24・25)

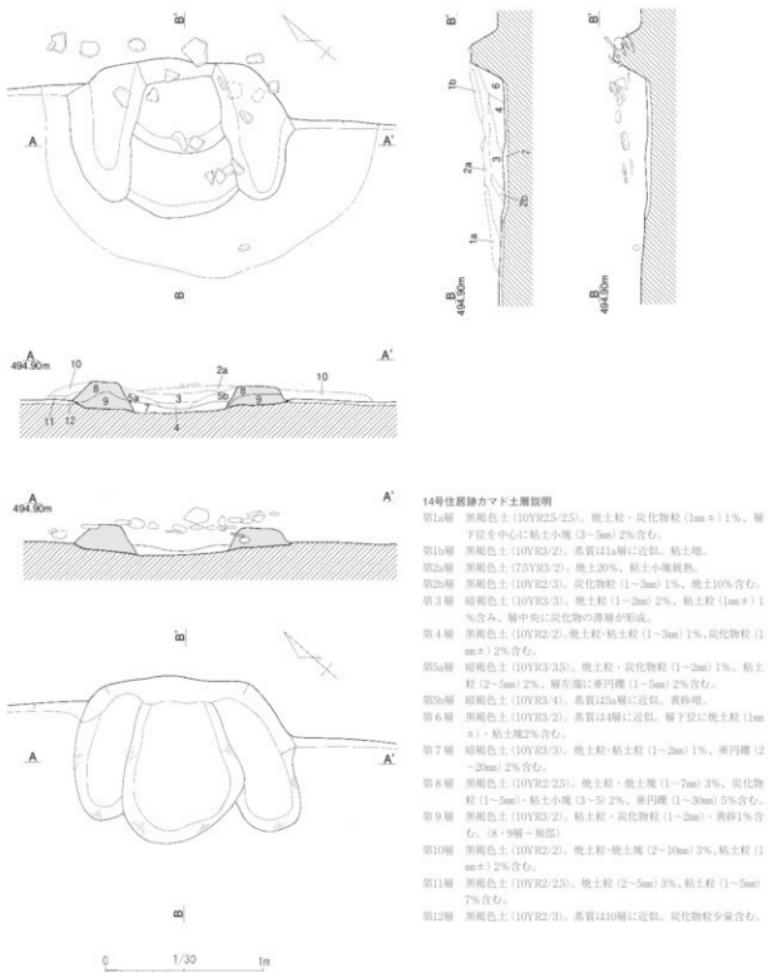
本遺構出土の遺物は比較的まとまっており、層位的には覆土の全体から確認されている。また、瓦の出土が注目される。食膳具は須恵器が主体で、小片の中には土師器もみられる。煮炊具は一例のみであるが長胴の土師器甕も出土している。図示し得た遺物は瓦、砥石を



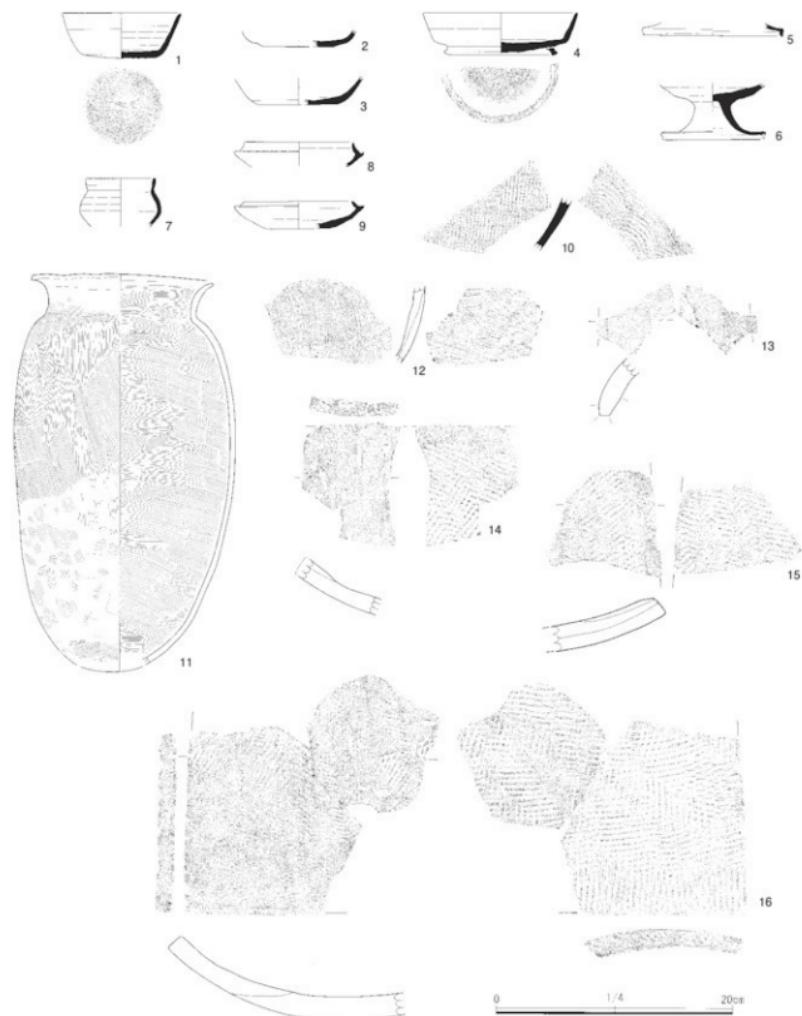
14号住跡土層説明

- | | |
|--|--|
| 第1層 黒褐色土 (10YR2/2.5)。燒土粒・炭化物粒 (1mm±) 1%、亜円錐 (5~30mm) 20%含む。(緯密度：密、粘性：中) | 第6層 黒褐色土 (10YR2/10)。黄砂2%、亜円錐 (1~5mm) 5%、層下位に燒土 (1~3mm)・炭化物粒 (1mm±) 2%含む。(緯密度：やや密、粘性：弱~中) |
| 第2層 黒褐色土 (10YR2/2.5)。1層との境界不明瞭。基質は1層に近似。黄砂微量含む。(緯密度：密、粘性：中) | 第7層 黒褐色土 (10YR2.5/2.5)。基質は5層に近似。層下位に粘土粒 (1~3mm) 2%を含む。(緯密度：密、粘性：中) |
| 第3a層 黒褐色土 (10YR3/2)。1層との境界明瞭。燒土粒・炭化物粒 (1mm±) 1%、亜円錐 (1~5mm) 2%、黄砂5%含む。(緯密度：やや密、粘性：中) | 第8層 黒褐色土 (10YR2.5/2)。基質は3a層に近似。亜円錐増。(緯密度：やや密、粘性：中~弱) |
| 第3b層 黒褐色土 (10YR3/2.5)。基質は4層に近似。亜円錐増。(緯密度：やや密、粘性：中~弱) | 第9層 黒褐色土 (10YR2/3.5)。基質は4層に近似。黄砂15%増。(緯密度：やや密、粘性：中~弱) |
| 第4層 矾化物土 (10YR3/3)。層界明瞭。燒土粒 (1mm±) 1%、炭化物粒 (1mm±) 2%、塊状の黄砂7%含む。(緯密度：やや密、粘性：中) | 第10層 矶化物土 (10YR3/4)。炭化物粒 (1mm±) 1%、亜円錐 (1~8mm) 5%、塊状の黄砂30%含む。(緯密度：密、粘性：弱) |
| 第5層 黒褐色土 (10YR2.5/2)。基質は4a層に近似。粘土含む。(緯密度：やや密、粘性：中) | 第11層 矶化物土 (10YR3/3)。貼り床。磧褐色土と黄砂で構成。硬く緻まる。(緯密度：密、粘性：中) |

第37図 14号住跡実測図 (1/60)



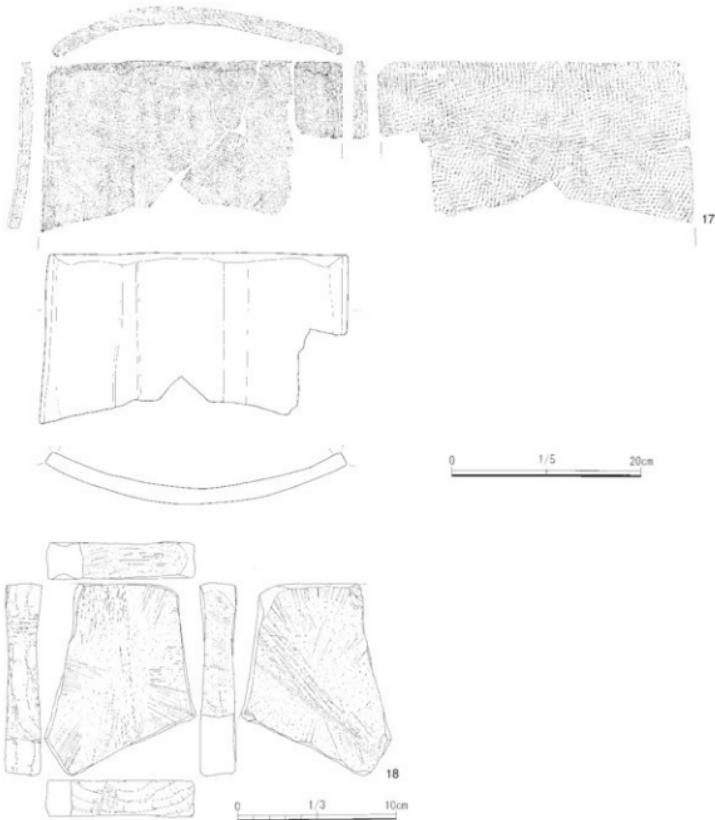
第38図 14号住居跡カマド実測図（1/30）



第39図 14号住居跡出土遺物1(1/4)

含めると計18点である。1～10が須恵器、11・12が土師器、13～17が瓦、18が砥石である。以下に器種の内訳を示すと、1～3が須恵器壺A、4が須恵器壺B、5が須恵器蓋、6が須恵器高壺、7が小形の須恵器広口壺、8・9が須恵器壺H身、10が須恵器壺、11・12が土師器壺、13が丸瓦、14～17が平瓦、18が砥石である。

出土遺物より器種構成をみてみると、食膳具では無台・有台の須恵器壺類（壺G・壺A・壺B）が中心で、無台のものは腰部がやや丸く、有台のものは底部外周のやや内側に高台が付けられる。古墳時代の遺制を残す壺H身も若干出土しているが、糸切り未調整の塊は認められない。煮炊具は土師器長胴の丸底壺で平底壺は出土していない。瓦類は上町遺跡D地点で主体的に出土した三重圓縁單弁十葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦との組合せに



第40図 14号住居跡出土遺物2 (1/5、1/3)

伴う瓦類と考えられ、古川盆地南部の国府町芦谷窯跡（丸山窯跡）から供給されたものと推測される。図示し得た須恵器類より時期を考えると、猿投窯編年では岩崎41号窯式から高藏寺2号窯式並行頃と推測され、8世紀前半を下限年代とすることができよう。

15号住居跡（第41図、図版9）

位 置 C区の南東側に位置し、発掘区ではL-54・55区に所在する。

重複関係 5号配石およびC区南側配石群と重複関係にあり、新旧関係では本遺構→C区南側配石群→5号配石の順で構築される。

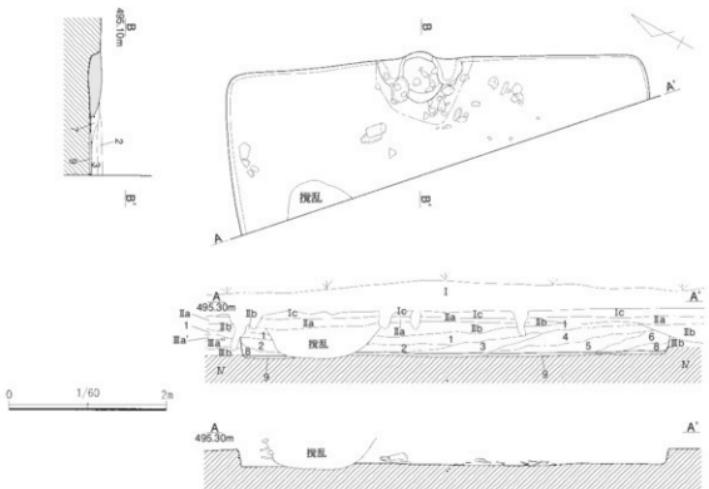
遺存状態 南西側が調査区外となり、遺構間との重複により壁の一部が失われている。なお、遺構の現存部分は比較的良好である。

平 面 形 現存部分より推測すると方形プランである。

規 模 北西辺および南東辺の距離より堅穴の規模を求めるに、北西-南東間で5.40mである。

主軸方位 N-56°-Eである。

壁 調査範囲内ではほぼ垂直に立ち上がる。また、調査区境界の土層断面で壁の立ち上がりを



15号住居跡土層説明

第1層 黒褐色土 (10YR2/3)。他土粒・炭化物粒 (1~3mm) 1%、亜円錐 (5~10mm) 2%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)

第2層 黒褐色土 (10YR2/3)。1層との層界不明瞭。基質は1層に近似。層下位に黄砂2%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第3層 黑褐色土 (10YR2/2)。層界明瞭。他土粒・亜円錐 (2~5mm) 1%含み、層中に炭化物の薄層が形成される。(緻密度: 密、粘性: 中~強)

第4層 黑褐色土 (10YR2/2)。基質は1層に近似。(緻密度: 密、粘性: 中)

第5層 黑褐色土 (10YR3/2)。他土粒・炭化物粒 (1~2mm) 1%、亜円錐 (1~10mm) 3%、塊状の黄砂5%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第6層 黒褐色土 (10YR3/2)。基質は5層に近似。黄砂10%増。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第7層 黒褐色土 (10YR2/2.5)。他土粒・炭化物粒 (1mm) 1%、亜円錐 (1~3mm) 1%含む。層下位に他土粒 (1mm) 1%点在。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第8層 黒褐色土 (10YR3/4)。炭化物粒 (1mm) 1%、亜円錐 (1~5mm) 5%、塊状の黄砂30%含む。(緻密度: 稀、粘性: 強)

第9層 黒褐色土 (10YR3/3)。粘り無。黑褐色土と黄砂で構成。硬く固まる。(緻密度: 密、粘性: 中~弱)

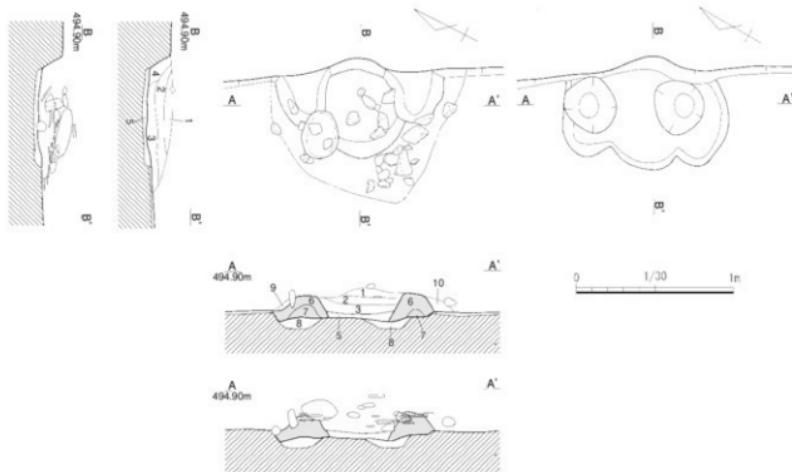
第41図 15号住居跡実測図 (1/60)

確認すると、北西壁側で最大25cmを測る。

- 床 面** 調査範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。
- 柱 穴** 調査範囲内では存在していない。前述の14号住と同様に竪穴の内部に柱をもたない無柱式の構造と考えられる。
- 周 溝** 調査範囲内には存在していない。
- 覆 土** 8層に区分され、各層の層界は比較的明瞭で、人為的影響が看取される。また、覆土下層から床面直上にかけて遺物や礫が出土している。

カマド(第42図、図版9)

北東壁のほぼ中央に付設され、最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで63cm、両袖部最大幅は106cm、焚口幅は55cmほどである。天井部は崩落していたが、袖部は黒褐色土を主体とする用材で積まれ、袖部の真下には円形の掘り込みが確認された。火床面は皿状を呈し、最奥部で急激に立ち上がる。



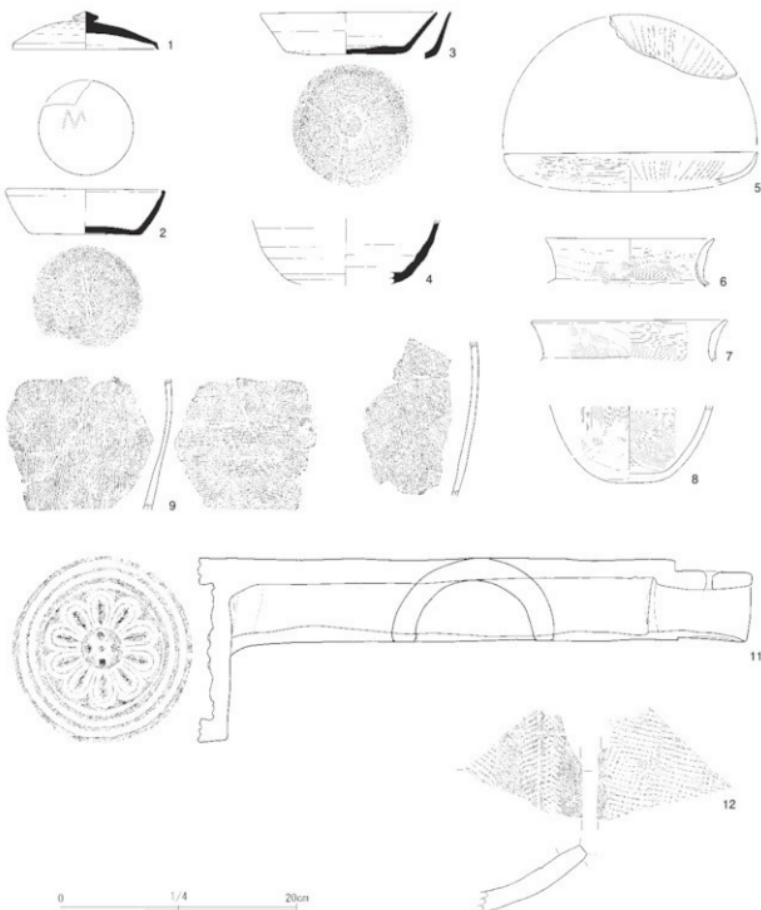
15号住居跡カマド土層説明

- | | |
|---|---|
| 第1層 黒褐色土 (10YR2/2)。他土壤 (3~10mm)・粘土粒 (2mm±) 3%、炭化物粒 (2mm±) 1%、層中に粘土の薄層が形成。 | 第6層 黒褐色土 (10YR2/3)。他土 (1~10mm) 3%、粘土 (1~3mm) 5%、炭化物粒 (1mm±) 1%含む。 |
| 第2層 黒褐色土 (10YR3/2)。被熱粘土塊20%、他土15%含む。 | 第7層 黒褐色土 (10YR2/3)。基質は16層に近似し、亜円窓 (2~10mm) 3%含む。(6~7層 - 壁部) |
| 第3層 黒褐色土 (10YR3/3)。炭化物粒 (2mm±) 1%、亜円窓 (5~15mm) 5%含み、層下位に焼土と灰の薄層が形成。 | 第8層 黒褐色土 (10YR2/2)。他土粒・炭化物粒・粘土粒 (2mm±) 1%、亜円窓 (2~3mm) 2%含む。 |
| 第4層 黑褐色土 (10YR2/2)。黄砂と黒褐色土の混合 (6:4) 層下位に炭化物粒 (1~3mm) 2%集積する。 | 第9層 黒褐色土 (10YR2/3)。基質は11層に近似。黄砂2%含む。 |
| 第5層 黑褐色土 (10YR2/2.5)。燒土粒 (1~3mm)・粘土粒 (1~8mm)・亜円窓 (1~3mm) 2%、炭化物粒 (1~2mm) 1%含み、層左端を中心に塊状 | 第10層 黒褐色土 (10YR3/3)。基質は9層に類似。黄砂7%含む。 |

第42図 15号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物（第43図、第23表、図版26）

本遺構出土の遺物は主にカマドとその周辺から確認したもので、層位的には覆土下層から床面直上にかけて出土したもののが多い。その中で床面直上から出土した三重圓縁單弁葉蓮華文軒丸瓦はとくに注目される。食膳具は須恵器が主体であるが、畿内産土師器も出土している。煮炊具は長胴形の土師器丸底甕である。図示し得た遺物は計12点で、1～4が須恵器、5～10が土師器、11・12が瓦である。以下に器種の内訳を示すと、1が須恵器蓋、2・3が須恵器環G身、4が須恵器瓶、5が畿内産の土師器皿、6～10が土師器甕、11が



第43図 15号住居跡出土遺物（1/4）

三重圓縁单弁十葉蓮華文軒丸瓦、12が平瓦片である。

出土遺物より器種構成をみてみると、食膳具では無台の須恵器坏類（坏G身）が中心で、わずかであるが坏Aの破片や内面に放射状暗文をもつ畿内産の土師器皿も出土している。煮炊具は長胴形の丸底甕で、小形甕も共伴している。床面直上から出土した三重圓縁单弁十葉蓮華文軒丸瓦は二つに割れた状態で発見された。

図示し得た須恵器類より時期を考えると、猿投窯編年では岩崎41号窯式から高藏寺2号窯式期の頃と推測され、概ね8世紀前半を下限年代とすることができよう。

16号住居跡（第44図、図版9）

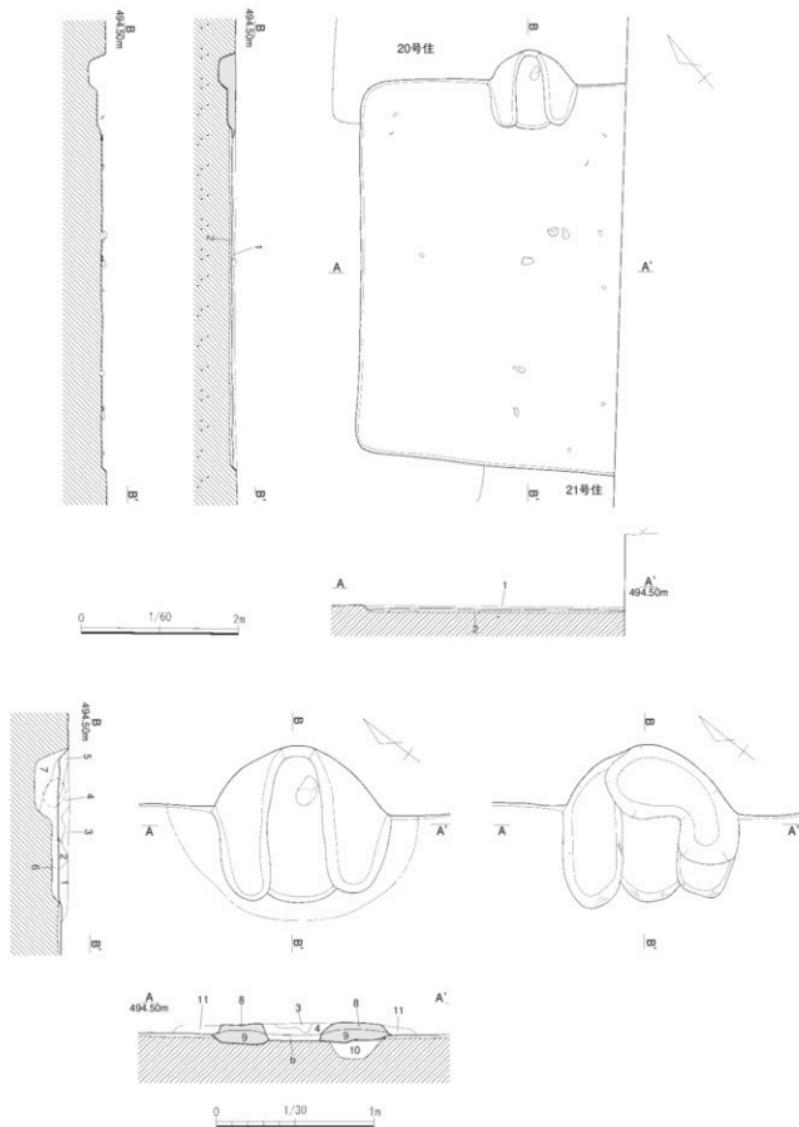
位 置	B区の南西側に位置し、発掘区ではO・P-18・19区に所在する。
重複関係	20・21号住居跡と重複関係にあり、新旧関係では20・21号住→本遺構の順で構築される。
遺存状態	南東側が調査区外となり、また遺構の上部は削平による影響を受けている。
平面形	現存部分より推測するとやや歪むが方形プランと考えられる。
規模	北東および南西二辺間の距離より求めると、北西-南西間で4.75~4.95mである。本遺構は概ね5m内外の堅穴住居跡と考えられる。
主軸方位	N-46°-Eである。
壁	調査した範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、壁高は5cmほどである。
床 面	調査した範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。
柱 穴	調査範囲内では存在していない。本遺構も内部に柱をもたない無柱式の構造と考えられる。
周 溝	調査範囲内では存在していない。
覆 土	黒褐色土を基調としており、分層には至っていない。

カマド（第44図、図版9）

北東壁のやや北西寄りに付設されているものと推測される、最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで約100cm、両袖部最大幅は113cm、焚口幅は約45cmである。現存部分は袖部と火床面のみである。袖部は暗褐色土と黒褐色土を主体に形成されている。火床面は皿状を呈し、奥壁寄りには支脚と考えられる河原石が出土している。また奥壁は比較的なだらかに立ち上がっている。

16号住居跡およびカマド土層説明

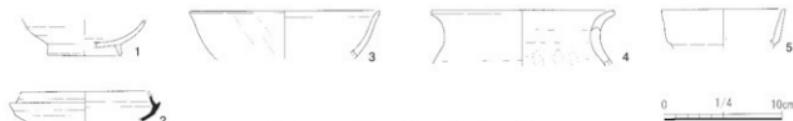
第1層 黒褐色土 (10YR25/2)。燒土粒・炭化物粒 (1mm±) 1%、黄砂 (3~8mm) 2%含む。(緻密度:密、粘性:中)	第5層 黑褐色土 (10YR2-3)。燒土粒・粘土粒・炭化物粒 (1mm±)、黄砂1%含む。
第2層 明褐色土 (10YR3/35)。薪口床。暗褐色土と黄砂で構成。硬く締まる。(緻密度:やや密、粘性:中)	第6層 明褐色土 (10YR2/35)。燒土粒・炭化物粒 (1~2mm) 1%、塊状黄砂 10%含む。
第3層 褐色土 (7.5YR4/4)。被熱粘土層主体。暗褐色土20%、燒土粒 (2~3mm) 1%含む。	第7層 明褐色土 (10YR3/4)。基質は6層に近似。黄砂15%含む。
第4層 黑褐色土 (10YR25/3)。燒土粒 (2~3mm)・炭化物粒 (2mm±) 1%、層右端に黄砂1%含む。	第8層 明褐色土 (10YR3/3)。燒土粒・粘土粒 (3mm±) 2%、炭化物粒 (1~5mm)・黄砂 (5~10mm) 1%含む。
	第9層 黑褐色土 (10YR3/2)。粘土粒 (1~3mm)・炭化物粒 (5~10mm) 2%含み、層下部に黄砂2%含む。(8・9層=階部)
	第10層 明褐色土 (10YR3/3)。炭化物粒 (1~2mm) 1%、斑状の黄砂3%含む。
	第11層 黑褐色土 (10YR3/2)。燒土粒 (3mm±) 1%、黄砂3%含む。



第44図 16号住居跡およびカマド実測図（1/60、1/30）

出土遺物 (第45図、第24表、図版28)

本遺構出土の遺物はごく少量で、層位的には覆土下層から床面直上にかけて出土したものである。また、いずれも小破片であった。これらの中には他遺構との重複により混入したものもあり、本遺構と直接的に関わりのない副次的な遺物も含まれていると考えられる。図示し得た資料は5点で、1が灰釉陶器、2が須恵器、3～5が土師器類である。以下に器種の内訳を示すと、1が灰釉陶器塊、2が須恵器環H身、3が土師器高坏の坏部、4が土師器壺、5が土師器壺である。灰釉陶器塊は東山72号窯式頃、須恵器環H・土師器高坏・壺は概ね古墳時代後期、土師器壺は北陸系の既往の編年観では古墳前期の古府クルビ式に並行する資料と思われる。これらの中から本遺構の時期を推測すると、下限年代を示す資料として1の灰釉陶器塊があげられる。



第45図 16号住居跡出土遺物 (1/4)

17号住居跡 (第46図、図版9)

位置 C区の南東側に位置し、発掘区ではL-46・47区に所在する。

重複関係 調査区内では他遺構との重複関係は認められない。

遺存状態 本遺構の大半は南西側の調査区外に及び、また範囲内は削平による影響を受けている。

平面形 調査範囲は一部分であるが、コーナー部より推測すると方形プランと考えられる。

規模 現状では詳細不明である。

主軸方位 仮に北東壁に基準を求めるか、N-19°-Wである。

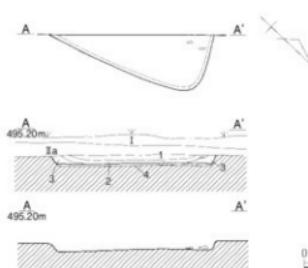
壁 調査した範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、壁高は10cmほどである。

床面 調査した範囲内では塊状の黄砂と暗褐色土で貼り床が形成され、固く締まり硬化していた。

柱穴 調査範囲内では存在していない。

周溝 調査範囲内では存在していない。

覆土 3層に区分され、調査範囲が狭いことから判然としないが、漸次的な変化で堆積している。



17号住居跡土層説明

第1層 黒褐色土 (10YR25-25)。黄砂1%、炭化物粒・黃色粒 (1~2mm)

1%、兼円塊 (1~5mm) 2%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第2層 黒褐色土 (10YR25-3)。1層との層界不明瞭。基質は1層に近似。

黄砂3%増。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第3層 暗褐色土 (10YR3-3)。2層との層界明瞭。底文状黄砂30%、炭化物粒 (1mm ± 1%) 1%、兼円塊 (1~5mm) 5%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

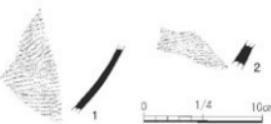
第4層 暗褐色土 (10YR3-4)。貼り床。底文状黄砂と暗褐色土で構成。(緻密度: 輕密、粘性: 弱~中)

第46図 17号住居跡実測図 (1/60)

カマド 厨房施設は出土遺物よりカマドと考えられるが設置場所は不明である。

出土遺物 (第47図、第25表)

遺構内出土の遺物は覆土下層より発見された須恵器や土師器の小破片のみで、図示し得資料は須恵器甕小破片の2点である。時期の詳細は不明であるが、須恵器より推測すると古墳時代後期以降の構築年代が考えられる。



第47図 17号住居跡出土遺物(1/4)

18号住居跡 (第48図、図版10)

位置 C区の南東側に位置し、発掘区ではK-45~47区に所在する。先の17号住は本遺構のすぐ南西側に位置する。

重複関係 調査区内では他遺構との重複関係は認められない。

遺存状態 本遺構の北東側が調査区外となっているが、調査した範囲内は良好である。

平面形 現状より判断すると方形プランと考えられる。

規模 北西および南東二辺間の距離より規模を求めると、北西-南東間で5.10mである。本遺構は概ね5m内外の堅穴住居跡と考えられる。

主軸方位 仮にカマドを北東壁側に想定すると、N-38°-Wである。

壁 調査範囲内ではほぼ垂直に立ち上がる。また、調査区境界の上層断面で壁の立ち上がりを確認すると、北東壁側で最大40cmを測る。

床面 調査範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。

柱穴 調査範囲内では確認されていない。

周溝 調査範囲内では確認されていない。

覆土 9層に区分され、各層の層界は比較的明瞭で、人為的影響が看取される。また、北東側の覆土上層から床面直上にかけて拳大から人頭大ほどの礫が多少出土している。

カマド 設置場所は不明であるが、調査範囲内より推測すると東壁側に付設された可能性が高い。

出土遺物 (第49図、第26表、図版28)

遺物は覆土下層より発見された灰釉陶器や須恵器などの小破片のみで、図示し得た資料は灰釉陶器甕の2点のみである。甕は体部の腰の張りが比較的弱く、緩やかに立ち上がり、口辺に至り端部でわずかに外反する。器壁は相対的に薄手である。底部は回転ヘラケズリ調整されたのち、いわゆる「爪形」高台が付けられる。

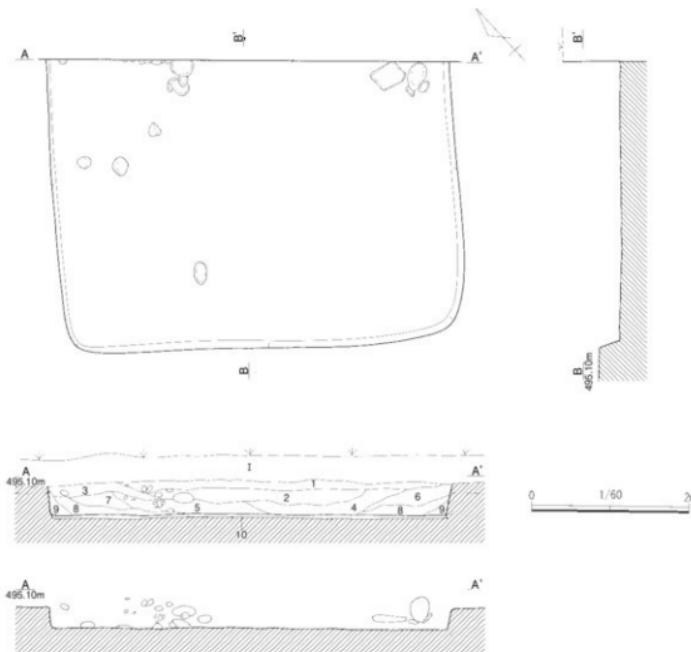
図示し得た灰釉陶器類より時期を考えると、猿投窯編年では黒竪90号窯式期と推測され、年代観としては9世紀後半を下限年代とすることができよう。

19号住居跡 (第50図、図版10)

位置 C区の南東側に位置し、発掘区ではK-L-50区を中心に所在する。

重複関係 他遺構との関係では3号溝状遺構およびC区南側配石群と重複関係にあり、新旧関係では本遺構→3号溝・南側配石群の順で構築される。

遺存状態 北西側は3号溝との重複により壊され、南西側の隅部は調査区外に一部及んでいる。また、



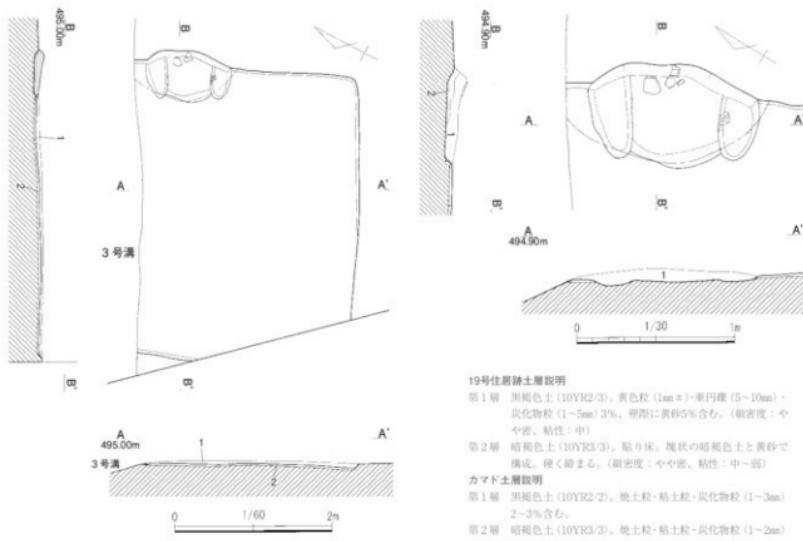
18号住居跡土層説明

- 第1層 黒褐色土 (10YR2/2.5)。斑紋状のマンガン5%、炭化物粒 (1~5mm) 1%、亜円錐 (5~100mm) 3%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第2層 黒褐色土 (10YR2/2)。層界明瞭。燒土粒 (1~2mm)、炭化物粒 (1~5mm)、黄砂1%、亜円錐 (5~50mm) 2%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第3層 黒褐色土 (10YR2.5/2)。基質は1層に近似。亜円錐減少。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第4層 黒褐色土 (10YR2.5/3)。基質は2層に近似。色調や明暗化。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第5層 黒褐色土 (10YR2.5/2.5)。層界明瞭。燒土粒 (1~5mm) 1%、亜円錐 (5~100mm) 5%含み、層下位に粘土が集積。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第6層 黒褐色土 (10YR2/3)。燒土粒 (1mm)、炭化物粒 (1~5mm)、亜円錐 (2~10mm) 1%含む。(緻密度: やや密、粘性: 別)
 第7層 黒褐色土 (10YR2.5/3)。層界明瞭。燒土粒、炭化物粒 (1~5mm) 1%、黄砂2%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第8層 黒褐色土 (10YR2/2)。粘土粒 (1~5mm)、炭化物粒 (1~3mm) 1%、亜円錐 (5~20mm) 2%、層下位を中心に黄砂1%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第9層 黒褐色土 (10YR3/3)。炭化物粒 (1~2mm)、亜円錐 (2~5mm) 2%、黄砂2%含む。(緻密度: やや粗、粘性: 脱~中)
 第10層 黒褐色土 (10YR3/4)。粘土塊、燒土粒と黄砂で構成。硬く結まる。(緻密度: やや密、粘性: 脱~中)

第48図 18号住居跡実測図 (1/60)



第49図 18号住居跡出土遺物 (1/4)



第50図 19号住居跡およびカマド実測図(1/60、1/30)

遺構の上部は削平による影響がみられる。

平面形 現存部分より推測すると方形プランと考えられる。

規模 北東および南西二辺間の距離より堪穴の規模を求める
ると、北東-南西間で3.70mである。

本遺構は4m未満の堪穴住居跡と考えられる。

主軸方位 N-63°-Eである。

壁 調査した範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、壁
高は北東壁側で最大5cmほどである。

床面 調査した範囲内では塊状の黄砂と暗褐色土で貼り床が形成され、固く締まり硬化していた。

柱穴 調査範囲内では存在していない。

周溝 調査範囲内では存在していない。

覆土 現存部分は薄く黒褐色土を基調とするものであるが、分層には至っていない。

カマド(第50図、図版10)

北東壁のほぼ中央に付設されていると推定されるが、削平による影響もあって現存部分は少なく、火床面のみの確認にとどまった。火床面は皿状に浅く掘り窪められており、奥壁寄りで土器裏の破片と礫が確認されている。また、袖部の位置と推測される部分が掘り窪められていた。掘り方より規模を推測すると、焚口部から煙道の立ち上がりまで約65cm、両袖部幅は最大幅は約110cmである。



第51図 19号住居跡出土遺物(1/4)

出土遺物（第51図、第27表、図版28）

本遺構出土の遺物はカマドの奥壁付近より出土した土師器壺の破片資料ある。図示し得た資料は胴部下半から底部付近にかけての破片で、長胴形の丸底壺と考えられる資料である。時期の詳細は不明であるが、図示し得た土師器壺より推測すると、概ね古墳時代後期以降、奈良時代までの範疇と考えられる。

20号住居跡（第52図、図版10）

位 置 B区の南西側に位置し、発掘区ではN・O-18・19区に所在する。

重複関係 他遺構との関係では16号住居跡およびピット群と重複関係にあり、新旧関係では本遺構→16号住・ピット群の順で構築される。

遺存状態 本遺構の南東側は調査区外となり、南西側は16号住居跡により壊されている。

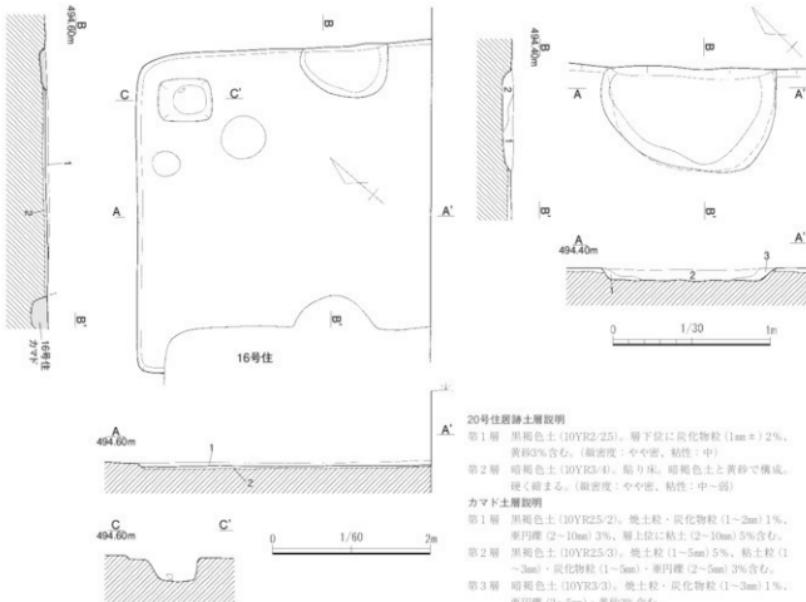
平面形 現存部分より推測すると方形プランである。

規模 北東および南西二辺間の距離より堅穴の規模を求めるに、北東-南西間で4.00mである。
本遺構は概ね4m内外の堅穴住居跡と考えられる。

主軸方位 N-50°-Eである。

壁 調査した範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、壁高は平均5cmほどである。

床 面 調査した範囲内では黄砂と暗褐色土で貼り床が形成され、床面は全体に固く縮まる。



第52図 20号住居跡およびカマド実測図 (1/60, 1/30)

柱 穴 調査範囲内では確認されていない。

周 溝 調査範囲内では確認されていない。

貯 蔵 穴 北隅の方形の掘り込みが貯蔵穴と推測され、規模は長軸68cm、短軸55cm、深さ30cmを測る。

覆 土 現存部分は薄く黒褐色土を基調とするものであるが、分層には至っていない。

カ マ ド (第52図、図版10)

北東壁のほぼ中央に付設されていると推測されるが、削平による影響もあって現存部分は掘り方のみである。掘り方は半円形を呈し、壁外へは掘り込まれていない。規模は焚口部から奥壁まで約65cm、最大幅は110cm、深さは床面より6~7cmである。

出土遺物 (第53図、第28表、図版28)

本遺構出土の遺物は貯蔵穴から出土した須恵器および土師器などの小破片のみであるが、図示し得た遺物は須恵器の坏口蓋の天井部片が唯一の資料である。全容は不明であるが、天井部の様相から小形化の進んだ坏口蓋と考えられ、7世紀代の範疇と推測される。



第53図 20号住居跡出土遺物 (1/4)

21号住居跡 (第54図、図版10)

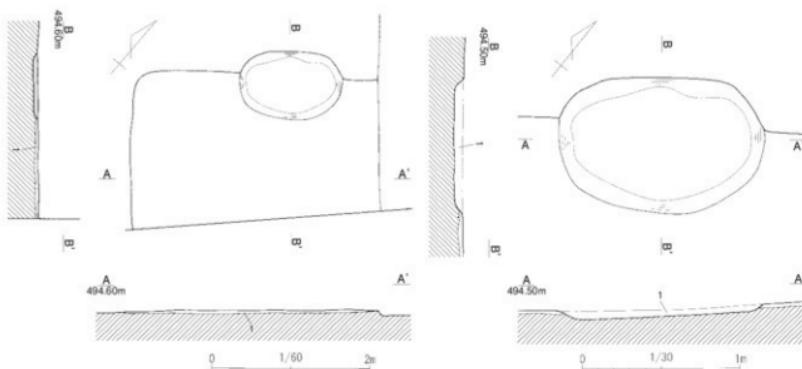
位 置 B区の南東側に位置し、発掘区ではP・Q-18・19区に所在する。

重複関係 他遺構との関係では16号住居跡と重複しており、本遺構→16号住の順で構築される。

遺存状態 本遺構の南東側は調査区外となり、北東側は16号住居跡により壊されている。また、壁面は削平により失われている。

平 面 形 床面および掘り方の残存状況より方形プランと考えられる。

規 模 現状では不明であるが、北西壁の中央にカマドが付設されていたと仮定すると、概ね4m内外の堅穴住居であると考えられる。



21号住居跡土層説明

第1層 喀褐色土 (10YR3/35)。粘り底。黄砂と喀褐色土で構成。硬く締まる。(密度: やや密、粘性: 中一弱)
る。(密度: やや密、粘性: 中一弱)

カマド土層説明

第1層 喀褐色土 (10YR3/35)。炭化物粒 (1~3mm) 3%、燒土粒 (1~5mm)、
粘土粒 (1mm ±) 1%、黄砂5%含む。

第54図 21号住居跡およびカマド実測図 (1/60、1/30)

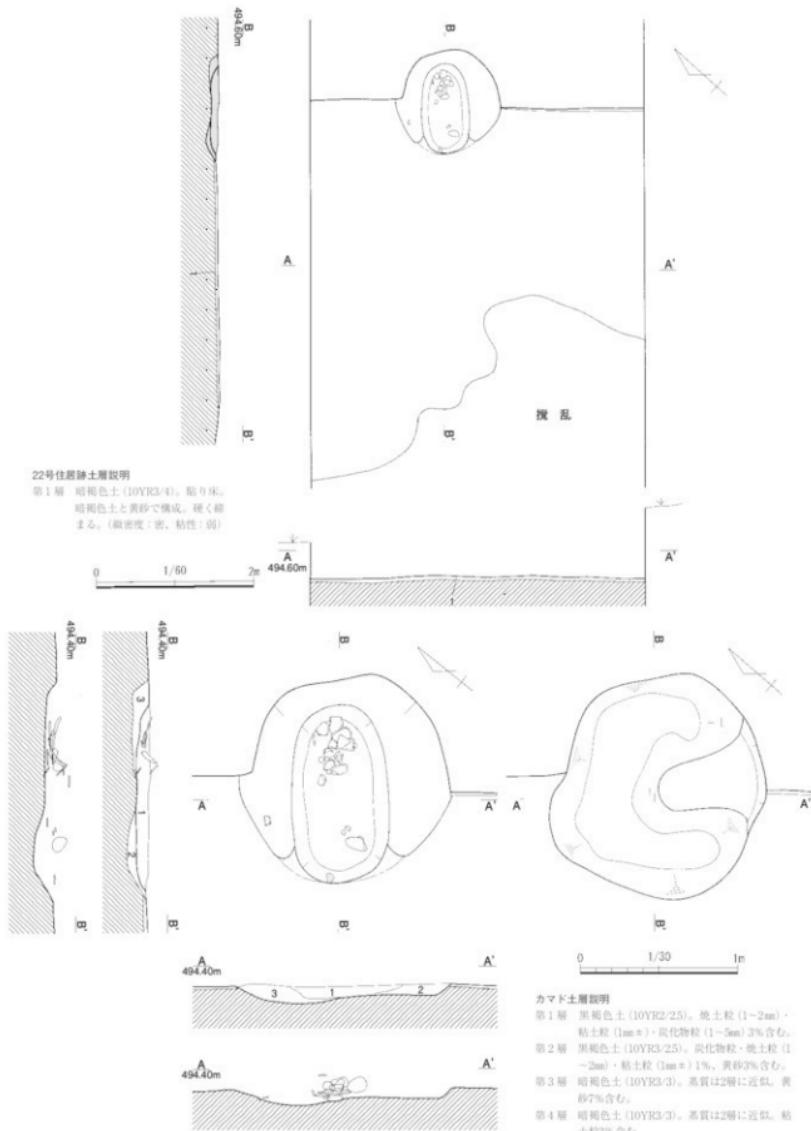
- 主軸方位** カマドの掘り方に基準を求めるに、N-40°-Wである。
- 壁** 削平により失われている。
- 床 面** 調査した範囲内では黄砂と暗褐色土で貼り床が形成されている。
- 柱 穴** 調査範囲内では確認されていない。
- 周 溝** 調査範囲内では確認されていない。
- 覆 土** 削平により大半が失われている。
- カマド** (第54図、図版10)
北西壁で発見されたがカマドの形状はすでに失われており、調査できた部分は掘り方のみである。掘り方は横長の楕円形状で、焚口側から奥壁の立ち上がりまでが87cm、最大幅は130cm、深さは床面から5cmほどである。
- 出土遺物** 遺構の確認時に土師器や須恵器などの小片がわずかに出土したのみで、図示し得た資料はない。遺構の詳細な時期は不明であるが、16号住居跡との重複関係をもとに推測すると、大雜把であるが東山72号窯式期以前、カマドが付設された古墳時代後期以降と考えられる。

22号住居跡 (第55図、図版10)

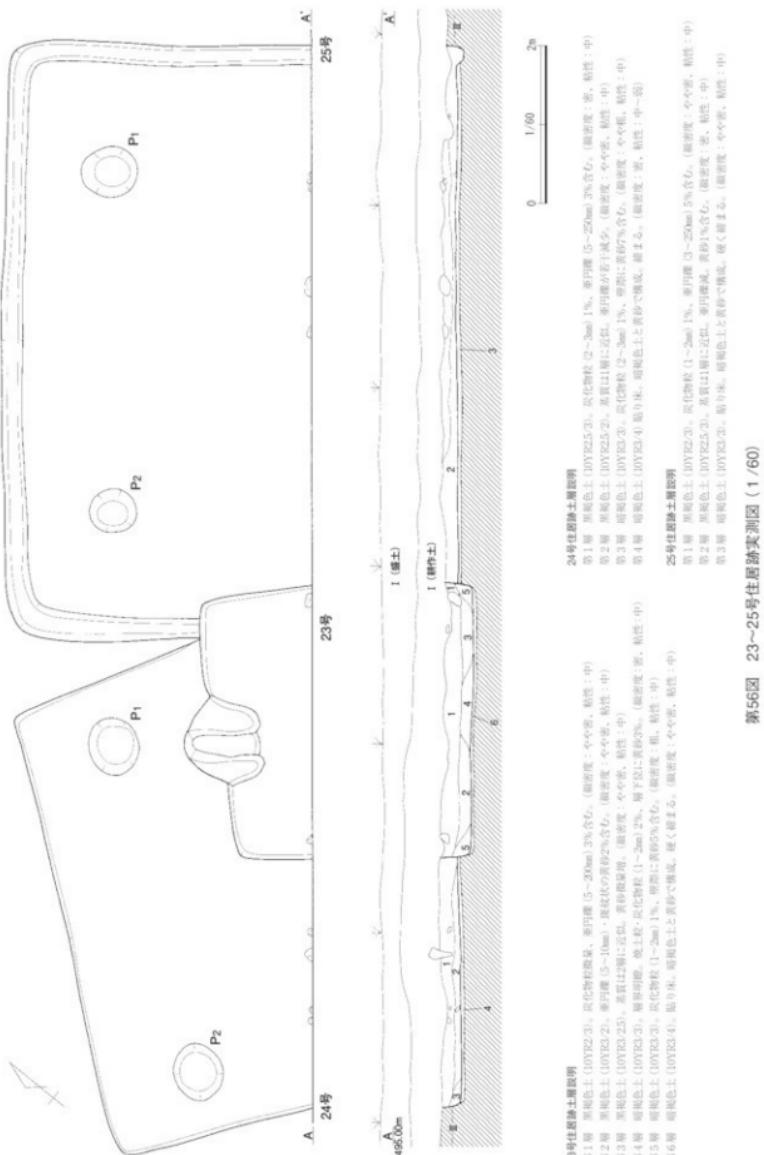
- 位 置** B区の南東側に位置し、発掘区ではJ・K-18・19区に所在する。
- 重複関係** 調査区内では他遺構との重複関係は認められない。
- 遺存状態** 遺構の北西と南東側は調査区外に及び、耕作による影響は床面直上付近にまで至っていた。また、南西側の壁と床面はすでに壊されていた。
- 平 面 形** 現存部分より推測すると方形プランである。
- 規 模** 詳細は不明であるが、現存長を示すと、北東-南西で4.80m、北西-南東で4.25mを測る。
- 主軸方位** N-43°-Eである。
- 壁** カマド側の北東壁で5cmほどが現存していた。
- 床 面** 確認した範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。
- 柱 穴** 調査範囲内では確認されていない。
- 周 溝** 調査範囲内では確認されていない。
- 覆 土** 削平により大半が失われている。
- カマド** (第55図、図版10)
北東側の壁に付設され壁に深く掘り込まれているが、後世の削平による影響で袖部がわずかに残存するのみであった。最終的に検出されたカマドの範囲は、焚口部から奥壁の立ち上がりまで113cm、両袖部最大幅は135cm、焚口幅は60cmほどであった。袖部は粘土を含む暗褐色土で形成され、火床面は楕円形状を呈し、皿状に浅く掘り込まれている。奥壁部分には壁に暗褐色土が塗り込まれていた。

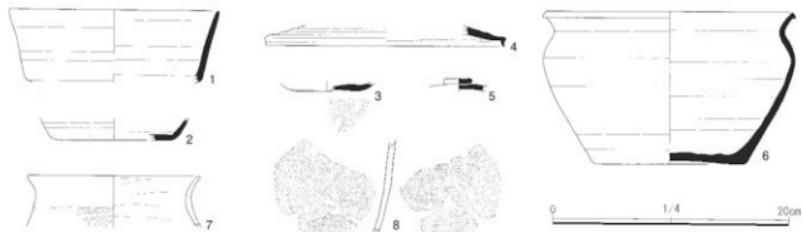
出土遺物 (第56図、第29表、図版28)

本遺構出土の遺物は主にカマド内とその周辺から出土したものである。その中でカマド内出土の須恵器鉢は器形全体がわかる資料であった。図示し得た遺物は計8点で、1-6が須恵器、7・8が土師器である。以下に器種の内訳を示すと、1が須恵器壺A/B、2が須恵器壺A、3が須恵器壺A、4・5が須恵器蓋、6が同鉢、7・8が土師器壺である。



第55図 22号住居跡およびカマド実測図 (1/60、1/30)





第57図 22号住居跡出土遺物（1/4）

食器の器種構成では須恵器壺A/Bに塊Aが共伴している。

図示し得た須恵器類より時期を考えると、猿投窯編年では岩崎25号～鳴海32号窯式期の頃と推測され、概ね8世紀後半を下限年代とすることができよう。

23号住居跡（第58図、図版10）

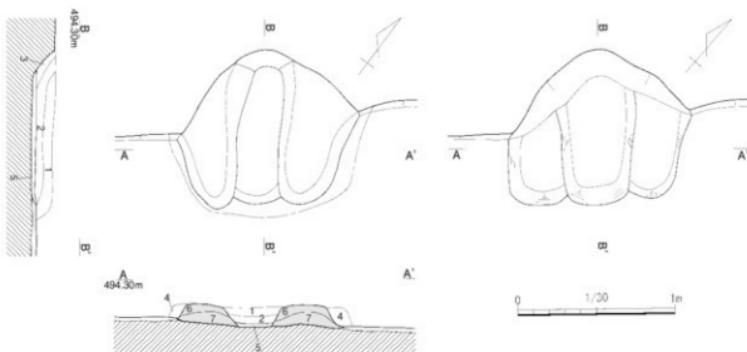
位 置 B区の北東側に位置し、発掘区ではH-18・19区に所在する。

重複関係 他遺構との関係では24・25号住と重複しており、24・25号住→本遺構の順で構築される。但し、24・25号住との関係は不明である。

遺存状態 本遺構の南東側は調査区外にあるが、調査した範囲内は比較的良好である。

平面形 現存部分より推測すると方形プランと考えられる。

規模 北東および南西二辺間の距離より堪穴の規模を求めるとき、北東～南西間で3.45mである。



23号住居跡カマド土層説明

第1層 黒褐色土(10YR2/3)。燒土粒(1mm±)・炭化物粒(1mm±)1%、粘土粒(1~5mm)5%含む。

第2層 黑褐色土(10YR3/2)。燒土粒(2~3mm)2%、炭化物粒(1~2mm)1%、
黄砂3%含む。

第3層 黑褐色土(10YR2.5/2)。基質は2層に近似。粘土含む。

第4層 喀褐色土(10YR3/3)。燒土粒・炭化物粒(1~2mm)1%、黄砂5%含む。

第5層 黑褐色土(10YR2/3)。燒土(1~5mm)・黄砂2%、粘土粒・炭化物粒(1~2mm)1%含む。

第6層 黑褐色土(10YR3/2.5)。基質は5層に近似。黄砂増加。

第7層 喀褐色土(10YR3/3)。燒土粒・粘土粒(1~3mm)・炭化物粒(1mm±)
1%含む。(6・7層・袖部)

第58図 23号住居跡カマド実測図(1/30)

本遺構は概ね35m内外の堅穴住居跡と考えられる。

主軸方位 N - 45° - Wである。

壁 調査範囲内ではほぼ垂直に立ち上がる。また、調査区境界の土層断面で壁の立ち上がりを確認すると最大40cmを測る。

床 面 調査範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。

柱 穴 調査範囲内では確認されていない。

周 溝 調査範囲内では確認されていない。

覆 土 5層に区分され、各層の層界は比較的明瞭で、人為的影響が看取される。また、覆土上層を中心に拳大からほどの礫が多少出土している。

カ マ ド (第58図、図版10)

北西壁のほぼ中央に付設され、最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで96cm、両袖部最大幅は115cm、焚口幅は30cmほどである。天井部は崩落していたが、袖部は黒褐色土・黄砂・粘土を主体とする用材で形成される。火床面は梢円形状を呈し、皿状に浅く掘り込まれている。また、最奥部は緩やかに立ち上がっている。

出土遺物 本遺構出土の遺物は、覆土中より須恵器や土師器甕などの細片がわずかに出土したのみで、図示し得た資料はない。時期の詳細は不明であるが、他遺構との重複関係より推測すると、8世紀前半以降の所産と考えられる。

24号住居跡 (第57図、図版11)

位 置 B区の北東側に位置し、発掘区ではH・I - 18・19区に所在する。

重複関係 他遺構との関係では23号住および25号住と重複関係にあるが、本遺構→23号住との新旧は判明したが25号住との関係は不明である。

遺存状態 本遺構の東側は23号住との重複により壊され、また南東側は調査区外に及ぶが、調査した範囲内は比較的良好である。

平 面 形 現存部分より推測すると方形プランと考えられる。

規 模 北東・南西二辺間の距離より堅穴の規模を求めるに、北東-南西間で5.80~6.05mである。本遺構は概ね6m内外の堅穴住居跡と考えられる。

主軸方位 厨房施設が確認されていないため主軸方位は不明である。仮に北西壁に基準を求めるに、N - 35° - Eである。

壁 調査範囲内ではほぼ垂直に立ち上がる。また、調査区境界の土層断面で壁の立ち上がりを確認すると最大25cmを測る。

床 面 調査範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。

柱 穴 北西辺の二隅よりそれぞれ1穴ずつ確認された。柱穴は四隅に配された構造と考えられ、南東辺側の2穴は調査区外に及んでいると思われる。柱穴の掘り方は、平面略円形を呈し、規模は長径75cm、短径60cm、深さはP₁が18cm、P₂が28cmである。

周 溝 調査範囲内では確認されていない。

覆 土 3層に区分される。各層の層界はやや不明瞭で層相の変化に乏しいが、部分的に礫の集積が覆土上層を中心に観察された。

厨房施設 厨房施設がカマドなのか煙跡なのかは不明である。

出土遺物 本遺構出土の遺物は、覆土中より土師器片がわずかに出土したのみである。また、図示し得た遺物もないため、遺構の時期の詳細も不明である。遺構間の重複関係より推測すると、7世紀代もしくはそれ以前と考えられる。

25号住居跡（第57図、図版11）

位 置 B区の北東側に位置し、発掘区ではF～H-18・19区に所在する。

重複関係 他遺構との関係では23号住および24号住と重複関係にあるが、本遺構→23号住との新旧は判明しているが、24号住との関係は不明である。

遺存状態 本遺構の東側は23号住との重複により壊され、また南東側は調査区外に及ぶが、調査した範囲内は比較的良好である。

平 面 形 現存部分より推測すると方形プランである。

規 模 北東・南西二辺間の距離より堅穴の規模を求めるに、北東～南西間で7.55～7.60mである。本遺構は概ね7.6m内外の大形の堅穴住居跡と考えられる。

主軸方位 厨房施設が確認されていないため主軸方位は不明である。仮に北西壁に基準を求めるに、N-43°～Eである。

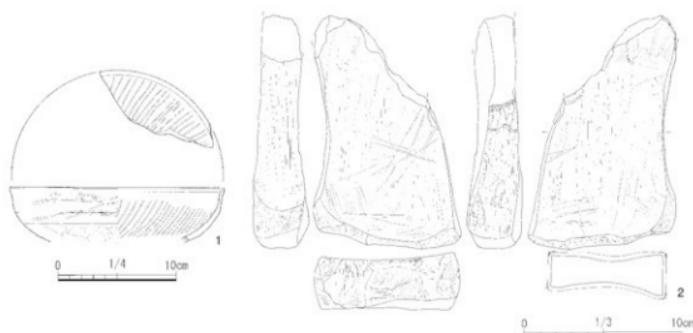
壁 調査範囲内ではほぼ垂直に立ち上がる。また、調査区境界の土層断面で壁の立ち上がり確認すると最大20cmを測る。

床 面 調査範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に固く締まる。

柱 穴 北西辺の二隅よりそれぞれ1穴ずつ確認された。柱穴は堅穴住居の四隅に配された構造と考えられ、南東辺側の2穴は調査区外に及んでいると推測される。柱穴の掘り方は、平面略円形を呈し、規模はP1が径70cm、深さ70cm、P2が径55cm、深さは45cmである。

周 溝 調査した範囲内では壁に沿って全周する。幅は20～30cm、深さは5～10cmを測り、断面は逆台形状を呈する。

覆 土 大きく上下2層に区分され、土色は黒褐色を基調とし、層相の変化に乏しい。覆土上層を中心には大などの礫が出土している。



第59図 25号住居跡出土遺物（1/4、1/3）

厨房施設 廉房施設はカマドと考えられるが現状では不明である。

出土遺物 (第59図、第30表、図版28)

本遺構出土の遺物は床面直上を中心に出土した須恵器や土師器類の小破片で、図示し得た遺物は床面直上から出土した土師器壺Cで、畿内からの搬入品と考えられる資料である。口径17.8cm、底部は丸底風で、口縁部は湾曲ぎみに立ち上がり、内面上端を面取りする。内面に放射状暗文をつけ、口縁部外面をヘラミガキし、底部外面を指頭調整する。

本遺構の時期について図示し得た土師器壺の特徴より推測すると、7世紀後半から末頃を下限年代とすることができよう。

26号住居跡 (第60図、図版11)

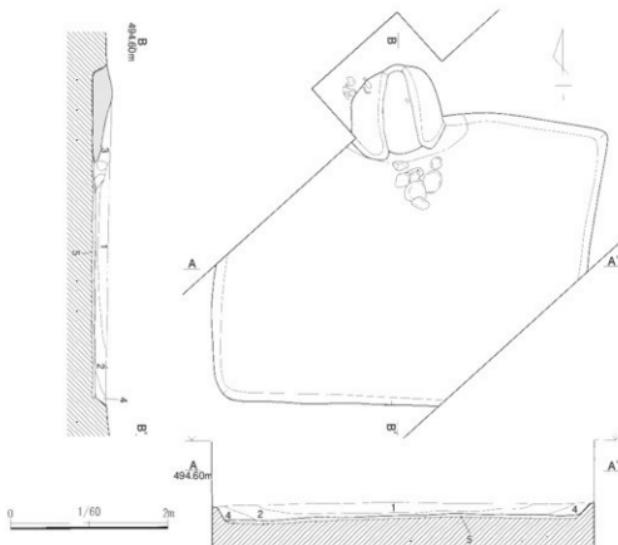
位置 B区の北東端に位置し、発掘区ではC・D-18区を中心とする。

重複関係 調査区内では他遺構との重複関係は認められない。

遺存状態 本遺構の北西隅と南東隅が調査区外となるが、調査した範囲内は比較的良好である。

平面形 方形プランと考えられる。

規模 長軸(東西)4.75m、短軸(南北)3.70mを測り、床面積は約15m²と推測される。



26号住居跡土層図

第1層 黒褐色土(10YR3/2)。他土粒・炭化物粒(1~2mm±)1%、黄色粒(1~3mm)2%、牽円塵(3~10mm)3%含む。(緻密度:やや密、粘性:中)

第2層 黒褐色土(10YR2.5/2)。1層との境界や不明瞭。基質は1層に近似。

黄砂が若干含まれる。(緻密度:やや密、粘性:中)

第3層 短褐色土(10YR3/3)。基質は2層に近似。粘土粒(2mm±)2%含む。

(緻密度:やや密、粘性:中)

第4層 短褐色土(10YR3/4)。短褐色土と黄砂で構成。(緻密度:やや粗、粘性:弱)

第5層 短褐色土(10YR3/3)。貼り床。短褐色土と黄砂で構成。硬く緻まる。

(緻密度:密、粘性:中)

第60図 26号住居跡実測図(1/60)

主軸方位 N - 2° - Wである。

壁 調査した範囲内ではやや開きぎみに立ち上がり、北壁側で最大20cmを測る。

床 面 暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、全体に固く締まる。

柱 穴 調査した範囲内では確認されていない。

周溝 調査した範囲内では確認されていない。

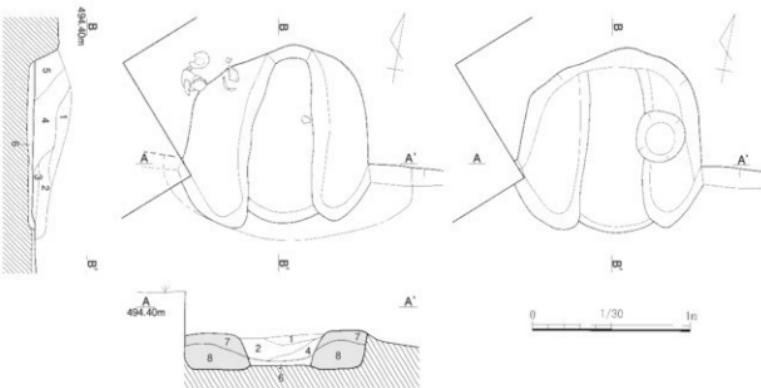
覆 土 4層に区分される。各層の層界はやや不明瞭で、層相の変化に乏しく、レンズ状の堆積を示すことから自然埋没の可能性が考えられるが、カマドの焚口付近には拳大から人頭大の礫がまとまっていた。

カマド(第61図、図版11)

北壁のほぼ中央に付設され、北壁側に深く掘り込まれている。最終的に検出された範囲は、焚口部から煙道の立ち上がりまで112cm、両袖部最大幅は120cm、焚口幅は45cmほどである。袖部は黄砂・粘土・黒褐色土などを主とする用材で形成される。火床面は梢円形状を呈し、皿状に浅く掘り込まれ、奥壁は急傾斜で立ち上がっている。

出土遺物(第62図、第31表、図版28)

本遺構出土の遺物は主にカマドとその周辺から出土したもので、層位的には覆土下層から床面直上にかけてのものが多い。食膳具は須恵器が主体であるが畿内産土師器も伴出す。煮炊具はハケメ調整を主体とする土師器丸底壺である。図示し得た遺物は9点で、1~7が須恵器、8・9が土師器である。以下に器種の内訳を示すと、1が須恵器環G身、2が須恵器高环、3~7が須恵器蓋、8が畿内産の土師器環もしくは皿、9が土師器壺である。



26号住居跡カマド土層説明

第1層 黒褐色土(75YR4/6)。粘土粒(1~4mm)3%、長炭化物粒(1mm±)2%含む。

第2層 黒褐色土(10YR3/2)。他土粒・他小塊(1~5mm)7%、粘土粒(1mm±)2%、炭化物粒(1~10mm)3%含む。

第3層 黒褐色土(10YR2/3)。他土粒・炭化物粒(1mm±)1%、重円錐(5~10mm)2%含む。

第4層 黒褐色土(75YR4/4)。黑質は1層に近似。重円錐(5~10mm)2%含む。

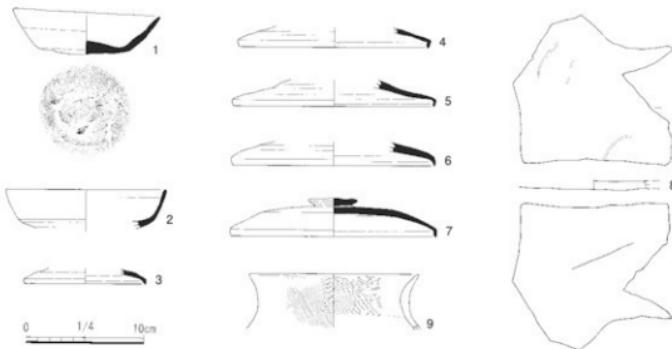
第5層 黑褐色土(10YR2/3)。他土粒(1~5mm)2%、炭化物粒(1~2mm)1%含む。

第6層 黒褐色土(10YR3/3)。暗褐色土と黄砂で構成。層上位に他土と炭化物3%集積する。

第7層 黑褐色土(10YR3/25)。黑褐色土・黄砂・粘土で構成。(5:3:2)。

第8層 黑褐色土(10YR4/3)。黄砂と粘土で構成(6:4)。(7~8層=袖部)

第61図 26号住居跡カマド実測図(1/30)



第62図 26号住居跡出土遺物 (1/4)

食膳具は無台の須恵器坏類(坏G身)が中心で、坏Aは小破片で確認できる程度であるが、須恵器蓋は身受けのかえりをもつ坏Gの蓋は姿を消している。

これらの資料より時期を考えると、猿投窯編年では岩崎41号窯式から高藏寺2号窯式期の頃と推測され、8世紀前半を下限年代とすることができよう。

27号住居跡 (第63図、図版11)

位置 B区の北東側に位置し、発掘区ではE・F-18区を中心とする。

重複関係 調査区内では他遺構との重複関係は認められない。

遺存状態 本遺構の北西側と南東側の一部が調査区外となるが、調査した範囲内は比較的良好である。

平面形 方形プランと考えられる。

規模 北東・南西二辺間の距離より竪穴の規模を求めるに、北東・南西間で5.00~5.20mである。概ね5mをやや超える竪穴住居跡と考えられる。

主軸方位 厨房施設が確認されていないため主軸方位は不明。現状より北西側にカマドを想定すると、N-40°-Wである。

壁 調査範囲内ではほぼ垂直に立ち上がり、北東壁側で最大25cmを測る。

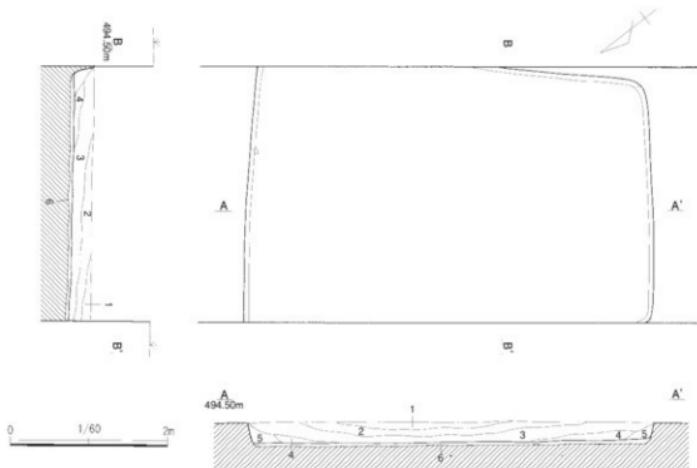
床面 調査範囲内では暗褐色土と黄砂で貼り床が形成され、床面は全体に堅く締まる。

柱穴 調査した範囲内では確認されていない。

周溝 調査した範囲内では確認されていない。

覆土 5層に区分される。各層の層界は不明瞭で、層相の変化に乏しく、またレンズ状の堆積を示すことから自然埋没の可能性が考えられる。

カマド 現状より推測すると、北西壁側に付設されていると考えられる。



27号住居跡土層説明

第1層 黒褐色土 (10YR3/2)。炭化物粒 (1mm ±) 1%、亜円礫 (1~8mm) 3% 含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第2層 黒褐色土 (10YR3/2.5)。1層との層界不明瞭。基質は1層に近似する。
 亜円礫若干減少する。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第3層 暗褐色土 (10YR3/3)。2層との層界やや不明瞭。基質は2層に近似。
 粒下段を中心に黄砂2%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

第4層 暗褐色土 (10YR3/3.5)。3層との層界やや不明瞭。基質は3層に近似。
 黄砂や々增加する。(緻密度: やや密、粘性: 中)
 第5層 にぶい黃褐色土 (10YR4/3)。塊状の黄砂40%、炭化物粒 (1mm ±) 1% 含む。(緻密度: 稲、粘性: 弱~中)
 第6層 暗褐色土 (10YR3/4)。貼り床。暗褐色土と黄砂で構成。硬く締まる。
 (緻密度: やや密、粘性: 中~弱)

第63図 27号住居跡実測図 (1 / 60)

出土遺物 (第64図、第32表、図版28)

本遺構出土の遺物は、覆土中より出土した須恵器および土師器類の小破片のみで、図示し得た資料は覆土上層から出土した須恵器蓋で、これが唯一の資料である。

詳細は不明であるが、須恵器蓋の特徴より推測すると、8世紀の中半もしくは後半頃と考えられる。



第64図 27号住居跡出土遺物 (1 / 4)

第3節 挖立柱建物跡

上町遺跡向町地点で発見した掘立柱建物跡はD区の1棟のみである。D区は調査区幅が約2.5mと狭かったことから建物の全容は捉えきれていない。遺構の時期については不明であるが、柱掘り方の形状や埋土の観察から概ね奈良期から平安期の所産と考えられる。

1号掘立柱建物跡（第65図、図版11）

位置 D区の南東側に位置し、発掘区ではH-72・73区に所在する。

重複関係 調査区内では他遺構との重複関係は認められない。

遺存状態 遺構の範囲内は比較的良好である。

平面形 建物の平面形式は不明であるが、調査区内で確認したP₂-P₃間を梁行方向と仮定すると桁行方向は不明であるが、梁行1間の側柱建物を想定することができる。

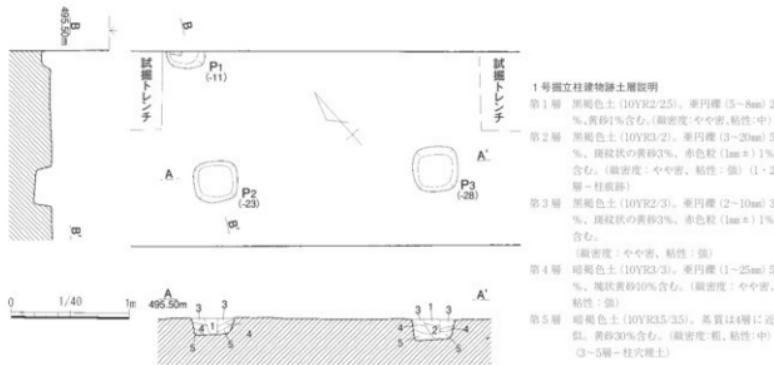
規模 梁行1間の距離は、柱痕跡の心々間（P₂-P₃間）で2.85m（9.5尺）を測る。

主軸方位 N-35°-40°-Eと考えられる。

柱間寸法 現存部分の寸法を示すと、桁行の北西側柱列（P₁-P₂間）では1.80m（6尺）、梁行の南西妻列（P₂-P₃間）は2.85m（9.5尺）である。

掘り方 平面形は方形を呈し、規模は一辺50~58cm、深さ15~25cmを測り、P₂・P₃からは柱痕跡が確認され、埋土は黒褐色土と暗褐色土で丁寧に埋め立てている。

出土遺物 柱痕跡および埋土内より遺物は出土していない。



第65図 1号掘立柱建物跡 (1/60)

第4節 壑穴状遺構

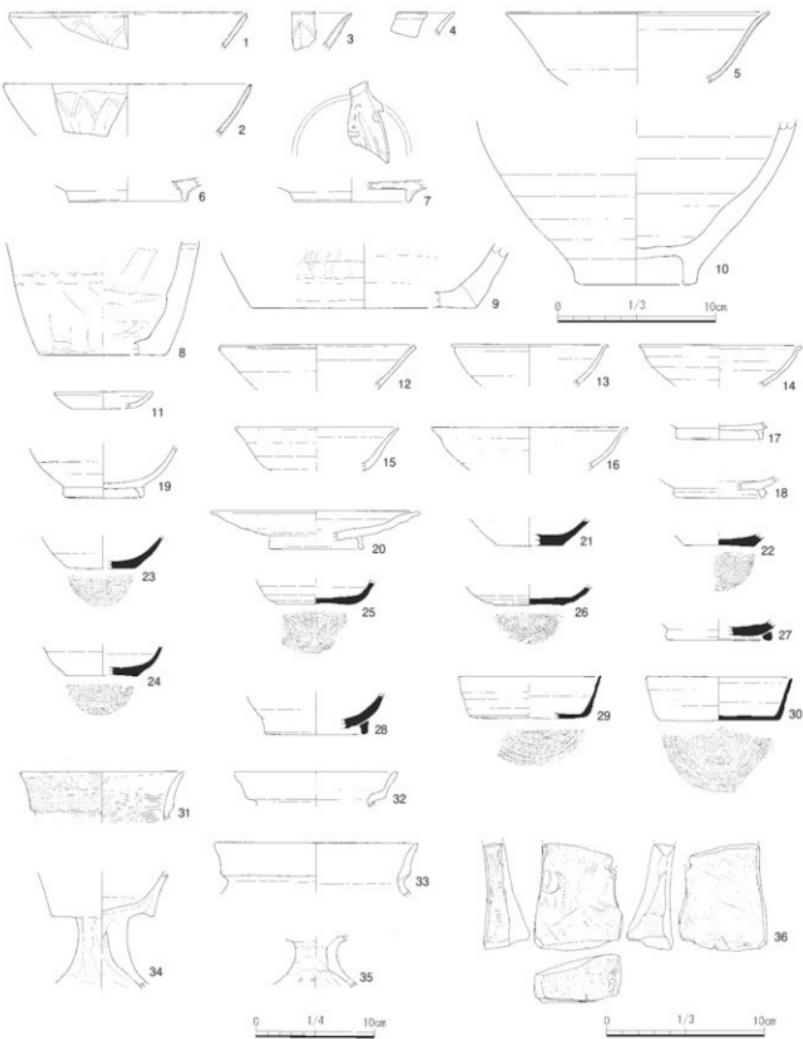
今回、壃穴状遺構として報告するD区発見の遺構は不定形状の掘り込みをもつ遺構で、道路幅では収まりきれず調査区外に広がっており、全容までは捉えきれていない。調査区内では北西-南東方向（北東壁面）で、最長12.6mに達する大規模な遺構である。

1号竪穴状遺構(第66図、図版11)

- 位置** A区中央のやや北西寄りに位置し、発掘区ではK・L-6~8区を中心に所在する。
- 重複関係** 他遺構との関係では、11号住居跡、1号配石と重複し、11号住→本遺構→1号配石の順で構築されている。
- 遺存状態** 遺構の上面は擾乱された箇所が多かったが、遺構の下半部は比較的良好であった。
- 平面形** 調査区内は不整形形状で詳細は不明である。
- 規模** 北西~南東方向(北東壁面)で、最長126mを測る。
- 主軸方位** 全体形状が不明なため計測不能。
- 壁** 調査範囲内では全体になだらかに立ち上がり、北西側では15~20cm、南東側では20~25cmを測る。深さは北東壁面の最深部で60cm、北西側の一段高い平坦なテラス面で20~25cm、
- 1号竪穴状遺構土層説明**
- 第1層 喜潤色土(10YR35/3)。斑紋状のマンガン7%、シルト30%、炭化物(1mm±)1%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第2層 黒褐色土(10YR3/2.5)。斑紋状のマンガン5%、シルト30%、黃色粒、赤色粒(1mm±)2%含む。(総密度:やや密、粘性:中~強)
 - 第3層 黑褐色土(10YR3/2)。黒質は層に近似。層石層に黄色粒(1mm±)7%集積。(総密度:やや密、粘性:中~強)
 - 第4層 黑褐色土(10YR3/3)。斑紋状マンガン3%、シルト15%、黃色粒(1mm±)3%、赤色粒(1mm±)2%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第5層 黑褐色土(10YR25/2)。層界明瞭。黃砂40%、シルト15%、炭化物粒(1mm±)2%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第6層 黑褐色土(10YR3/1.5)。黒質は層に近似。シルト25%に減少する。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第7層 黑褐色土(10YR2/2.5)。上層との層界明瞭。層中央に黃砂の薄層が形成。炭化物粒(1mm±)1%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第8層 黑褐色土(10YR3/2)。層界明瞭。炭化物粒(1~2mm)1%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第9層 黑褐色土(10YR2/2)。層界明瞭。暗褐色土とシルトで構成。炭化物微量含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第10層 黑褐色土(10YR2/3)。シルト7%、炭化物粒(1~5mm)3%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第11層 喜潤色土(10YR3/3)。黃砂30%、炭化物粒(1~2mm)1%含む。(総密度:やや密、粘性:中~弱)
 - 第12層 黑褐色土(10YR25/2)。黃砂20%、炭化物粒(1~3mm)1%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第13層 喜潤色土(10YR3/3)。黃砂15%、炭化物粒(1~2mm)2%含む。(総密度:やや密、粘性:中~弱)
 - 第14層 黑褐色土(10YR2/2)。黒質は13層に近似し、黃砂25%含む。(総密度:やや密、粘性:中~弱)
 - 第15層 黑褐色土(10YR2/3)。シルト7%、炭化物粒(2~5mm)3%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第16層 黑褐色土(10YR3/2.5)。黃砂2%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第17層 喜潤色土(10YR35/3)。黃砂土体(70%)。(総密度:粗、粘性:弱)
 - 第18層 喜潤色土(10YR3/3)。黃砂土体(60%)。炭化物粒(1~3mm)2%含む。(総密度:粗、粘性:弱)
 - 第19層 黑褐色土(10YR2/2)。黒質は16層に近似。黃砂3%含む。(総密度:密、粘性:中)
 - 第20層 黑褐色土(10YR3/2.5)。黒質は19層に近似。(総密度:やや密、粘性:中~強)
 - 第21層 褐色土(10YR35/4)。黃砂土体(80%)。(総密度:粗、粘性:弱)
 - 第22層 喜潤色土(10YR3/4)。褐褐色土と黃砂の混合(6:4)。(総密度:やや粗、粘性:弱~中)
 - 第23層 喜潤色土(10YR3/3)。褐褐色土と黃砂の混合(7:3)。(総密度:やや粗、粘性:中~弱)
 - 第24層 喜潤色土(10YR3/3)。シルト20%、炭化物(1mm±)1%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第25層 黑褐色土(10YR3/2)。24層との層界明瞭。基質は26に近似。シルト25%含む。(総密度:密、粘性:中~強)
 - 第26層 黑褐色土(10YR3/2)。基質は24層に近似し、シルト7%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第27層 黑褐色土(10YR2/2)。斑紋状マンガン1%、シルト20%。(総密度:やや密、粘性:中~強)
 - 第28層 黑褐色土(10YR3/2)。シルト40%、炭化物粒(1mm±)2%。(総密度:密、粘性:強)
 - 第29層 黑褐色土(10YR3/2)。シルト15%含む。(総密度:やや密、粘性:中~強)
 - 第30層 喜潤色土(10YR3/3)。褐褐色土と黃砂の混合(6:4)。(総密度:やや粗、粘性:中~弱)
 - 第31層 喜潤色土(10YR3/3)。シルト10%、炭化物粒(1mm±)2%。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第32層 喜潤色土(10YR3/2)。基質は31層に近似し、シルト20%含む。(総密度:やや密、粘性:中~強)
 - 第33層 黑褐色土(10YR3/2)。黃砂20%、炭化物粒(1~2mm)1%含む。(総密度:やや粗、粘性:中~弱)
 - 第34層 黑褐色土(10YR25/2)。斑紋状マンガン、炭化物粒(1~3mm)1%、シルト15%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第35層 黑褐色土(10YR25/2)。黃砂30%、炭化物粒(2~5mm)2%。(総密度:やや密、粘性:中~弱)
 - 第36層 黑褐色土(10YR2/2)。黃砂2%、シルト20%、炭化物粒(1~2mm)1%含む。(総密度:やや密、粘性:中~強)
 - 第37層 黑褐色土(10YR2/2)。11層との層界明瞭。黃砂3%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第38層 黑褐色土(10YR3/2)。黃砂30%、赤色粒(1mm±)5%集積。(総密度:やや粗、粘性:弱~中)
 - 第39層 黑褐色土(10YR3/2.5)。黃砂と黒褐色土の混合(7:3)。(総密度:粗、粘性:弱)
 - 第40層 黑褐色土(10YR2/2)。基質は39層に近似し、黃砂60%含む。(総密度:粗、粘性:弱)
 - 第41層 黑褐色土(10YR25/2)。黃砂5%、炭化物粒(1mm±)1%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第42層 黑褐色土(10YR3/2)。基質は41層に近似。黃砂7%含む。(総密度:やや密、粘性:中)
 - 第43層 黑褐色土(10YR3/2.5)。基質は42層に近似する。(総密度:やや密、粘性:中~強)
 - 第44層 黑褐色土(10YR2/2)。斑紋状の黃砂7%含む。(総密度:密、粘性:中)
 - 第45層 黑褐色土(10YR3/2)。基質は42層に近似する。黃砂20%、炭化物粒(1mm±)1%含む。(総密度:やや粗、粘性:中~弱)
 - 第46層 黑褐色土(10YR3/2.5)。黃砂と黒褐色土の混合(6:4)。(総密度:粗、粘性:弱)



第66図 1号竪穴状遺構実測図跡 (1/60)



第67図 1号竪穴状遺構出土遺物(1/3、1/4)

南東および南西側の一段低いテラス面では25~30cmを測る。

- 床 面** 概ね平坦な部分と、底面には土坑やピット状の掘り込みが大小30ほど確認された。後者は、不整形、楕円形、略円形、方形などの様々な形状のもので、掘り込みの深さは浅いもので10cm、深いものでは80cmを測り、覆土中に礫が混在するものもあった。また、ピット状の中には堅穴住居跡の柱穴と同じようなものもあった。
- 覆 土** 北西~南東、南西~北東の2本の土層断面図では計46層に区分される。中央部分や南側の平坦部分ではレンズ状の堆積を示すが、西壁側では傾斜角の強い堆積を示す。

出土遺物(第67図、第33表、図版29)

遺物は遺構内覆土の全体から出土したが、それらは他遺構との重複により出土したものも含まれており、図中には明らかに別な時期のものも参考資料として掲載した(12~35)。また、遺構内の北西側からは拳大から人頭大ほどの礫が覆土下層を中心まとまって出土した。図示し得た資料は、当該期の資料と考えられる覆土下層を中心に出土した龍泉窯系の青磁や白磁類、常滑壺・甕類、山茶碗・山皿類などの12点と、参考資料として掲載した灰釉陶器類、須恵器類、古墳時代前期の土師器類などの23点である。以下に器種の内訳を示すと、1が青磁蓮弁文碗、2・3が青磁籠蓮弁文碗、4が白磁碗、5が白磁口禿碗、6が青磁碗、7が青磁盤、8が常滑三筋壺、9が常滑甕、10が無釉陶器甕、11が山皿、12が山茶碗、13~19が灰釉陶器壺、20が灰釉陶器皿、21~26が須恵器壺A、27・28が須恵器壺B、29・30が須恵器壺A、31~33が土師器甕、34が土師器高杯、35が土師器器台で、13~35までは参考資料である。

本遺構の時期について、覆土下層を中心に出土した舶載磁器などの資料より推測すると、13世紀後半から14世紀中葉を下限年代とする時期が考えられる。これらは大幅な年代的な開きはなく、遺構の時期を検討するうえで有効な資料と考えられる。

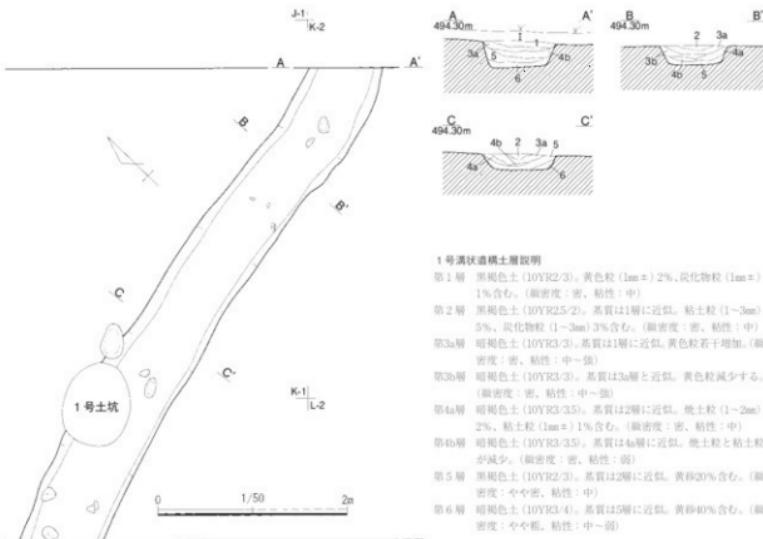
第5節 溝状遺構

向町地点で確認した溝状遺構は、A区の北西側で2条(1・2号)、C区の南東側で1条(3号)の3条である。いずれも調査区内では完結しておらず、1号溝は調査区を概ね東西方向に、3号溝は北西~南東に向かって貫かれている。一方、2号溝は方形状区画を意識しているようにも思われるが全容は不明である。また、3号溝には法面に拳大から人頭大の川原石が積まれ、堅固な構造の造りとなっている。

1号溝状遺構(第68図、図版12)

A区の北西端に位置し、L-1区からK-2区にかけて所在する。遺構はほぼ東西方向に向かって直線的に貫かれているが、両端は不明である。他遺構との重複関係では、1・10号住居跡、1号土坑と重複し、新旧関係では1・10号住居跡→本遺構→1号土坑の順で構築されている。

遺構の現存長は5.80m、幅75~85cm、深さ15~30cmを測り、溝の主軸方位はN-80°-Eである。溝底面の標高は調査区西端の中央で493.91m、東端の中央で493.83mを測り、わずかであるが東側に傾斜している。断面形は逆台形を呈する。覆土は6層に区分される。各層の層界は全体に不明瞭で、



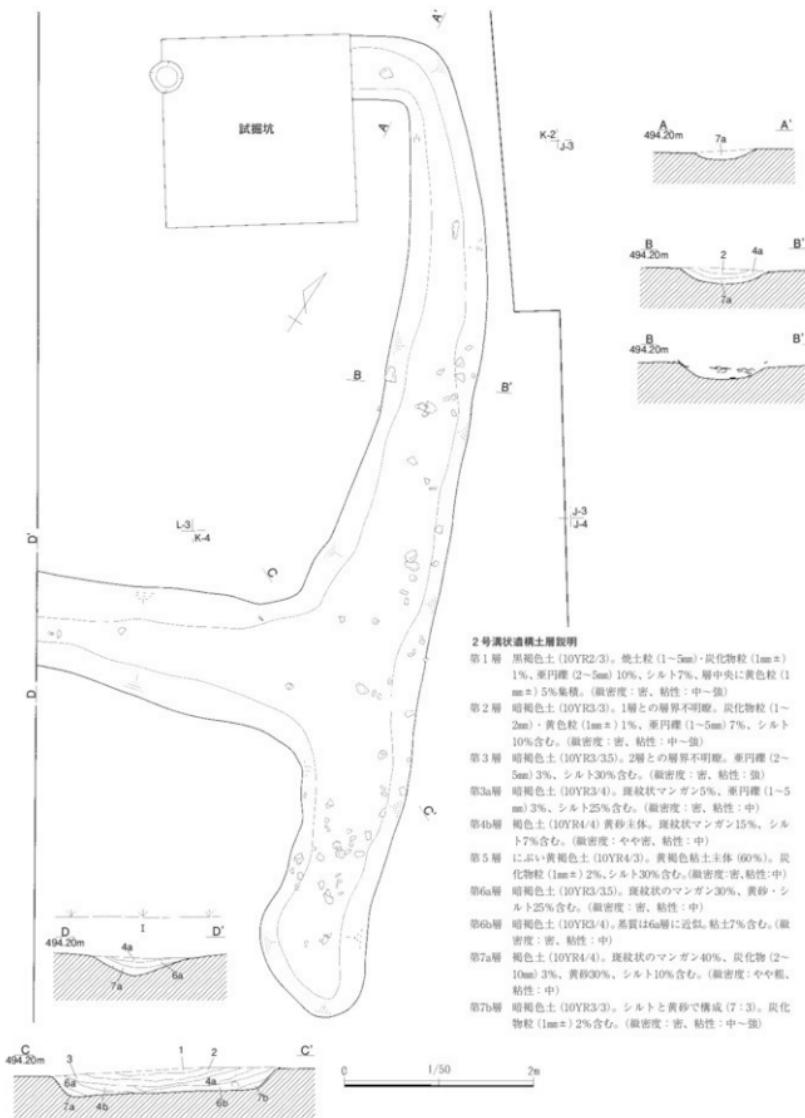
層相の変化に乏しいが、覆土中層から下層にかけて拳大から掌大の礫が若干出土している。

遺物は覆土中より陶器や須恵器などの小破片がわずかに出土したのみで、図示し得た遺物はない。遺構の時期は不明であるが、他遺構との重複関係より推測すると、平安後期もしくは中世以降の所産と考えられる。

2号溝状遺構 (第69図、図版12)

A区の北西側に位置し、K-2～5区を中心に所在する。平面形は方形区画を意識しているように思われるが詳細は不明である。他遺構との重複関係では3号住居跡と重複し、新旧関係では3号住→本遺構の順で構築される。

遺構の現存長は、両端を確認した北西～南東方向で最長10.3mを測る。北西端では南西側に屈曲し、80cmほど延びて2m四方の試掘坑内で終わっている。一方、南東側では途中で南西側に二股に分かれ、3.5mほどのところで調査区外に至る。また、南東側は調査区内で途切れている。溝幅は最小で55cm、最大で155cm、深さは10～25cmである。溝の主軸方位は北西～南東方向で、N-30°-Wである。底面の標高は北西端の屈曲部中央で493.88m、主軸の中央部付近で493.85m、南東端で493.84m、南西端で493.80mである。わずかに南東および南西側に傾斜している。断面形は逆台形状およびU字状を呈する。覆土は7層に区分され、各層の層界は比較的明瞭である。また、少量であるが覆土中からは拳大ほどの礫が出土している。

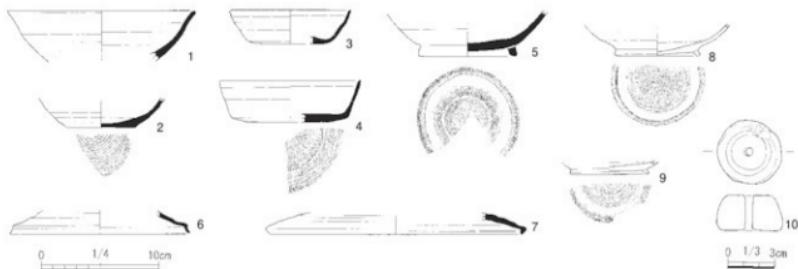


第69図 2号溝状造構実測図 (1/60)

出土遺物（第70図、第34表、図版29）

遺物は少量であるが、覆土上層から底面に至るまで須恵器や灰釉陶器の小破片が出土した。図示した資料は当該期の資料とみられる覆土下層を中心に出土した須恵器や灰釉陶器などの10点である。これらの資料には多少の開きはあるが、遺構の時期を検討する上では概ね有効と考えられる。以下に器種の内訳を示すと、1・2が須恵器塊A、3が須恵器塊G、4が須恵器塊A、5が須恵器塊B、6・7が須恵器蓋、8・9が灰釉陶器塊、10が滑石製の紡錘車である。

遺構の時期について食膳具をもとにみてみると、須恵器は塊・壺類で構成され、黒徳90号窯式期の灰釉陶器塊が共伴する。これらの資料より考えると、9世紀後半を下限年代とすることができよう。



第70図 2号溝状遺構出土遺物 (1/3, 1/4)

3号溝状遺構（第71図、図版12）

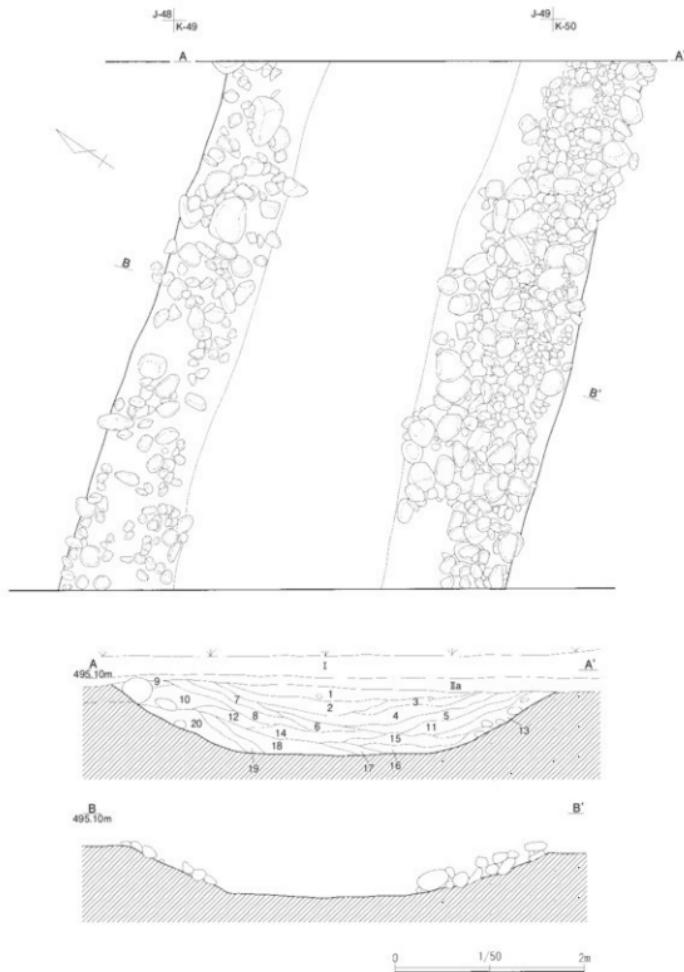
C区の南東側に位置し、K・L-49区を中心と所在する。遺構は調査区内では北西-南東の方向に向かって直線的に貫かれているが、両端は不明である。他遺構との重複関係では3号配石遺構および19号住居跡を壊して構築されている。

遺構の現存長は溝の中軸線上で計測すると5.75m、幅は4.20~4.50m、深さは溝の中央で55~73cmを測り、主軸方位はN-60°-Eである。溝底面の標高は調査区北東端の中央で494.18m、中央付近で494.22m、南西端の中央付近で494.23mを測り、わずかであるが北東側に傾斜している。断面形は逆台形を呈し、両法面には拳大から人頭大の川原石が積まれていた。とくに、南東側の法面は丁寧に積まれており、堅固な構造の造りとなっている。遺構の全容は不明であるが、この溝が既に直線的に延びているものと推測すると、北東の延長部分には上町遺跡D地点の1号溝が位置している。溝幅は約3.5mとやや狭いが、断面形は共通している。また、出土遺物も山茶碗窯期に比定される碗や小碗、龍泉窯系の青磁画花文碗や白磁托、瀬戸の画花唐草文瓶、かわらけなどが図示し得ており、11世紀後半から13世紀代までの資料が出土している。山茶碗窯系の資料で比較すると大幅な年代的な開きはなく、両者は検討するに値しよう。直線距離で約70mあり、大規模な区画施設の可能性も考えられる。

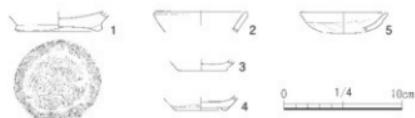
覆土は20層に区分される。覆土上層（1～8層）は層界が不明瞭で、かつ層相の変化に乏しいことから自然埋没と推測される。一方、中層以下は（9～20層）は層界が比較的明瞭で、人為的な影響が及んだ可能性が考えられる。なお、覆土下層には崩落したと考えられる川原石が若干出土している。

出土遺物（第72図、第35表、図版29）

遺物はごく少量であるが、覆土中から山茶碗窯系の陶器類やかわらけが出土している。図示し得た



第71図 3号溝状遺構実測図 (1/60)



第72図 3号竪穴状遺構出土遺物 (1/4)

3号溝状透水層取扱い

- 第1層 黒褐色土 (10YR25-2)。縦紋状マンガン10%、亜円錐 (1~40mm) 2%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)
- 第2層 黒褐色土 (10YR3-2)。縦紋状マンガン3%、亜円錐 (5mm±)・炭化物粒 (1mm±) 1%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第3層 黒褐色土 (10YR25-2)。層上位に縦紋状のマンガン5%、全体に亜円錐 (1~30mm) 5%含む。(緻密度: 密、粘性: 中)
- 第4層 黒褐色土 (10YR25-3)。基質は3層に近似。亜円錐減少。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第5層 黒褐色土 (10YR2-3)。基質は4層に近似し、黄砂少含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第6層 黒褐色土 (10YR3-2)、要約3%、亜円錐 (3mm±) 1%、炭化物粒 (1mm±) 1%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第7層 黒褐色土 (10YR2-25)。層上位に縦紋状マンガン5%、亜円錐 (2mm±) 3%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第8層 黒褐色土 (10YR3-25)。基質は7層に近似。黄砂5%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中~弱)
- 第9層 黒褐色土 (10YR2-25)。縦紋状マンガン10%、亜円錐 (1~40mm) 3%、炭化物粒 (1mm±)、黄砂1%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第10層 黒褐色土 (10YR2-3)。縦紋状のマンガン3%。亜円錐 (1~200mm) 7%、黄砂5%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)

資料は山茶碗、山皿、小碗、かわらけなどの5点である。以下に器種の内訳を示すと、1が山茶碗、2・3が山皿、4が小碗、5がかわらけである。

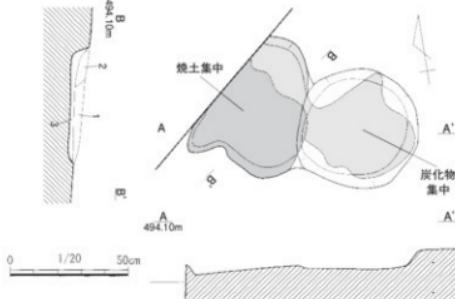
遺構の時期について図示し得た資料より判断すると、概ね山茶碗窯期の11世紀後半と考えられるが、上町遺跡D地点の1号構との関連性を考慮すると13世紀代まで下る可能性もある。

第6節 焼土跡

上町向町地点の調査で焼土跡と命名した遺構は、A区北西側のK-3区第V層面で確認した地床炉状の遺構である。本調査区も全体に削平されていたことから竪穴住居跡の炉跡の可能性もあるが、床面や柱穴などの確認も併せて行ったが発見されなかった。

1号焼土跡 (第73図)

A区の北西側に位置し、発掘区ではK-3区に所在する。他遺構との重複関係は認められないが、遺構の西側が試掘坑により一部が壊されている。遺構は不整形形のものと円形のものが接しており、重複関係が認められないことから一体的なものと考えられる。前者は南北軸で60cm、後者は径50cmで、



第73図 1号焼土跡実測図 (1/20)

1号焼土跡層取扱い

- 第1層 茶色土 (7.5YR4-6)。焼土主体。炭化物粒 (1~2mm)・黄砂5%含む。(緻密度: 密、粘性: 弱~中)
- 第2層 黒褐色土 (10YR2.5-3)。焼土粒 (1~3mm) 2%、炭化物粒 (1~5mm) 10%、縦紋状の黄砂2%、亜円錐 (1~5mm) 3%含む。(緻密度: やや密、粘性: 中)
- 第3層 茶色土 (10YR3-4)。黄砂土主体。焼土粒・炭化物粒 (2mm±) 1%含む。(緻密度: 稲、粘性: 弱)

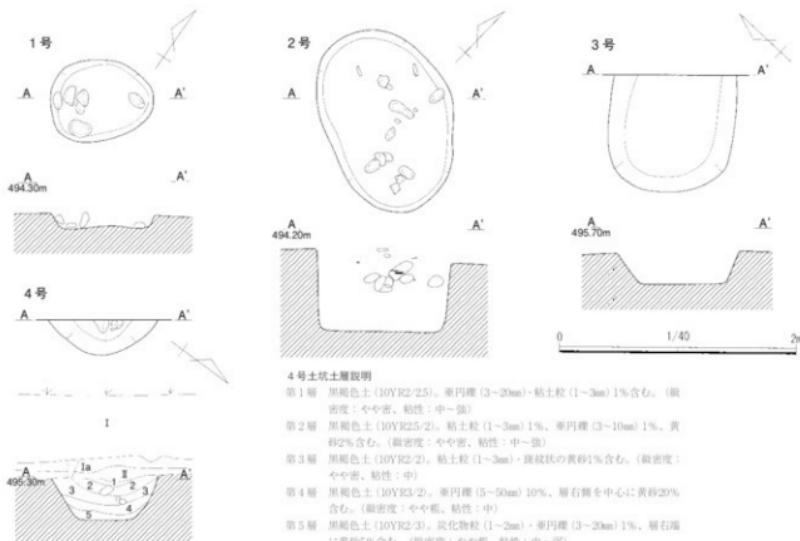
深さは両者とも8cmほどである。また、壁は両者とも開きぎみに立ち上がり、底面は西側がやや低い。覆土は3層に区分され、上層（1層）には焼土や炭化物が集積していた。また、底面に焼けた痕跡は確認されていない。なお、遺物は出土していない。

第7節 土坑

向町地点で確認した土坑は、A区の北西側で2基（1・2号）、D区の南東側で2基（3・4号）の計4基である。これらの分布は疎らで、規模、形態もそれぞれ異なっている。1・2号は調査区内で完結しているが、3・4号は調査区外に及んでおり、全容は捉え切れていない。また、遺物は2号に図示し得た資料があるのみで、他の土坑からは出土していない。なお、これら土坑の時期について明確な所見は持ち合わせていないが、他遺構との重複関係をもとに検討すると、1号土坑は中世段階、2号土坑は出土遺物より平安後期頃と推測される。

1号土坑（第74図）

A区の北西端に位置し、発掘区ではK・L-1区に所在する。他遺構との重複関係では、1号溝を壊して構築されている。平面形は不整梢円形（卵形）で、長軸（北東-南西）87cm、短軸58cmを測り、深さは5~8cmである。壁はやや開きぎみに立ち上がり、坑底面はほぼ平坦である。覆土は単層で、南西側を中心に拳大から掌ほどの礫が出土している。なお、遺物は出土していない。



第74図 1~4号土坑実測図 (1/30)

遺構の時期は不明であるが、他遺構との重複関係より推測すると、中世もしくはそれ以降の所産と考えられる。

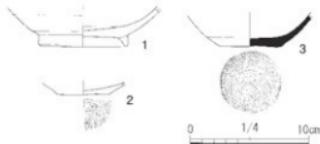
2号土坑（第74図、図版12）

A区の北西側に位置し、発掘区ではK-5区に所在する。平面形は楕円形で、長軸（北西-南東）155cm、短軸112cm、深さはもっとも残りの良い西壁側で70cmを測る。一部削平を受けているが、壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底面はほぼ平坦である。覆土は13層に区分され、各層の層界は比較的明瞭であり、覆土上層を中心に図示し得た遺物や礫が出土している。

出土遺物（第75図、第36表、図版29）

遺物は覆土上層を中心に灰釉陶器壇、山皿、須恵器壇Aなどが少量出土した。図示し得た3点は、いずれも破片資料で、1が黒窯90号窯式期の灰釉陶器壇、2が山皿、3が須恵器壇Aである。

遺構の時期について図示し得た山皿より判断すると、概ね11世紀後半から12世紀前半を下限年代とすることができよう。



第75図 2号土坑出土遺物（1/4）

3号土坑（第74図）

D区のはば中央に位置し、発掘区ではH-70区に所在する。他遺構との重複関係は認められないが、遺構の北東側は調査区外に及ぶ。平面形は楕円形と推測され、規模は主軸長（北東-南西）で100cm、短軸107cm、深さ27cmを測る。壁はながらに立ち上がり、坑底面はほぼ平坦である。覆土は単層で、分層には至っていない。なお、遺物は出土していない。

4号土坑（第74図、図版12）

D区の南東側に位置し、発掘区ではH-74・75区に所在する。本遺構の大半は南西側の未調査区に及ぶことから平面形や規模などの詳細は明らかにできないが、平面形は他の土坑と同様に楕円形状と考えられる。深さは35cmほどで、壁は急角度で立ち上がり、坑底面はほぼ平坦である。覆土は5層に区分され、各層の層界は不明瞭で、層相の変化に乏しい。覆土上層から中層にかけて拳大ほどの礫が少量出土したが遺物は確認されていない。

第8節 集石土坑

向町地点で集石土坑として取り扱った遺構は、土坑内に礫（主に川原石／円礫・亜円礫で構成）が充填された遺構を指す。これらはA区の南東側を中心に27基（1～7・8a・8b・9a・9b・10～18・20～24・40・41号／19号欠番）、B区の南西側を中心に13基（25～29・31・36～39・42～44号）、C区の北西側を中心に8基（30・32～35・46～48号）と、C区の南東寄りに1基（45号）の計49基である。これら集石土坑の共通点は、土坑内に拳大から掌大ほどの円礫や亜円礫が充填されている点で、土坑の規模や平面形などは大小様々であった。なお、遺構確認面は概ね第IV層上面であった。

平面形は梢円形もしくは円形基調のものが主体で、規模は最小のもので60cm内外、最大のものでは3mを超えるものまであったが、80~120cm程度のものが中心であった。これら集石土坑の分布は、調査区内では単独のものも存在したが、多くはまとまりをもって形成しているように見受けられた。また、遺構同士重複しているものは少なかった。

礫の出土状況については、土坑の底面まで充填されたと考えられるものもあったが、礫が底面まで溝遍なく出土したものは少なかった。多くは土坑の覆土上層から中層にかけて確認されたものである。また、礫の出土が少なかったものや、疎らな出土のものについても集石土坑として扱っている(5・8a・9b・11・13・24・32・35・46~48)。なお、礫に焼けた痕跡が認められるものは少なかった。

8号および9号集石土坑は土坑の調査で別遺構と判明したため、それぞれa・bに分けた。また、18・19号集石土坑は当初礫の分布が2箇所で確認されたため2基(18・19号)の遺構として扱ったが、下部の土坑調査で一体となつたため1基(18号)とした。

集石土坑内の覆土は、基本層序の第Ⅱ層黒褐色土に類似する土層(砂質植土壤)で構成されている。この第Ⅱ層は中世から近世の遺物包含層と推測されるもので、遺構の時期を決める目安となっている。なお、出土遺物はごく少量であったが、集石の確認時および礫の間から瀬戸・美濃系の陶器類(端反皿・天目碗・摺鉢等)や山茶碗窯系の碗類、灰釉陶器、須恵器、土師器などの小破片が出土している。

1号集石土坑(第76図、図版12・13)

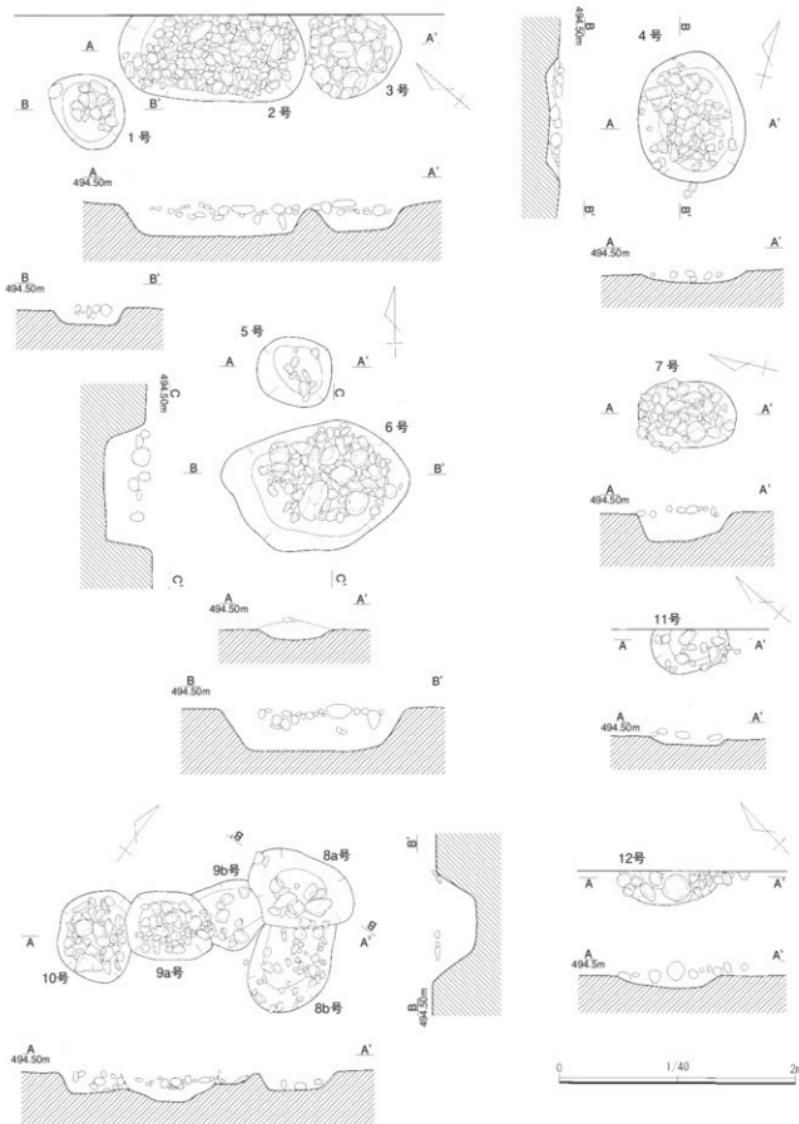
A区の南東側に位置し、発掘区ではK-12区に所在する。周辺には本遺構を含めて6基(1~6号)の集石土坑がまとまっている。平面形は卵形を呈し、規模は長軸(南北)70cm、短軸58cm、深さ10~15cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫は中央から東側にかけて確認され、5~20cm台の礫が覆土上層から中層にかけて出土している。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

2号集石土坑(第76図、図版12・13)

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-12・13区に所在する。本遺構は1号および3号集石土坑に挟まれ、また北東側は調査区外に一部及ぶ。平面形は梢円形と推測され、長軸(北西~南東)160cm、短軸現存長(北東~南西)73cm、深さ25cmを測る。坑底面は平坦に整えられ、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、ほぼ全面に形成される。10~20cm大の礫が主体であるが、5cm未満の小さなものや25cm以上の大きなものも含まれる。層位的には覆土上層を中心に充填されたものと考えられる。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

3号集石土坑(第76図、図版12・13)

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-13区に所在する。北西側で2号集石土坑と接し、北東側は調査区外に一部及ぶ。平面形は略円形と推測され、直径(北西~南東)78cm、北東~南西現存長70cm、深さ20cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、ほぼ全面に形成される。礫は10~20cm大のものが主体であるが、5cm未満の小さな礫や25cmを超える大形のものも若干含まれている。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土



第76図 1~12号集石土坑実測図 (1/40)

を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

4号集石土坑（第76図、図版13）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-12・13区に所在する。平面形は楕円形を呈し、長軸（北西-南東）110cm、短軸90cm、深さは5~10cmを測る。坑底面には凹凸が認められ、壁面はなだらかに立ち上がる。礫は土坑の中央部分を中心に確認され、10~20cm程度のものが主体である。層位的には覆土上層から下層まではほぼ充填されている。覆土最下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

5号集石土坑（第76図、図版13）

A区の南東側に位置する本遺構は、3号と6号集石土坑の間に挟まれ、発掘区ではK-13区に所在する。平面形は不整円形とみられ、規模は長軸（東西）63cm、深さ10cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の出土は疎らで、5~15cm大のものが覆土上層を中心に確認された。礫を含まない覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

6号集石土坑（第76図、図版13）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-13区に所在する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸（東西）160cm、短軸110cm、深さ40cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫は中央付近から東側にかけてとくに集積しており、5~15cm大の礫が主体であるが大きなものでは人頭大のもの含まれている。層位的には覆土上層から中層にかけて出土し、礫を含まない覆土下層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、本遺構からも遺物は出土していない。

7号集石土坑（第76図、図版13）

A区の南東側に位置し、発掘区ではL-15区に所在する。周辺には本遺構を含めて7~18・20~24(8a・b、9a・b)号の19基の集石土坑が密に分布する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸（南北）85cm、短軸56cm、深さは15~23cmである。坑底面は南側がやや浅く北側が深い。壁面はやや開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、ほぼ全面に形成される。10~15cm大の礫が主体であるが、5cm未満の小さなものや20cmを超えるやや大きなものも含まれている。礫を含まない覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

8a号集石土坑（第76図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-15区に所在する。9a・b号、10号の各集石土坑と連なり、他遺構との重複関係では8b・9b号集石土坑と重複し、8b号・9b号→本遺構の順で構築される。平面形は不整楕円形で、長軸（東西）94cm、短軸65cm、深さは38cmを測る。坑底面は平らに整えられ、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫は南側の覆土上層から確認されたのみで、北側にはみられない。礫は20~25cm大のやや大きなものが中心である。礫を含まない覆土下層および礫の間を埋める土層は、

第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

8 b 号集石土坑（第76図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-15区に所在する。他遺構との重複関係では、8 a・9 b号集石土坑と重複し、本遺構・9 b号→8 a号の順で構築される。なお、9 b号との関係は不明である。平面形は楕円形と推測され、規模は長軸現存長（南北）72cm、短軸67cm、深さ15cmである。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の出土は全体に疎らで、5~10cm大の小形の礫が主体である。層位的には覆土中層から下層にかけて確認された。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

9 a 号集石土坑（第76図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-15区に所在する。遺構間との重複関係では9 b・10号集石土坑と重複関係にあり、9 b・10号→本遺構の順で構築される。平面形は不整楕円形で、規模は長軸（南西-北東）75cm、短軸57cm、深さは中心付近で約15cmを測る。坑底面はやや丸みをもち、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫は覆土上層を中心に確認され、5~15cm大の礫が主体である。また、礫を含まない覆土下層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、本遺構からも遺物は出土していない。

9 b 号集石土坑（第76図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-15区に所在する。本遺構は8 a号および9 a号集石土坑に挟まれ、両端部が壊されている。平面形は不整楕円形と推測され、長軸現存長（南西-北東）50cm、短軸58cm、深さは中心部で約10cmを測る。坑底面は皿状を呈し、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫の出土は疎らで、5~15cm大の礫が覆土中層から底面にかけて確認された。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

10号集石土坑（第76図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-15区に所在する。他遺構との重複関係では9 a号集石土坑により北東側の一部分が壊されている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸（南北）78cm、短軸65cm、深さ20cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫は土坑全体から確認され、多くは10~15cm大のものが主体であるが、5cm未満のものや20~25cm大のものも含まれている。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

11号集石土坑（第76図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-14区に所在する。遺構の北東側は調査区外に及ぶため全容は捉えされていない。平面形は概ね略円形と推測され、規模は長軸（東西）65cmの小形の遺構である。深さは約10cmを測り、坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の出土状況は全体に疎ら、5~15cm大の礫が覆土上層を中心に確認された。覆土下層および礫の間を埋める土層は、

第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

12号集石土坑（第76図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-15区に所在する。遺構の大半が調査区外に及ぶため全容は捉えきれていない。平面形は楕円形もしくは円形基調と考えられる。規模は調査区境界の土層断面で計測すると約90cm、深さは断面の中心部分で12cmを測る。坑底面はやや南側が低くなっている。また、壁面は開きぎみに立ち上がる。出土礫は10~20cm大のものが主体であるが、5cm未満の小形のものや25cmを超える大形のも若干含まれている。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

13号集石土坑（第77図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-15区に所在する。他遺構との重複はみられない。平面形は略円形を呈し、規模は長軸（南西-北東）70cm、短軸65cmを有し、深さは15cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫は土坑の中央部を中心に確認されたが、全体的に疎らで、層位的には覆土上層を中心に5~15cm大の礫が目立つ。覆土下層や礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

14号集石土坑（第77図、図版13・14）

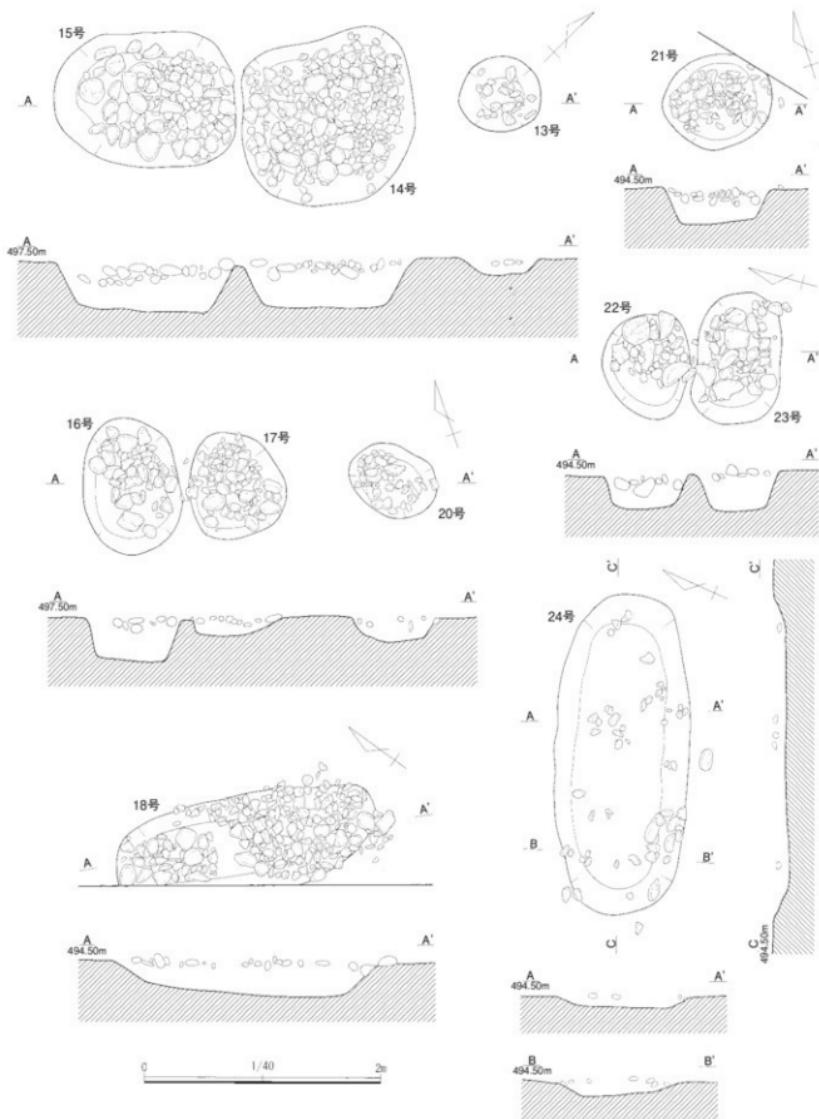
A区の南東側に位置し、発掘区ではK-15区にあたる。他遺構との重複はみられないが、15号とは南西側で近接する。平面形は略隅丸方形を呈し、規模は長軸（南西-北東）145cm、短軸140cm、深さ40cmを測る。坑底面は平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、ほぼ全面に形成される。層位的には覆土上層を中心に充填されたものと考えられる。礫の多くは10~20cm大のものであるが、5cm未満の小さなものや25cmを超えるものも多少みられる。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、本遺構内からも遺物は出土していない。

15号集石土坑（第77図、図版13・14）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK・L-15区に所在する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸（南西-北東）155cm、短軸115cm、深さ40cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫は前述の14号と同様に覆土上層を中心に確認され、多くは10~20cm大のものが主体であるが、北東側では5cm未満の小さなものや、南西側では25cmを超えるものが多くみられた。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

16号集石土坑（第77図、図版13・15）

A区の南東側に位置し、発掘区ではL-15区を中心と所在する。ほぼ同規模の17号と隣接している。平面形は楕円形を呈し、長軸（南北）117cm、短軸80cmを有し、深さは南東側で35cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが南東側はやや低くなつおり、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。出土礫の多くは中



第77図 13~18・20~24号集石土坑実測図 (1 / 40)

央付近から北側にかけてのもので、南西側は疎らな出土である。その多くは5~20cm大のもので、層位的には覆土上層を中心に確認されている。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

17号集石土坑（第77図、図版13・15）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK・L-16区に所在する。平面形は略円形を呈し、長軸（南北）90cm、短軸80cm、深さ15cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面の西側はほぼ垂直であるが、東側は開きぎみに立ち上がる。礫の分布範囲は土坑上面に形成される。層位的には覆土上層を中心に集積しているが、中央付近から南側は20cm前後のやや大きな礫が中心で、北側は5~10cmほどの小礫が多い。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

18号集石土坑（第77図、図版13・15）

A区の南東側に位置し、発掘区ではL-15・16区に所在する。遺構の南西側が一部調査区外に及ぶ。調査当初、礫の分布範囲が2箇所で確認できたため18号および19号集石土坑として調査にあたったが、下部施設の調査結果では一つの土坑であることが判明した。その結果、18号集石土坑として扱い、19号は欠番扱いとした。遺構の平面形は梢円形を呈し、規模は長軸（北西-南東）225cm、短軸約90cm、深さは20~25cmである。坑底面は南東側がやや低くなってしまい、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の分布範囲は、南東側と北西側の2箇所にあり、ともに5~15cm大の比較的小さな礫を主体に構成されている。また、層位的には覆土上層から中層にかけて出土している。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

20号集石土坑（第77図、図版13・15）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK・L-16区に所在する。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸（北西-南東）75cm、短軸56cm、深さ15~20cmを測る。坑底面はやや丸みをもち、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫の出土は遺構の上面を中心に確認されたが、全体的には希薄である。また、礫の多くは5~10cm大のもので占められる。層位的には覆土上層を中心に出土している。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

21号集石土坑（第77図、図版13・15）

A区の南東側に位置し、発掘区ではK-16区に所在する。遺構の北東側がわずかに調査区外に及ぶ。また、ほぼ同規模の22・23号集石土坑と並ぶ。平面形は梢円形を呈し、長軸（東西）95cm、短軸80cm、深さ25~30cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが西側がやや低くなってしまい、壁面は開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認されたが、全面に広がるものではなく南側では希薄な部分もみられる。層位的には覆土上層を中心に充填されたものと考えられる。礫は5~10cm大の小さな礫が中心である。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

22号集石土坑（第77図、図版13・15）

A区の南東側に位置し、21号と23号集石土坑の間に挟まれている。発掘区ではK-16区に所在する。平面形は卵形を呈し、長軸（東西）88cm、短軸75cm、深さ30cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫は中央部から北東側にかけて集積し、5~20cm大を主体とする礫が覆土上層から中層にかけて充填されたと考えられる。覆土中下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

23号集石土坑（第77図、図版13・15）

A区の南東側に位置し、本遺構は22号集石土坑と近接する。発掘区ではK-16・17区に所在する。平面形は楕円形を呈し、長軸（東西）110cm、短軸70cm、深さ34cmを測る。坑底面は平坦に整えられ壁面はやや開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、ほぼ全面に形成される。層位的には覆土上層を中心で充填されたものと考えられる。礫の多くは5~20cm大を主体とするものであるが、25cmを超える大きなものも含まれていた。覆土中下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

24号集石土坑（第77図、図版13）

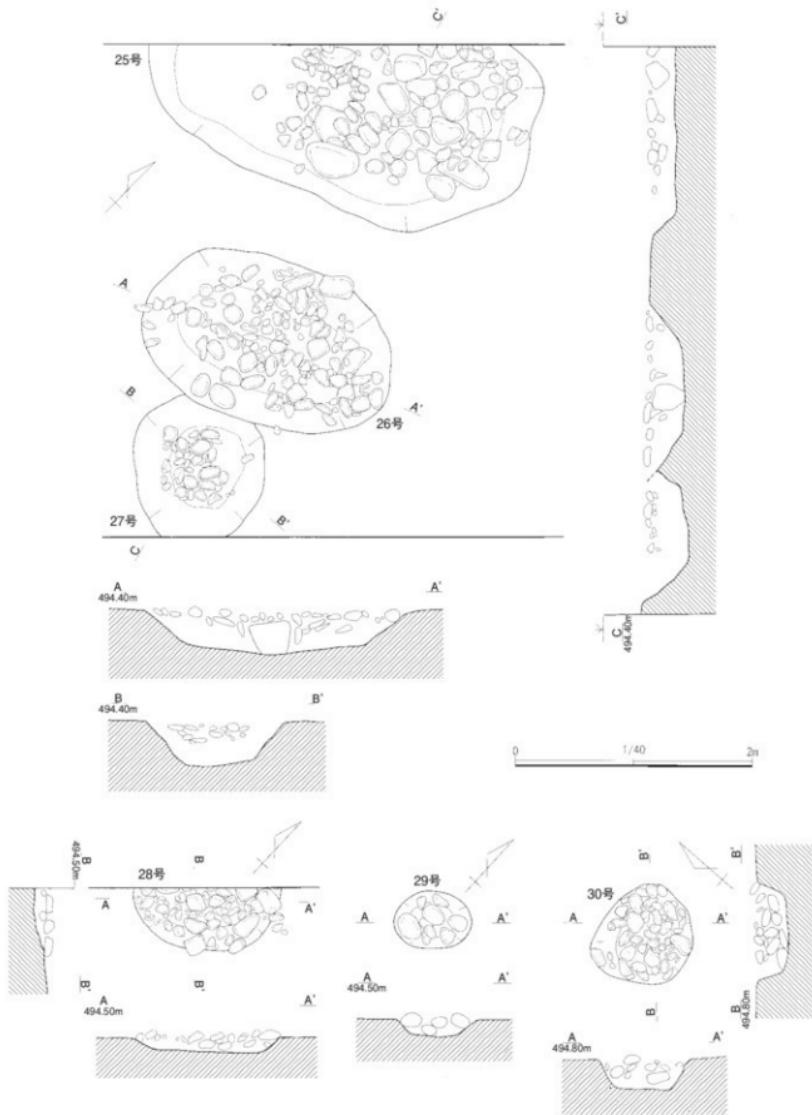
A区の南東側に位置し、本遺構は27号集石土坑と並んで規模の大きなものである。発掘区ではK-14・15区に所在する。平面形は楕円形を呈し、長軸（東西）270cm、短軸115cm、深さ6~10cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが北西側がやや深くなっている、壁面はなだらかに立ち上がる。礫の出土は疎らで、層位的には覆土上層から中層にかけて確認された。礫の大きさは5~15cm大のものが主体で、覆土中層から下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

25号集石土坑（第78図、図版15）

B区の南西側に位置し、発掘区ではQ・R-18区に所在する。周辺には本遺構を含めて、25~29・31・36~39・42~44号の計13基の集石土坑が一箇所にまとまって分布している。また、本遺構の北西側が調査区外に及ぶ。平面形は概ね楕円形と判断され、長軸推定長（東西）340cm、短軸推定長200cm、深さは25cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認されたが、礫の分布範囲は中央部から東側一帯で、西側には及んでないものと考えられる。礫は5~20cm大のものが主体であるが、40cmを超える大きなものもみられる。層位的には覆土の上層から中層にかけて充填されと考えられる、覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

26号集石土坑（第78図、図版15）

B区の南西側に位置し、発掘区ではR-18区に所在する。他遺構との重複関係では27号集石土坑と新旧関係があり、本遺構が27号の壁の一部を壊している。平面形は楕円形を呈し、長軸（北東~南西）220cm、短軸140cm、深さは中心部分で30cmを測る。坑底面はやや丸みをもち、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫はほぼ全面から確認されたが疎らな箇所も認められる。5~15cm大の礫が主体であるが、



第78図 25~30号集石土坑実測図 (1/40)

25~35cm大のものもみられる。層位的には覆土上層から中層にかけて充填され、土坑底面の中心には30cm大の礫が置かれている。覆土下層以下および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質土である。なお、遺物は出土していない。

27号集石土坑（第78図、図版15・16）

B区の南西側に位置し、壁の一部は26号集石土坑により壊され、南東端が遺構外に一部及んでいる。発掘区ではR-18・19区に所在する。平面形は略円形と推測され、規模は長径約120cm、短径110cm、深さ40cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが南西側がやや低く、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、北側はやや希薄である。礫は5~15cm大のものが主体であるが、20cm大のものも多少含まれている。層位的には覆土上層から中層にかけて充填されたと考えられる。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質土である。なお、遺物は出土していない。

28号集石土坑（第78図、図版16）

B区の南西側に位置し、発掘区ではR-S-18区に所在する。遺構の北西側は調査区外に及ぶため全容は捉えきれていない。平面形は円形ないし梢円形と推測される。規模は調査区境界の土層断面をもとに計測すると125cm、深さは10~15cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はなだらかに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、調査範囲内では全面に及んでいる。礫は5~15cm大のものが主体であるが、20~25cm大のものも含まれている。層位的には覆土上層から下層まで充填されたと考えられる。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質土である。なお、本遺構でも遺物は出土していない。

29号集石土坑（第78図、図版16）

B区の南西端に位置し、発掘区ではV-18区に所在する小形の集石土坑である。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸（北東-南西）67cm、短軸48cm、深さ15cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫は土坑内のほぼ全面から確認され、10~25cm大のものが主体である。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質土である。遺物は出土していない。

30号集石土坑（第78図）

C区の北西側に位置し、発掘区ではL-24区に所在する。同形態の遺構は周囲にはない。平面形は略円形を呈し、規模は長軸88cm、短軸84cm、深さ26cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫は土坑内のほぼ全面にわたって存在し、その多くは10~20cm大のものであるが、5cm未満のものも多少含まれている。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質土である。なお、遺物は出土していない。

31号集石土坑（第78図、図版16）

B区の南西側に位置し、発掘区ではS-18区に所在する。他遺構との重複関係では36号集石土坑と

接するが新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、長軸（南北）98cm、短軸63cm、深さ16cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面は開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認されたが、礫の分布はやや疎らである。多くは10~20cm大のものであるが、5cm未満の小さな礫を含まれている。層位的には覆土上層から中層にかけて出土した。覆土および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

32号集石土坑（第78図）

C区の北西側に位置し、発掘区ではK-29区に所在する。周辺には本遺構を含めて5基（32・33・46~48号）の集石土坑が群集している。平面形は不整楕円形を呈し、長軸（南北）116cm、短軸70cm、深さは10cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はなだらかに立ち上がる。集石は土坑上面で確認されたが、礫の集積部分は東側の一部分で、西側は疎らである。礫の多くは10~15cm大のもので、層位的には覆土上層から下層に至るまで全面から出土している。覆土および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

33号集石土坑（第78図、図版16）

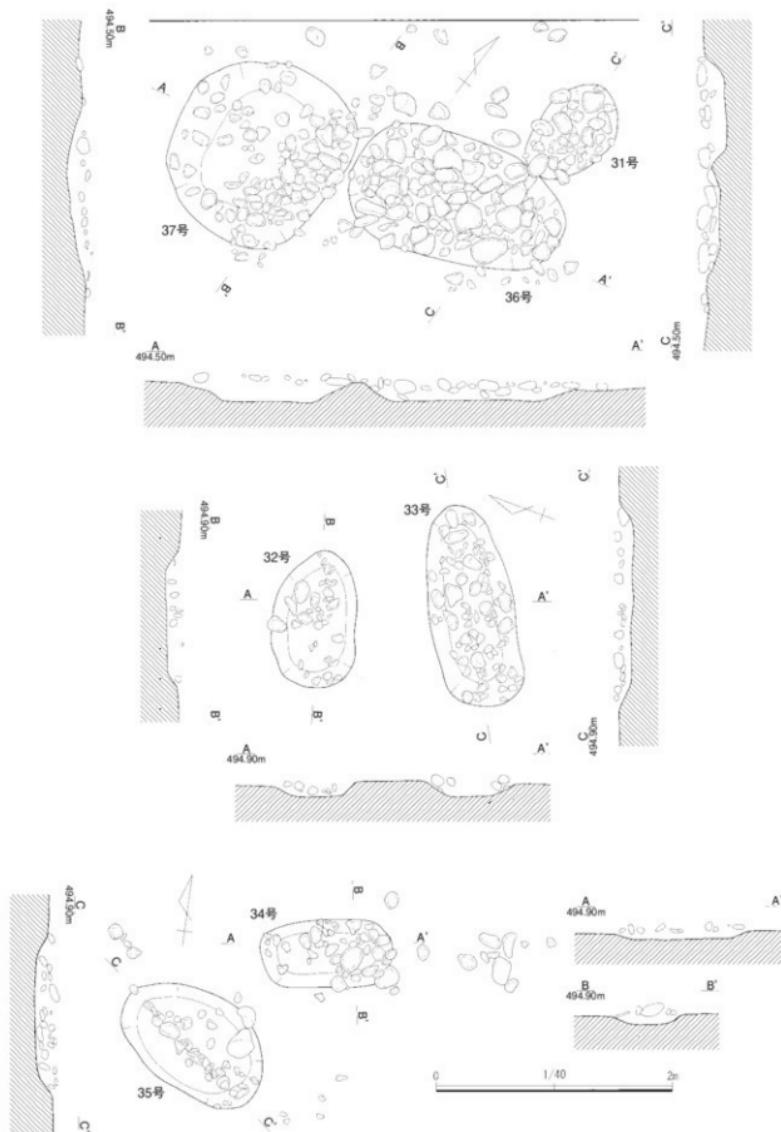
C区の北西側に位置し、発掘区ではK-29区に所在する。また、前述の32号とは向かい合っている。平面形は楕円形を呈し、長軸（北東~南西）173cm、短軸73cm、深さ10~13cmを測る。坑底面は概ね平坦であるが、部分的に凹凸が認められる。また、壁面はなだらかに立ち上がる。集石は土坑上面で確認されたが、疎らな箇所もあり、礫の密集度は全体的には低かった。礫の多くは10~20cm大のものであるが、5cm未満のものも多少含まれている。層位的には覆土上層から中層にかけて出土している。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

34号集石土坑（第78図）

C区の北西側に位置し、35号集石土坑と2基で小群を形成する。発掘区ではK-27区に所在する。平面形は略隅丸長方形と推測される。規模は長軸（東西）115cm、短軸58cm、深さ6~8cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はなだらかに立ち上がる。集石は土坑の中央部から東側にかけて確認された。礫の多くは10~20cm大のものであるが、5cm未満の小さな砂も含まれていた。層位的には覆土上層から中層にかけて確認された。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

35号集石土坑（第78図）

C区の北西側に位置し、発掘区ではL-26・27区に所在する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸（北西~南東）135cm、短軸85cm、深さ15cmを測る。坑底面は平坦で、壁面はなだらかに立ち上がる。集石は土坑の長軸方向に沿って列状に並んでいるようにもみられるが周囲は疎らである。礫の多くは5~15cm大のものであるが、20~25cm大の礫も若干含まれる。層位的には覆土上層から下層にかけて出土した。覆土および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。



第79図 31~37号集石土坑実測図 (1 / 40)

36号集石土坑（第78図、図版16）

B区の南西側に位置し、発掘区ではS-T-18区に所在する。周辺には本遺構を含めて13基(25~29・31・36~39・42~44号)の集石土坑がみられる。他遺構との重複関係では、31号集石土坑と接するが新旧関係は不明。また、37号とはわずかに近接している。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸(北東-南西)187cm、短軸106cm、深さ10cmを測る。坑底面はほぼ平坦に整えられ、壁面はなだらかに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、礫はほぼ全面に及んでいる。層位的には土坑の内部全体にはほぼ充填されたものとみられる。礫の多くは10~20cm大のものであるが、5cm未満の小さなものや25cmを超えるものも多少みられる。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質埴土である。なお、遺物は出土していない。

37号集石土坑（第78図、図版16）

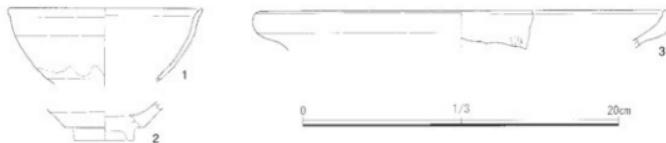
B区の南西側に位置し、発掘区ではS-T-18区に所在する。他遺構との重複関係はみられないが、36号とはわずかに近接している。平面形は概ね隅丸方形と推測される。規模は長軸(南北)158cm、短軸146cm、深さは土坑の中央で17cmを測る。坑底面はや丸みをもち、壁面はなだらかに立ち上がる。礫は東側のみに偏在し、西側は疎らである。礫の多くは15~20cm大のものであるが、5cm未満の礫も含まれる。層位的には覆土上層を中心に出土した。下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質埴土である。なお、遺物は出土していない。

38号集石土坑（第81図、図版16）

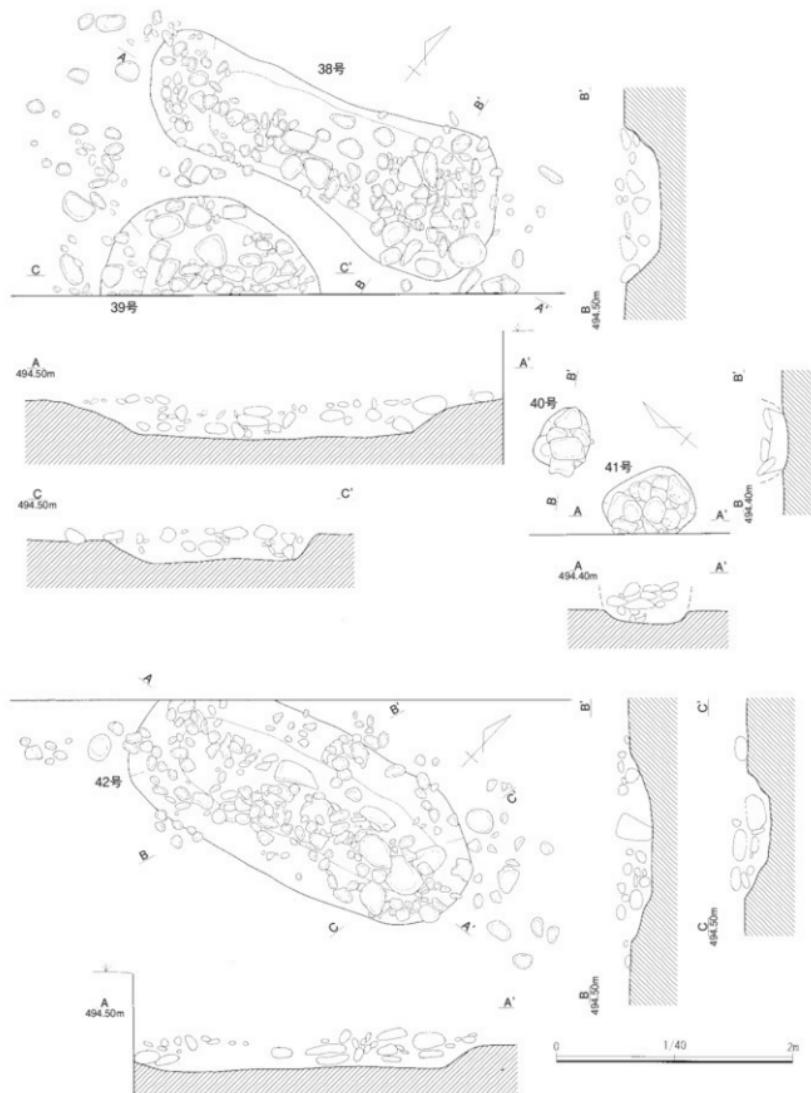
B区の南西側に位置し、発掘区ではS-T-18・19区に所在する。平面形は概ね楕円形基調と推測されるが、長軸線上の中央部がややくびれている。規模は長軸(北東-南西)325cm、短軸85~130cm、深さ25~30cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが北東側がやや低く、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の分布は北東側に偏在し、南西側は疎らである。礫の多くは15~20cm大のものが主体であるが、5cm未満のものや30cmを超える大きなものまで含まれる。層位的には覆土上層から下層に至るまで及ぶ。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質埴土である。

出土遺物（第80図、第37表、図版30）

出土した3点の遺物は、いずれも瀬戸・美濃系の資料で、集石の確認時に発見されたものである。1・2は天目碗、3は摺鉢の破片である。天目碗には内外面に光沢のある黒褐色の鉄釉が施される。時期の詳細は不明であるが、天目碗は概ね中世の範疇、摺鉢は近世前半と考えられるが遺構の時期を示すものではない。



第80図 38号集石土坑出土遺物（1/3）



第81図 38~42号集石土坑実測図 (1/40)

39号集石土坑（第81図、図版16）

B区の南西側に位置し、南東側は調査区外に至る。発掘区ではS・T-19区に所在する。平面形は略円形もしくは楕円形と考えられるが詳細は不明である。規模は調査区境界の土層断面（北東-南西）をもとに計測すると190cm、深さは20~23cmを測る。坑底面は概ね平坦に整えられているが、部分的に凹凸が認められる。壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の分布は調査区の境界付近に偏在し、南西側はやや疎らである。礫の多くは10~20cm大のものが主体であるが、5cm未満のものや25cmを超えるものも含まれる。層位的には覆土上層から下層に至るまで及ぶ。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

40号集石土坑（第81図、図版16）

A区のほぼ中央に位置し、南側の41号集石土坑と小群を形成する。発掘区ではL-9区に所在する。平面形は卵形を呈し、長軸（北東-南西）57cm、短軸45cm、深さ22cmを測る、集石土坑とした中では最小規模の例である。坑底面はやや丸みをもち、北西側に浅いピット状の掘り込みがみられ、壁面はなだらかに立ち上がる。集石を形成する礫は20~30cm大の比較的大きなものが使われ、あたかも蓋を被せたかのような状況である。層位的には覆土上層のみで、礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

41号集石土坑（第81図、図版16）

A区のほぼ中央に位置し、発掘区ではL-9・10区に所在する。南西側の一部が調査区外に及ぶ。平面形は隅丸方形と推測され、長軸（東西）75cm、短軸60cm、深さ30cmを測る。坑底面はやや丸みをもち、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。集石は土坑上面で確認され、礫は全面に及んでいる。また、層位的には覆土上層から中層にかけて充填されたものと考えられる。礫の多くは10~20cm大のものであるが、25cmを超えるものも多少含まれる。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

42号集石土坑（第81図、図版17）

B区の南端に位置し、発掘区ではU-18区に所在する。また、北西側の一部が調査区外に及ぶ。平面形は楕円形と推測され、規模は長軸（東西）305cm、短軸137cm、深さ20~25cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが西側がやや低くなっている。壁面はなだらかに立ち上がる。集石は土坑の長軸線に沿うようにして確認されたが、礫の分布には密な部分と疎らな部分がある。礫の多くは10~15cm大のものであるが、5cm未満のものや、30cmを超える大きなものも含まれている。東側の密な部分では、サークル状の中に大きな礫で蓋をしたような箇所もみられる。層位的には覆土上層から下層にかけて充填されたと考えられる。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。



第82図 42号集石土坑出土遺物（1/3）

出土遺物（第82図、第38表）

出土した遺物は瀬戸・美濃系の摺鉢の口縁部片である。集石の確認時に出土したもので、内外面に鉄釉がかかる。口縁部形態の特徴より推測すると、概ね17世紀後半の範疇と考えられる。

43号集石土坑（第84図、図版16・17）

B区の南西端に位置し、発掘区ではV-18・19区に所在する。平面形は橢円形を呈し、規模は長軸（北東-南西）125cm、短軸69cm、深さ10cmを測る。坑底面は平坦で、壁面はなだらかに立ち上がる。礫の分布は西側にやや偏在し、東側は疎らである。礫の多くは10~20cm大のもので、層位的には覆土上層から下層にかけて出土している。覆土および礫の間を埋める土層は、第II層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

44号集石土坑（第84図、図版16・17）

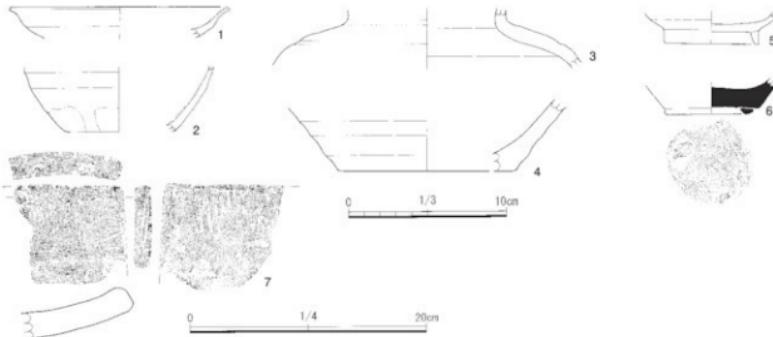
B区の南西端に位置し、発掘区ではV-18区に所在する。また、南西側は調査区外に及んでいる。平面形は隅丸二等辺三角形状と推測され、規模は長さ（高さ／北西-南東）295cm、深さ25~35cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが北西側がやや低くなり、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫は北西側と南東側に密なまとまりが確認されるが、他は疎らである。礫の多くは10~20cm大のものであるが、5cm未満のものや25cmを超えるものも多少含まれている。層位的には覆土上層から坑底面まで及ぶ。

覆土および礫の間を埋める土層は、第II層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。

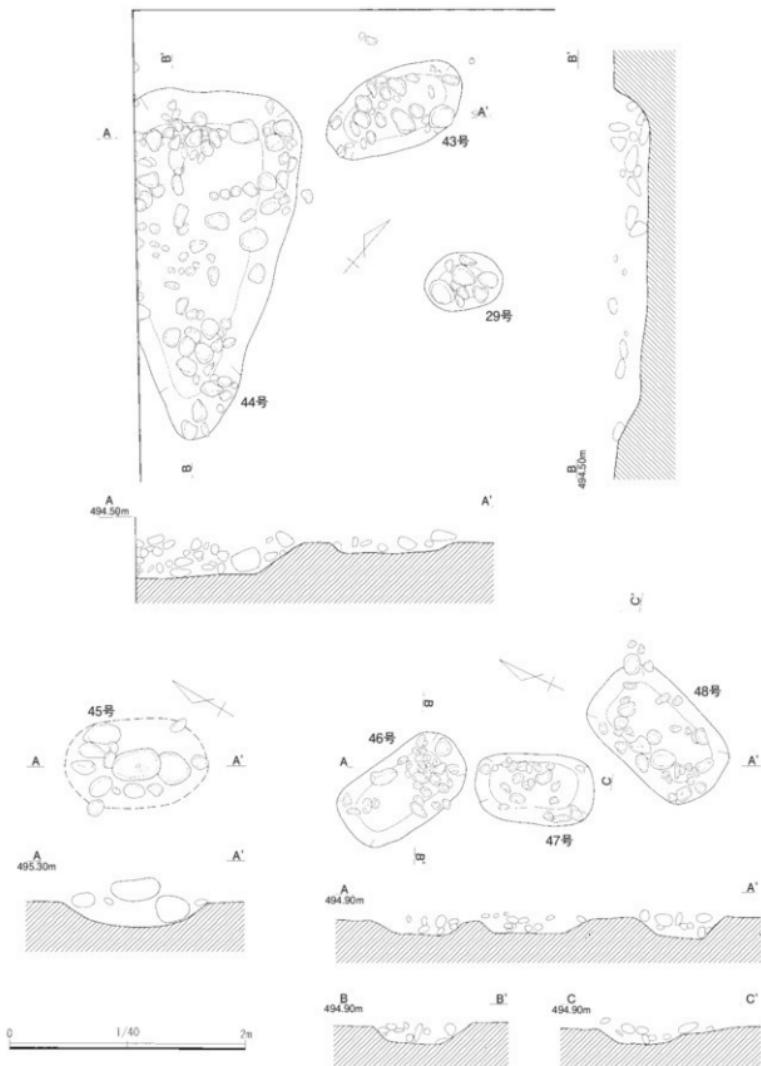
出土遺物（第83図、第39表、図版30）

遺物は礫の間から出土したもので、いずれも小破片である。図示し得た資料は計7点。1は瀬戸・美濃系の端反皿の口縁部片で大窓期の時期と考えられ、16世紀中頃の所産と推測される。2は瀬戸・美濃系の天目碗の体部片、3は施釉陶器壺の肩方胴上半の破片、4は瀬戸・美濃系の摺鉢の底部片で、鉄漿を内外面にかける。年代は概ね中世後半と推測される。5は平安前期の灰釉陶器椀の高台部片、6は山茶碗窯系の碗と考えられる高台部片、7は奈良期の平瓦片である。

遺物には年代的な開きがあるが、下限年代を示す瀬戸・美濃系の資料より推測すると、16世紀代の範疇とみるのが妥当と思われる。



第83図 44号集石土坑出土遺物（1/3、1/4）



第84図 43~48号集石土坑実測図 (1/40)

45号集石土坑（第84図）

C区の中央やや南東寄りに位置し、発掘区ではL-42区に所在する。本遺構周囲は削平による影響を受けている。平面形は楕円形を呈し、長軸（北西-南東）122cm、短軸75cm、深さ約20cmを測る。底面はやや丸みをもち、壁面はやや開きぎみに立ち上がる。礫は覆土上層を中心に確認されたが、一部は最下層付近からも出土している。東側は欠損しているが、中央には40cmほどの礫が確認され、また周囲には15~20cmほどの礫が出土している。覆土および礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

46号集石土坑（第84図、図版17）

C区の北西側に位置し、発掘区ではK・L-29区に所在する。周辺には本遺構を含めて5基（32・33・46~48号）の集石土坑が群集している。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸（北西-南東）115cm、短軸64cm、深さ10~18cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが南西側がやや低くなり、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の出土は南東側ではやや密であったが、北西側では疎らで、多くは10~15cmほどのものである。層位的には覆土上層から下層にかけて出土しており、礫の間を埋める土層は第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

47号集石土坑（第84図、図版17）

C区の北西側に位置し、発掘区ではK・L-29区に所在する。平面形は隅丸長方形を呈し、前述の46号と近似する。規模は長軸（北西-南東）102cm、短軸60cm、深さ12cmを測る。坑底面は平坦で、壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の出土状況は北東側ではやや密であるが、南西側は疎らで、多くは5~15cmほどのものであった。層位的には覆土上層から下層にかけて出土している。礫の間を埋める土層は第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

48号集石土坑（第84図、図版17）

C区の北西側に位置し、発掘区ではK・L-29区に所在する。平面形は隅丸長方形を呈し、前述の47号と近接する。規模は長軸（南北）127cm、短軸76cm、深さ15~20cmを測る。坑底面はやや丸みをもち、南側がやや低くなる。壁面は開きぎみに立ち上がる。礫の出土は西側に偏っているが、疎らである。礫の多くは10~15cm程度のものであるが、5cm未満のものも含まれる。層位的には覆土上層を中心に一部は下層からも出土している。覆土および礫の間を埋める土層は第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。なお、遺物は出土していない。

第9節 配石遺構

向町地点の調査で配石遺構として扱った遺構は、川原石（自然石）を主な素材として構築されたとみられる集合体（構築物）の総称で、比較的大形の礫を用いる場合もあれば小振りの礫を集めただけのものもある。規則性を重視したが、とくに規則的な配置でなくとも、上町遺跡D地点の慣例に習い配石遺構として取り扱った集合体も存在する。遺構の用途が判明しているものに対してはそれぞれの用語（敷石住居・敷石・配石墓など）で呼ばれることが多いが、今回の調査で配石遺構として扱った

遺構については用途・性格ともに不明である。配石遺構と集石土坑の区別は、土坑内に小振りの礫を集めただけで規則性を示さないものについて集石土坑と呼び、形態上の規則性を示す可能性があると考えられるものについては配石遺構として区別したが、集石遺構との区別は難しかった。

以下に詳細を記すが、個別で扱った配石遺構は8基、この他に配石群として扱ったものもある。前者はA区中央のやや北西寄りに1基(1号)、C区北西側に2基(2・6号)、C区中央の南西寄りに3基(3・7・8号)、C・D区の境界付近に2基(4・5号)の計8基である。また、配石群として扱った一群は、C区の南東側に位置し、道路幅に置き換えると約30mの区間に形成されている。今回の報告の中では南東側配石群と呼称する。

配石(礫)の間を埋める土層は、基本層序の第II層黒褐色土に近似する土層(砂質植土壤)である。この第II層は中世から近世の遺物包含層と推測されるもので、遺構の時期を決める目安となっている。

配石遺構の時期については、遺構に共伴する出土遺物が少ないと難しい部分もあるが、6号配石遺構出土遺物や礫の間を埋める土層などをもとに検討すると、概ね平安後期もしくは中世頃の所産と推測することができよう。

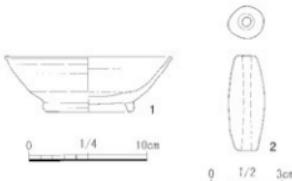
1号配石遺構(第86図、図版17)

A区中央のやや北西寄りに位置し、発掘区ではK-7・8区に所在する。他遺構との重複関係では、1号堅穴状遺構の廃絶後に本遺構は構築されている。配石とした礫の分布は略楕円形を呈し、規模は長軸(北東-南西)2.05m、短軸1.20mを測る。また、礫の直下に明瞭な掘り方は存在していないが、南西側が若干窪んでいる。配石は10-15cm大の礫が中心に構成されるが、5cm未満の小さなものや、20cmを超えるものも多少含まれる。礫の状況に全体を意図的に構成するような配置はみられないが、上面はほぼ平らに整えている。また、礫に焼けた痕跡は認められない。礫の間を埋める土層は第II層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。

出土遺物(第85図、第40表、図版30)

遺物は礫の確認時にその上面より出土した灰釉陶器塊や土鍤などで、図示し得た資料は2点である。1が黒竈90号窯式期の灰釉陶器塊、2が細形の土鍤である。

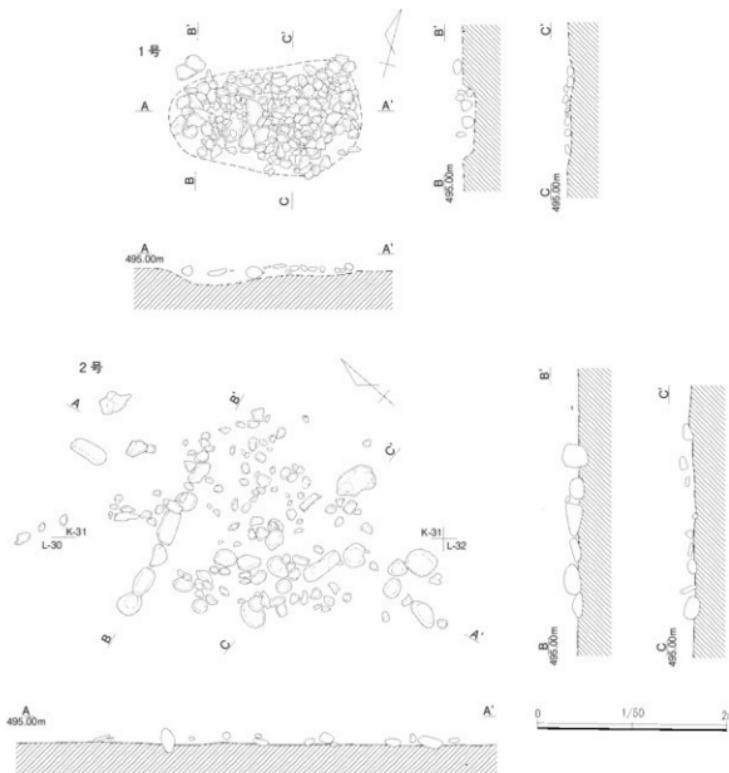
配石の時期について、図示し得た資料より判断すると9世紀後半を下限年代とすることもできるが、覆土や他遺構との重複関係より推測すると平安後期もしくは中世の所産と考えられる。



第85図 1号配石遺構出土遺物
(1/4、1/2)

2号配石遺構(第86図、図版17)

C区の北西側に位置し、発掘区ではK・L-31区に所在する。配石の状況は疎らで明瞭ではないが、概ね長軸(南北)4.20m、短軸2.60mの範囲(略楕円形)に収まる礫分布を2号配石遺構とした。礫は20-40cm大のものが中心に構成されるが、10cm未満の小さなもの含まれている。礫の配置に規則性はあまり認められないが、北側の礫に限ってのみ列状に並ぶ状況が看取される。それぞれの礫の高さはほぼ揃っており、他の礫も高さはほぼ同一である。礫に焼けた痕跡は認められない。また、掘り方は確認されていない。礫の間を埋める土層は、第II層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤で、遺物は

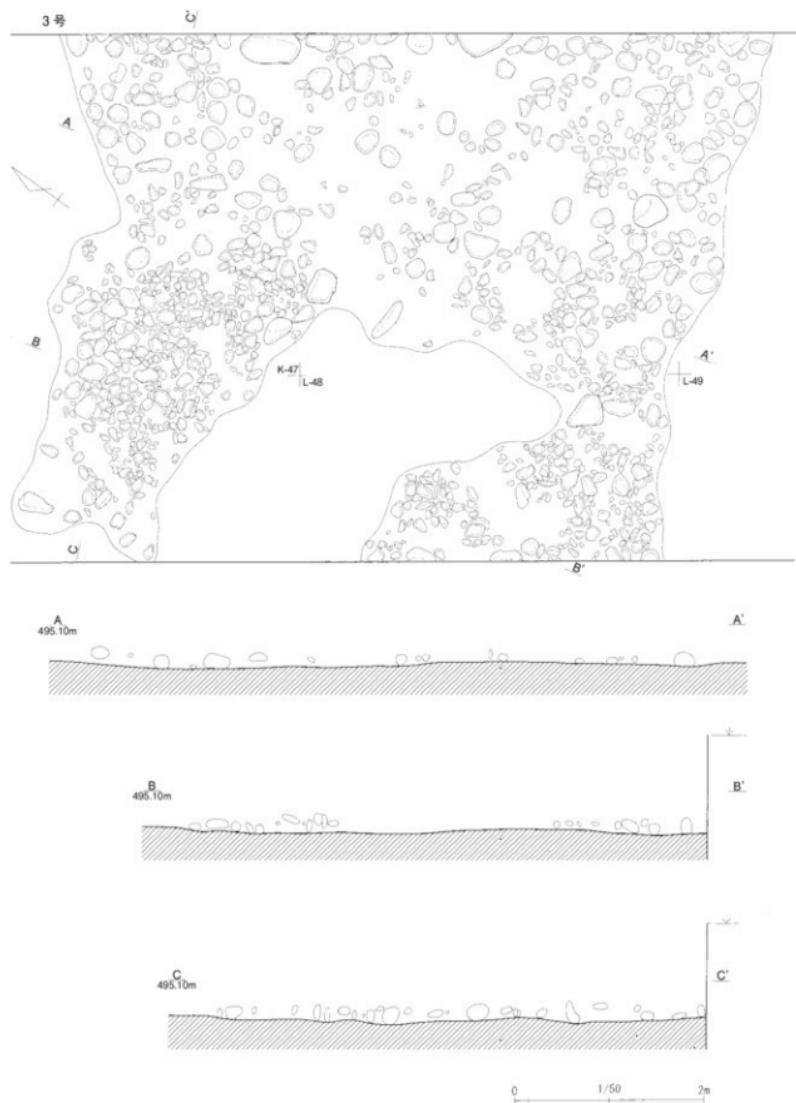


第86図 1・2号配石遺構実測図(1/50)

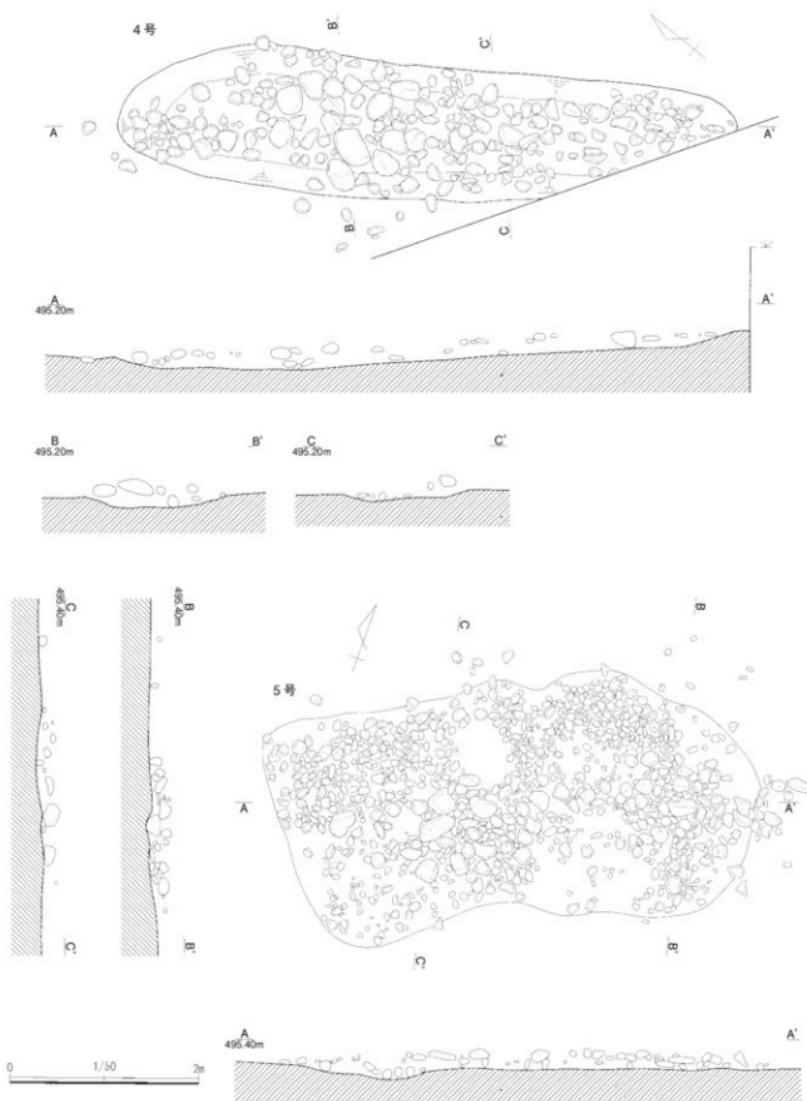
出土していない。

3号配石遺構 (第87図、図版17)

C区中央のやや南西寄りに位置し、発掘区ではK・L-47・48区に所在する。他遺構との重複関係では3号溝および8号配石遺構により壊されている。また、配石は北東側と一部南北側の調査区外に及んでいる。配石遺構として捉えた疊の範囲を約5.5mの道路予定地内でみると、北西-南東方向で最長7.60m、北東-南西方向で5.55mを測る。全体は不定形な形状を呈し、疊の疎らな部分もあり、規則的な配置ではないが、部分的にみると100cm内外のサークル状の配置が看取される。疊の多くは20~40cm大のものが中心であるが、10cm未満の小さなものや、50cm以上のものも含まれている。また、疊には焼けた痕跡はみられない。北西側では疊が不定形に密集している部分も認められるが、全体を



第87図 3号配石遺構実測図 (1/50)



第88図 4・5号配石遺構実測図(1/50)

意図的に構成するような配置ではない。また、縁辺部に比較的密集する傾向がみられる。礫の上面はほぼ平らに整えられている。礫の下部には掘り方は確認されていない。また、礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質埴土壤である。なお、遺物は出土していない。

4号配石遺構（第88図、図版17）

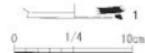
C区の南東側に位置し、発掘区ではK-58・59区に所在する。遺構の一部は南東側調査区外に及ぶ。配石遺構とした4号の礫分布範囲は、長軸（北西-南東）6.60m、短軸1.50mを測り、平面形は帯状を呈する。配石とした範囲には10~30cm大が分布しているが、40cmを超えるものもみられる。礫には焼けた痕跡はみられず、自然礫をそのまま利用している。全体を意図的に構成するような礫の配置はとくに認められないが、礫の上面はほぼ平坦に整えられている。中央部分では40cm大の礫が不定形に密集する箇所も認められるが、一方北西側および南東側では礫の疎らな箇所もある。

礫の直下には浅い掘り方が確認された。礫の分布範囲とほぼ同じ規模で、長軸（北西-南東）6.60m、短軸1.50mを測り、平面形は帯状を呈するといえる。底面は北西側に傾斜し、壁面はなだらかに立ち上がる。深さは中央のもっとも深い部分で約20cm、壁周辺は10cm前後である。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質埴土壤である。

出土遺物（第89図、第41表、図版30）

遺物は礫の確認時にその上面より出土した須恵器や灰釉陶器などの小片などで、図示し得た資料は須恵器坏Bの高台部片のみである。

配石の時期について、図示し得た須恵器坏Bより判断すると概ね8世紀後半頃のものとすることができるが、覆土や類似遺構との関連より推測すると平安後期もしくは中世頃の所産と考えられる。



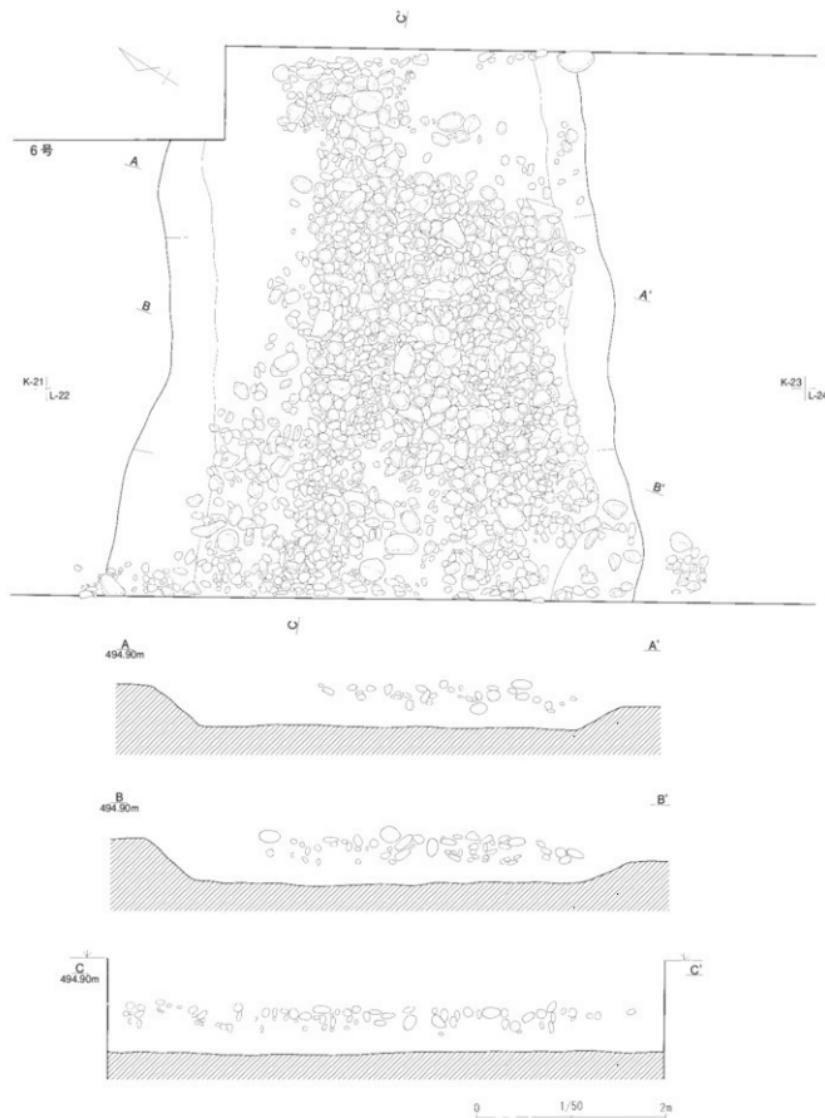
第89図 4号配石遺構出土遺物
(1/4)

5号配石遺構（第88図、図版18）

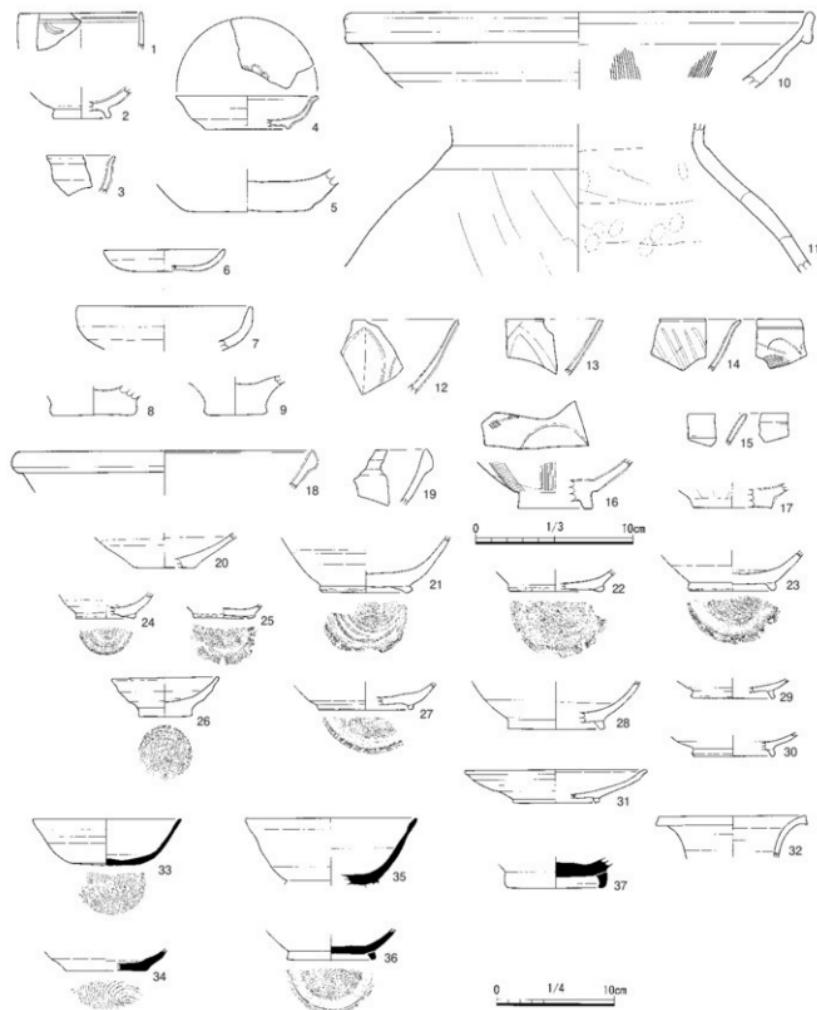
C区の南東側に位置し、発掘区ではK・L-55・56区に所在する。他遺構との重複関係では、15号住居跡およびC区南側配石群（3）の廃絶後に本遺構は構築されたとみられる。5号配石とした礫の分布範囲は不整橢円形と推測される。規模は長軸（北東-南西）約5.3m、短軸約2.5mを測る。また、礫の直下に掘り方は存在していないが、南西側が若干窪んでいる。配石全体をみると、疎らな部分もあり、必ずしも規則的な配置とはいえないが、100cm内外のサークル状の配置や拳大ほどの礫が密集している部分も認められる。但し全体を意図的に構成するような配置ではない。配石とした範囲には10~15cm大の礫が中心に出土しているが、40cmを超えるものもわずかである。また、礫には焼けた痕跡はみられず、自然礫をそのまま利用している。礫の上面はほぼ平坦に整えられている。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質埴土壤である。なお、遺物は出土していない。

6号配石遺構（第90図、図版18）

C区の北西側に位置し、発掘区ではK・L-22・23区に所在する。6号配石とした礫の分布範囲は北東-南西の方向に向かって調査区外に延びるため全容は不明である。他遺構との重複関係はない。配石遺構として捉えた礫の範囲を道路予定地内でみると、その分布範囲は概ね礫直下の溝状遺構内に収まる。規模は道路予定幅の北東-南西方向で約5.8m、北西-南東で幅約5.5mを測る。配石とした



第90図 6号配石遺構実測図 (1 / 50)



第91図 6号配石遺構出土遺物(1/3、1/4)

範囲内には10~15cm大の拳大から掌大の礫が中心に出土しているが、30cmを超えるものもみられる。また、密集している箇所と疎らな箇所がある。礫には焼けた痕跡はみられず、自然礫をそのまま利用している。全体を意図的に構成するような礫の配置はとくに認められないが、中央部分の密集箇所は作為的である。また、礫の上面は全体的にみるとほぼ平坦に整えられている。層位的には溝内の覆土上層から中層にかけて出土している。

下部の溝状遺構は溝の中軸線上で計測すると5.80m、幅は北東側で4.20m、南西側で5.60mを測り、主軸方位はN-47°-Eである。溝の深さは削平による影響もあり一定でないが、遺存状況の良好な北西壁側で40cmを測る。壁面は開きぎみに立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えられている。覆土下層および礫の間を埋める土層は、第II層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。

出土遺物（第91図、第42表、図版30）

遺物は礫確認面出土のものと溝内覆土出土のものに大きく分けることができる。出土遺物の多くは後者の覆土下層からである。図示し得た資料は計37点で、礫確認面出土の資料としては18世紀後半の肥前系染付碗、17世紀初頭の瀬戸・美濃系の天目碗、16世紀後半の瀬戸・美濃系の摺鉢、16世紀初頭の瀬戸・美濃系の端反皿などの国産陶磁器や、15世紀代の景德镇窯系の青白磁碗がある。一方、溝内出土資料では、13世紀後半の龍泉窯系の青磁蓮弁文碗、13世紀代の同安窯系青磁碗、11世紀後半から12世紀前半の玉縁の白磁碗、11世紀代の山茶碗窯系の陶器類やかわらけ、9世紀代の灰釉陶器や須恵器類などである。掲載した資料を示すと以下の様になる。1が磁器染付碗、2が陶器灰釉小碗、3が陶器天目碗、4が陶器端反皿、5が山茶碗窯系鉢、6~9がかわらけ、10が陶器摺鉢、11が陶器甕、12・13が青磁蓮弁文碗、14が青磁画花文碗、15・16が青磁碗、17が青白磁碗、18・19が白磁碗、20が白磁礫、21~26が山茶碗窯系の碗・小碗、27~30が灰釉陶器甕、31が灰釉陶器皿、32が灰釉陶器長頸瓶、33・34が須恵器甕A、35~37が須恵器甕Bである。

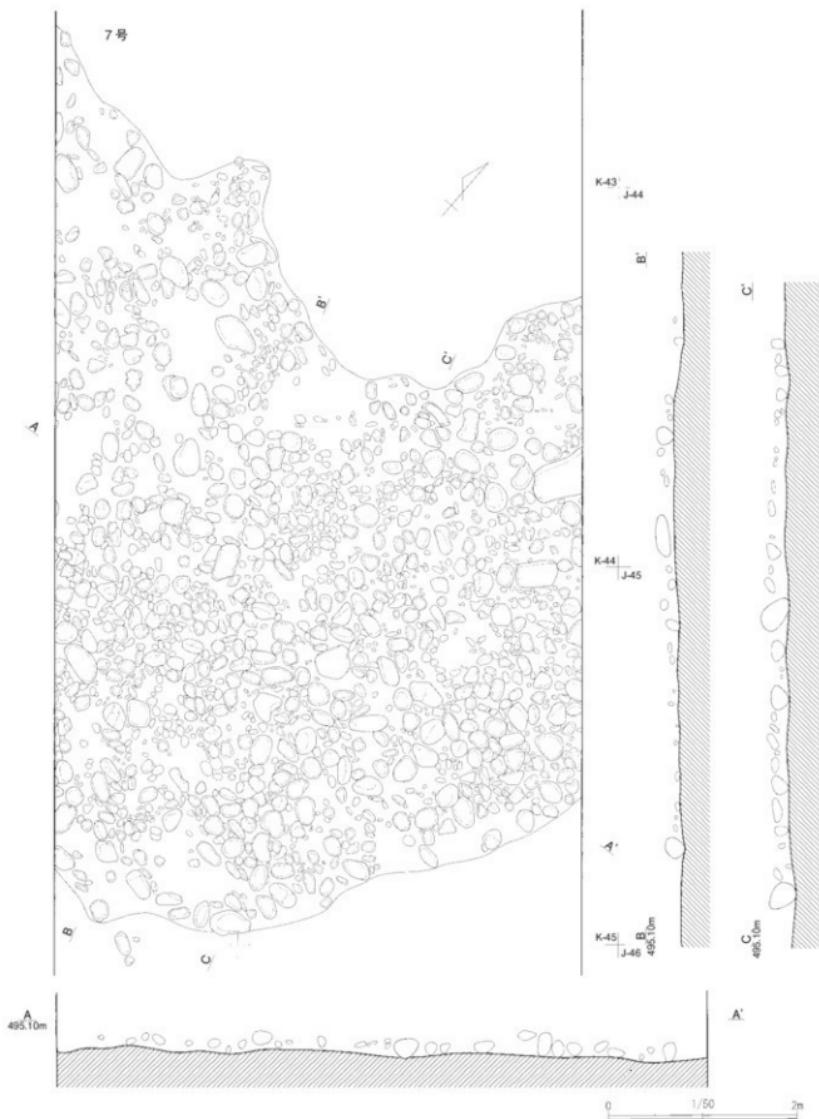
最後に本遺構の時期について考えると、年代的に開きがあるため躊躇せざるを得ないが、溝内出土遺物の中でも比較的まとまって出土した12世紀から13世紀代の時期とみるのが妥当と思われる。

7号配石遺構（第92図、図版18）

C区中央のやや南西寄りに位置し、発掘区ではK・L-43~45区に所在する。7号配石とした礫の分布範囲は調査区外に広がるため全容は不明である。他遺構との重複関係はみられない。配石遺構として捉えた礫分布範囲は、北西-南東方向で最大8.95mを測り弧状に広がる。配石とした範囲内には10~20cm大の礫が中心に出土しているが、5cm未満の小礫や、30~40cm大の礫も相当数あり、50cmを超えるものも存在する。全体的には必ずしも規則的な配置ではないが、100~150cmほどのサークル状のプランや、中央部分の密集箇所は作為的である。但し、全体を意図的に構成するような配置ではない。礫の直下に掘り込みは認められず、焼けた痕跡もみられない。礫の間を埋める土層は第II層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。遺物は出土していない。

8号配石遺構（第93図、図版18）

C区中央のやや南西寄りに位置し、発掘区ではK・L-47・48区に所在する。本遺構は3号配石を壊している。8号配石とした礫の分布範囲は、北東側の調査区外に及ぶため全容は不明である。配石遺構として捉えた礫分布範囲は、北西-南東方向で最大4.60m、北東-南西方向で最大5.20mを測り、



第92図 7号配石遺構実測図 (1/50)



第93図 8号配石遺構実測図 (1/50)

第94図 8号配石遺構出土遺物 (1/3)

平面形はアーベ状を呈する。配石とした範囲内には10~15cm大の砾に混じって5cm未満の小砾や、25~40cm大の大きなもの、50cmを超えるものなども混在している。砾の配置には全体を意図的に構成するような状況は認められないが、中央部分の密集箇所は作為的である。また、東側調査区境界には100~150cmほどの楕円サークル状のプランも認められる。砾の直下に掘り込みは認められず、焼けた痕跡もみられない。砾の下面はほぼ平坦に整えられている。砾の間を埋める土層は、第II層類似土を主体とする黒褐色砂質植生土である。

出土遺物 (第94図、第43表)

出土した遺物は肥前系の染付碗の高台部片である。砾の間から出土したもので、やや青みがかった透明の釉の上に藍色で絵付している。高台部は断面三角形状の削り出し高台である。本資料の時期は

近世後半の所産と考えられる。

C区南東側配石群 1～3（第95～97図、第44・45表、図版18・19）

配石群として取り扱ったC区南東側の礫ブロックのまとまりについて、一括して以下に説明する。発掘区ではK・L-50～57区に所在する。第7図のC・D区遺構配置図では、礫ブロックの密集箇所をやや作為的に囲ったが、規則的な配置を明確に示すものは少なかった。

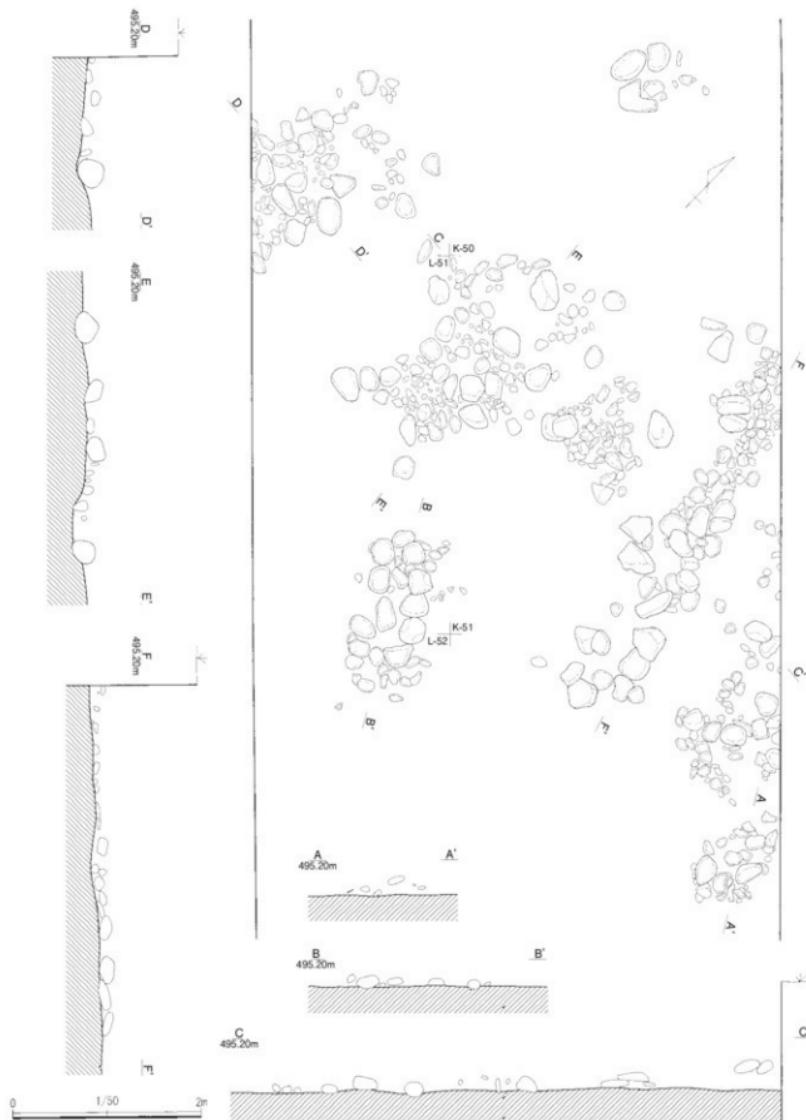
他遺構との重複関係では、14・15・19号の各堅穴住居跡や5号配石遺構、ピット群等と重複するが、新旧関係では5号配石遺構より古いが、堅穴住居跡やピット等よりも新しい。配石群とした礫分布の範囲は、北西から南東方向に延びる道路予定地内の約30mの間に位置する。全体を意図的に構成するような礫の配置は認められないが、礫集中（ブロック）の範囲を大まかに囲うと10箇所程度に分けることができ、それらを3図に分けて掲載した（第95～97図）。規則的な配置はあまり認められないが、礫の集合体として捉えると、人為的に配置された礫の構築物とみることができる。

北西側の礫集中箇所（第95図－配石群1）では20～40cm大の比較的大きな礫を使用しているのに対して、南東側（第96・97図－配石群2・3）では10～15cm大の小振りな礫を使用している。配石群とした礫集中箇所10箇所の規模および平面形についてみると、最小のものでは2m内外のものから、最大のものでは9mを超えるものまである。また、それぞれの礫分布範囲を追うと、平面形の大半はアーバ状に広がっており、各々の礫集中箇所には礫密集箇所が認められ、仮にそれらを線で囲うと55箇所ほどの小ブロックの存在が指摘できる（第7図）。

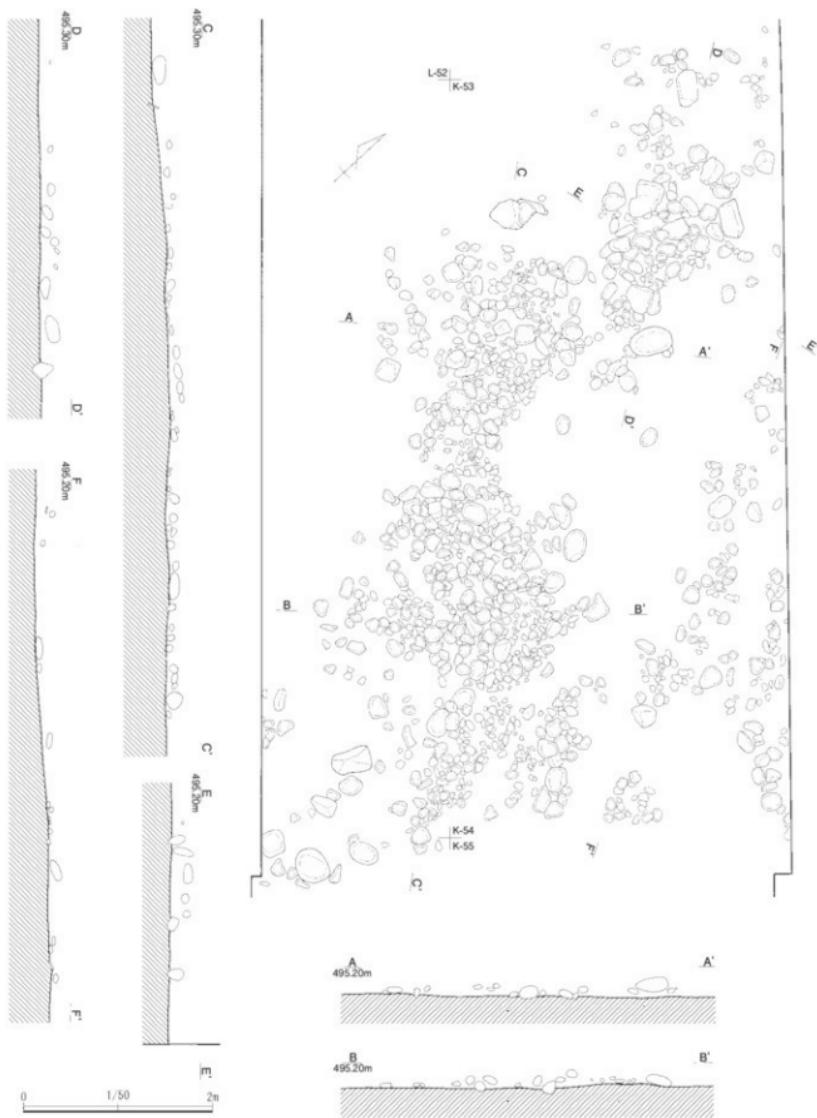
また、これらの礫には焼けた痕跡はまったく認められず、自然礫をそのまま利用している。当初は集石土坑の可能性を想定して調査にあたったが、礫の真下に下部施設である土坑は確認できなかつた。小ブロックとして囲った配石（礫）群の多くは不定形に密集しているもので構成されていることから、厳密には規則的な配置を前提とする配石とは異なっているが、ここでは平面的な礫の集合体と捉え、構築物としての配石群として取り扱った。礫の間を埋める土層は、第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質植土壤である。

出土遺物（第98図、第44・45表、図版31）

配石群として括った範囲より出土した遺物のうち、図示し得た14点の資料を掲載した。遺物の大半は古墳時代後期から奈良時代後半までの須恵器や土師器、瓦などの破片であるが、中近世の陶磁器も若干含まれていた。また、これらの遺物はいずれも配石群2・3（第96・97図）の礫確認面付近から出土したものである。なお、後者の陶磁器類は小破片で図示し得なかつたが、配石群の時期を考えるうえで目安になるものと考えられる。なお、掲載した資料は周辺の遺構群との関連を検討する上での参考資料である。



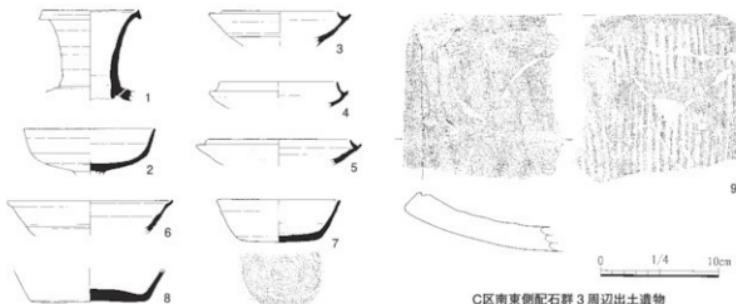
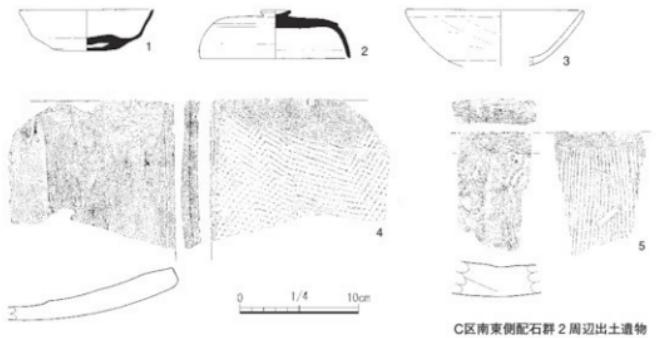
第95図 C区南東側配石群実測図 1 (1/50)



第96図 C区南東側配石群実測図 2 (1 / 50)



第97図 C区南東側配石群実測図3(1/50)



第98図 C区南東側配石群2・3周辺の出土遺物(1/4)

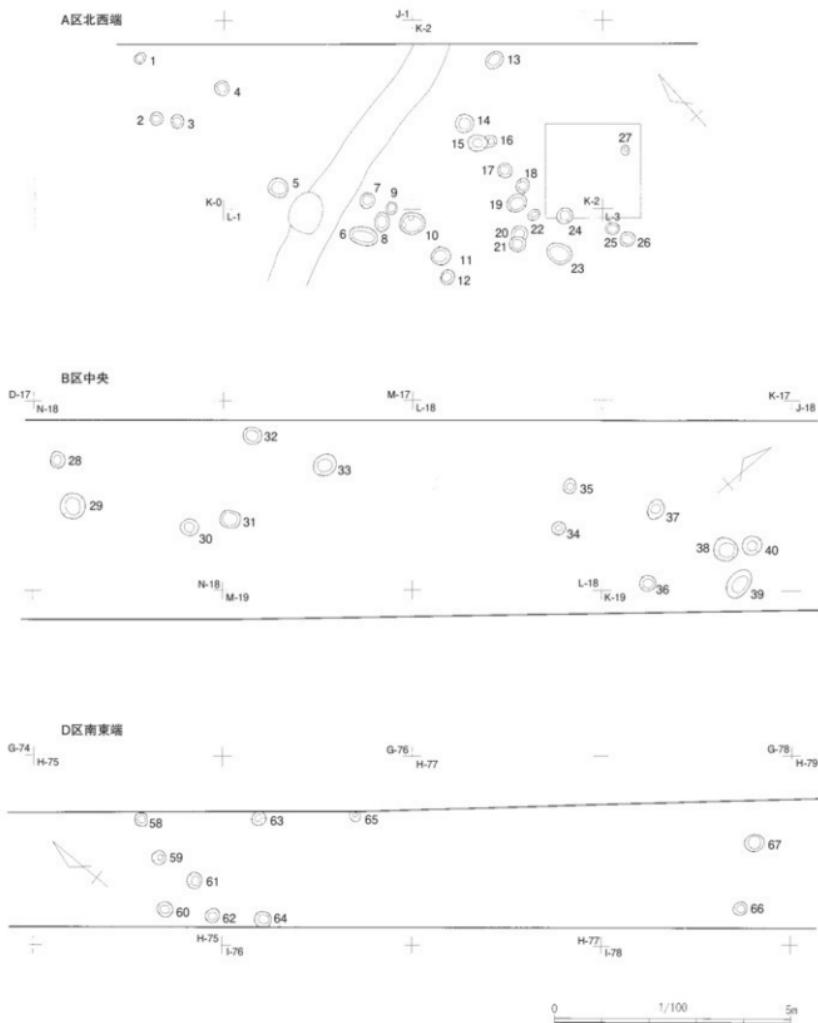
第10節 ピット群

向町地点の調査で確認したピットの総数は計75穴で、6箇所の地区に分布している。その内訳は、A区の北西端(K-L-0~3区)に1群27穴、B区のはば中央(K-N-18区)に1群13穴、C区の北西側(K-30~33区)に1群9穴、C区のはば中央(K-40・41区)に1群8穴、C区南東側(K-L-51~54区)に1群8穴、D区の南東端(H-75~78区)に1群10穴となる(第99・100図)。

柱穴の形状を円形もしくは梢円形を呈するものである。規模は長軸10cm台のものから最大で83cmのものもあるが、20cm台から40cm台のものが主体であった。また、確認面からの深さは20~30cm前後のもののが多かった。細部についてはピット観察表を参照されたい(第12表)。

6箇所の地区で確認されたピット群は、掘立柱建物や柱穴列、あるいは目隠し塀などの施設を想定して調査にあたったが、いずれも規則的な配置はみいだせなかった。また、他遺構との重複を有するものは認められなかった。覆土は第Ⅱ層類似土を主体とする黒褐色砂質土壌で構成される。なお、遺物は出土していない。

最後にピットの構築時期について若干述べると、出土遺物よりの検討はできないが、覆土の所見を重視すると、中近世の遺物が出土する基本層序の第II層に近似する黒褐色砂質埴土壌で構成される点から概ね中・近世の所産と考えられる。



第99図 A・B・D区ピット群実測図1 (1/100)

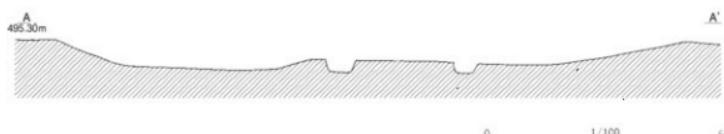
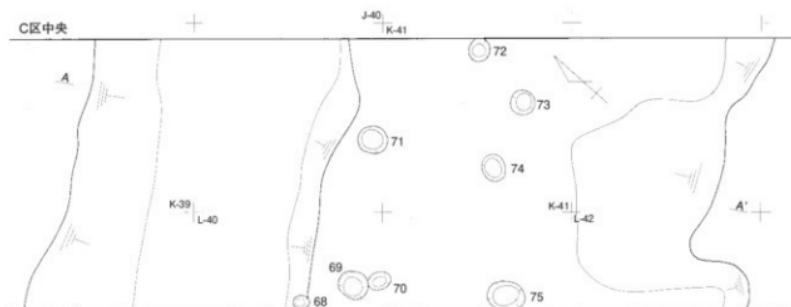
C区北西側



C区南西侧



C区中央



第100図 C区ピット群実測図（1/100）

第11節 遺構外出土遺物

1. 古代の遺構外出土遺物

本項では遺構外出土の古代の遺物について述べることにする。はじめに遺物の出土状況であるが、出土遺物の多くは調査した遺構の周辺からのものである。これは遺構間の重複や遺構内にあったものが土地改良事業などに伴って二次的に散逸した結果と考えられる。層位的には基本層序の第Ⅲ層黒色土からの出土であるが、第Ⅱ層の黒褐色土や第Ⅰ層の耕作土中からも発見されている。

出土遺物は、向町地点で調査した遺構群の時期と密接な関係にあるものと考えられる。時期的には7世紀末葉から9世紀代にかけての須恵器類を中心とするが、土師器や灰釉陶器類、瓦類、土製品・石製品（砥石類）などの資料も多少みられる。また、6世紀後半から7世紀代の須恵器類や、10世紀後半から12世紀初頭頃に編年し得る灰釉陶器や山茶碗窯系の製品、ロクロ土師器なども出土している。

これらの出土資料は、本地点や隣接地の上町遺跡D地点で調査した堅穴住居跡や掘立柱建物跡出土の遺物と概ね共通しており、それぞれの時代の出土遺物の実体を示すものと考えられる。また、出土遺物の多くは、耕作や土地改良事業などに伴って二次的に散逸したものとみられることから、土器や瓦類の大半は破損していた。この点も遺構外出土遺物のあり方として指摘できる点である。

遺構外出土遺物として図示し得た資料は、本地点における古代の実像を概ね示すものと考えられる。掲載した資料は、時期の目安となる食膳具を中心に須恵器類、灰釉陶器類、山茶碗窯系の陶器類、瓦類が主な遺物である。この他に土製品や石製品（砥石類）、金属製品が若干含まれる。なお、須恵器や灰釉陶器類などの時期比定にあたっては、飛騨地方の編年研究が未だ流動的であることから、当時の主要生産国である和泉や尾張、美濃などの編年研究より適宜準用した（田辺 1966、田辺 1972、尾野 2000ほか）。なお、7世紀後半以降の須恵器の产地は古川盆地内を含む飛騨地域内と考えられる。

1) 須恵器（第101～104図、第46表、図版32～35）

須恵器は食膳具の壺および碗を中心に164点を掲載した。図示し得た器種の内訳は、壺H蓋が8点（1～8）、壺H身が13点（9～21）、壺G蓋が6点（22～27）、壺AorBもしくは塊AorBに伴う蓋が25点（28～52）、壺G身が9点（53～61）、壺A身が9点（62～70）、壺B身が26（71～96）、皿Bが2点（97・98）、塊Aが47点（99～145）、皿Aが2点（146・147）、塊Bが15点（148～162）、瓶が1点（163）、甕が1点（164）である。

壺H蓋（1～8）は、口径に着目すると、14cm台のもの（1・2）、11～12cm台のもの（3～6）、10cm未満のもの（7～8）に分けられる。口径の相違は時期差を示すものと考えられるが、天井部は概ね丸くながらかで、天井部と口縁部を分ける稜は絶じて形骸化し、端部を丸く収めるものが多い。口径が14cm台のものはTK43型式～TK209型式、11～12cm台のもの、ないし10cm未満の小形のものはTK209型式～TK217型式頃に相当するものと考えられる。

壺H身（9～21）は、口径が11～12cm台のもの（9～14）と、10cm内外のもの（15～21）があり、全体に小型化が顕著で、底部は絶じて浅く偏平で、受部の立ち上がりは全体に短い。前者の11～12cm台のものがTK209型式、後者の10cm内外のものがTK217型式の範疇に相当するものと考えられる。

壺G蓋（22～27）は、内面に身受けのかえりをもつもので、口径が10cm内外のもの（22～24）と、13～14cm台の大きなもの（25～27）があり、後者のつまみは絶じて大きい。両者は概ねTK217型式の範

畴に収まるとみられるが、前者は7世紀後半、後者は7世紀末葉頃に相当するものと考えられる。

坏G身(53~61)は、底部の切り離し技法がヘラ切り手法によるもので、口径が10cm内外のもの(53・55)と、12cmを超えるもの(54・56~61)に分けられる。前者は坏G蓋の口径が10cm内外の器種と対応するものと考えられ、後者は坏G蓋の口径が13~14cm台のものとの対応が推測される。

蓋(28~52)として括った資料は、坏Aないし坏Bに伴うものと考えられる。つまみのみの資料のうちで、概して径の大きいものは8世紀前半もしくは坏G身に伴うかえりを有する蓋と推測される。また、天井部および口縁部の形態により種別が可能で、天井部が丸く端部の屈曲の弱いものは全体につまみの大きい器種である。一方、口縁端部の屈曲が強いものは概してつまみが小さく、時代がやや下るものと考えられる。

坏A(62~70)は、底部切り離し技法が回転ヘラケズリ技法によるもので、法量的には口径による相違、器高による高低二者の分離が可能である。これらの資料を尾張の8世紀の編年型式にあてると、岩崎41号窯式から岩崎25号窯式期の範疇と考えられる。

坏B(71~92)は、坏Aと同様に、口径による相違および器高による高低二者の分離が可能である。本資料は塊Aに次いで出土量が多い。高台は底部外周付近に付くものと、やや内側に寄るものがあり、前者は高台が低く、後者はやや高くなる傾向にある。これらは坏Aと共に関係にあるものと推測され、窯式では岩崎41号窯式から岩崎25号窯式期の範疇と考えられるが、やや古いものでは岩崎17号窯式のものも多少は含まれていると思われる。

盤B或皿B(93~98)として扱った資料は、体部下半が明瞭に折れる器形の盤Bと、なだらかに立ち上がる皿Bの二者がある。盤は皿に比べて高台が高い。出土量は全体的に少ない。長脚のものは出土していない。編年型式では鳴海32号窯式期以降のものと考えられる。

塊A(99~145)は、食膳具の中でもっとも多い器種である。底部の切り離し技法が糸切りによるものである。法量比や径高指数による分化も認められるが、さほど顯著なものではない。須恵器ではこの塊Aのみに墨書が認められる。編年型式では鳴海32号窯式期以降、折戸10号窯式期、井ヶ谷78号窯式期までの範疇と考えられる。

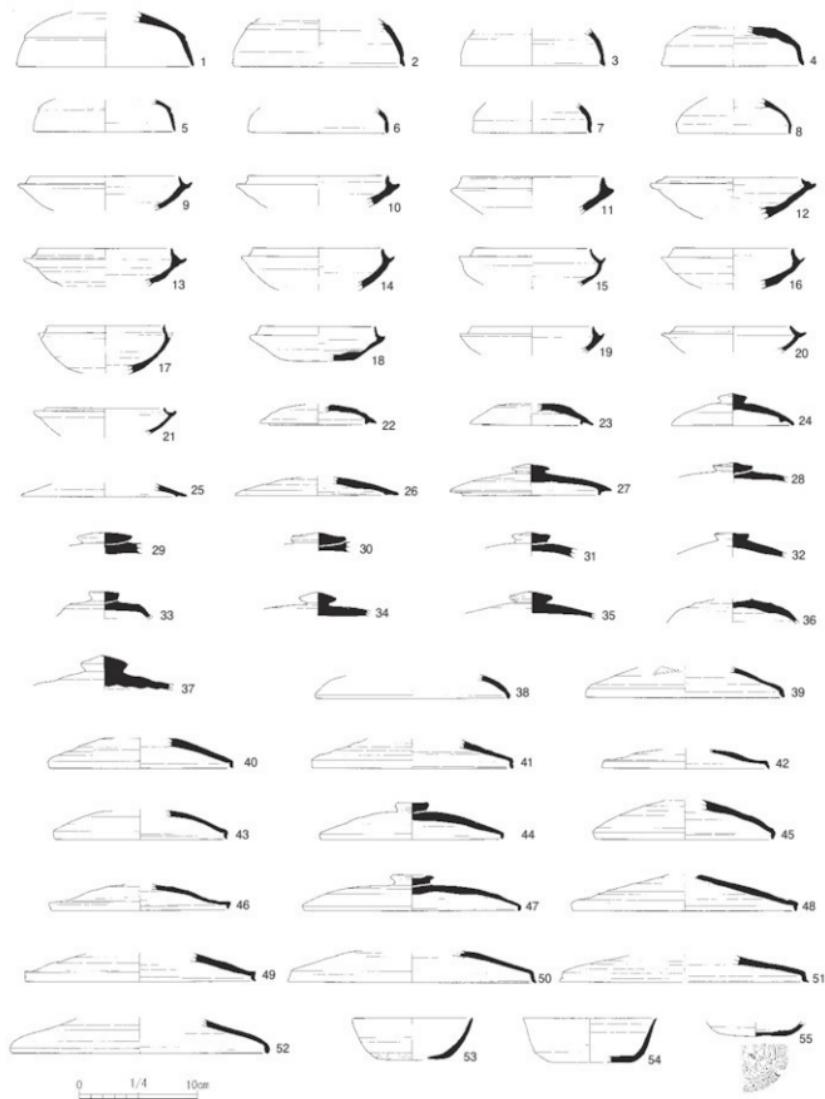
皿A(146~147)として扱った資料は2例であるが、口縁部が欠損しているため詳細は不明である。底部は糸切りによる切り離し技法である。なお、皿としたが短頸壺や瓶類などの蓋の可能性もある。

塊B(148~162)は、塊A、坏Bに次いで多く出土している。高台部には糸切り痕を残している。体部の形態により直線的に立ち上がるものと、内湾ぎみの立ち上がるものがある。また、小形、中形、大形の三者がある。これらは概ね塊Aと共に関係にあるものと推測され、編年型式では鳴海32号窯式期以降、折戸10号窯式期、井ヶ谷78号窯式期までの範疇と考えられる。

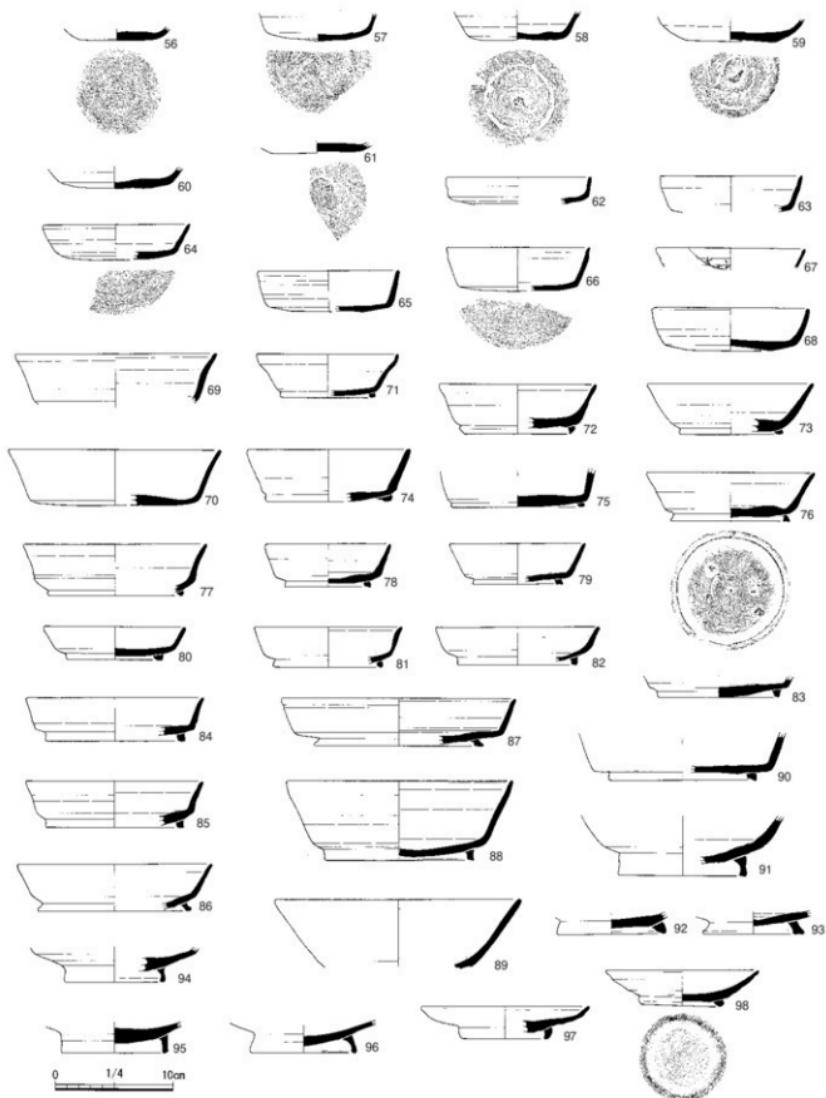
瓶・壺(163~164)としては扱った資料は2例であるが、壺は胴部の小破片が多く出土している。瓶とした底部資料は糸切り痕が明瞭に残る。

2) 灰釉陶器(第104~107図、第46表、図版35~38)

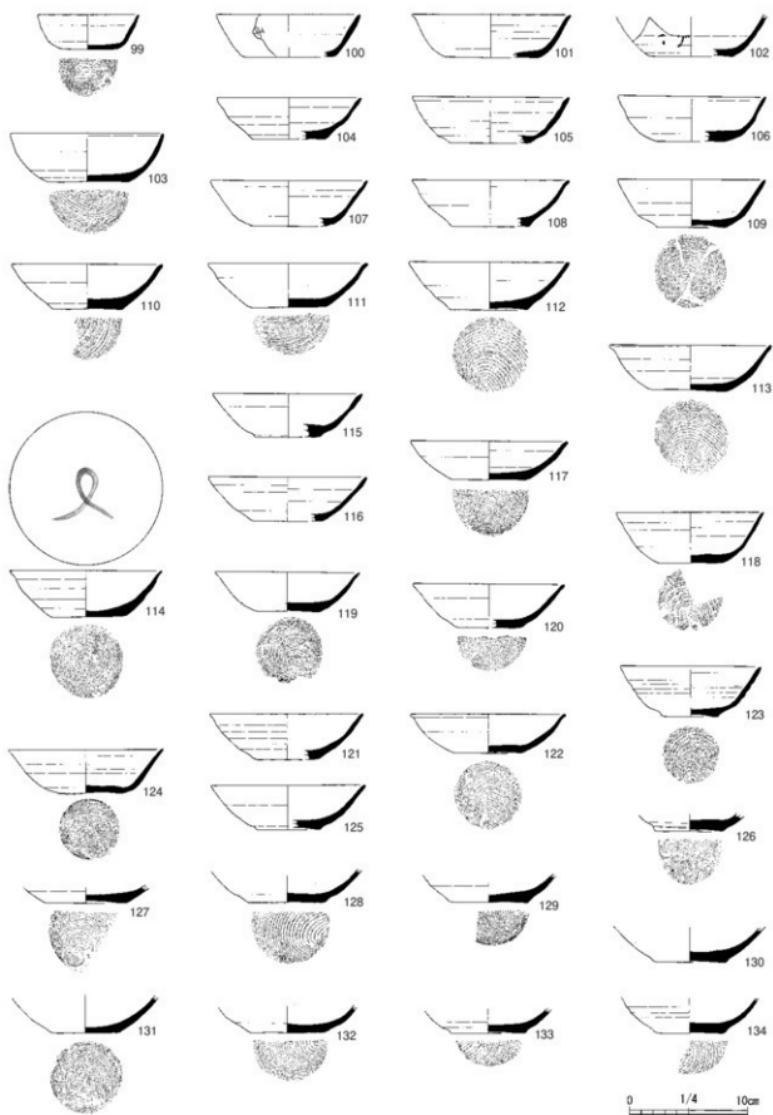
遺構外出土遺物の中で灰釉陶器の一群として掲載した資料は、猿投窯編年における黒笠14号窯式期から黒笠90号窯式、折戸53号窯式、東山72号窯式、百大寺窯式期までの塊と皿の組合せを中心とする器種組成のものから、深塊と小塊、そして深塊と山皿のセットへと移行、変化する時期までのもので、とくに後者は灰釉陶器が無釉の山茶碗化する、いわゆる山茶碗窯系の初期のものまでを含んでいる。



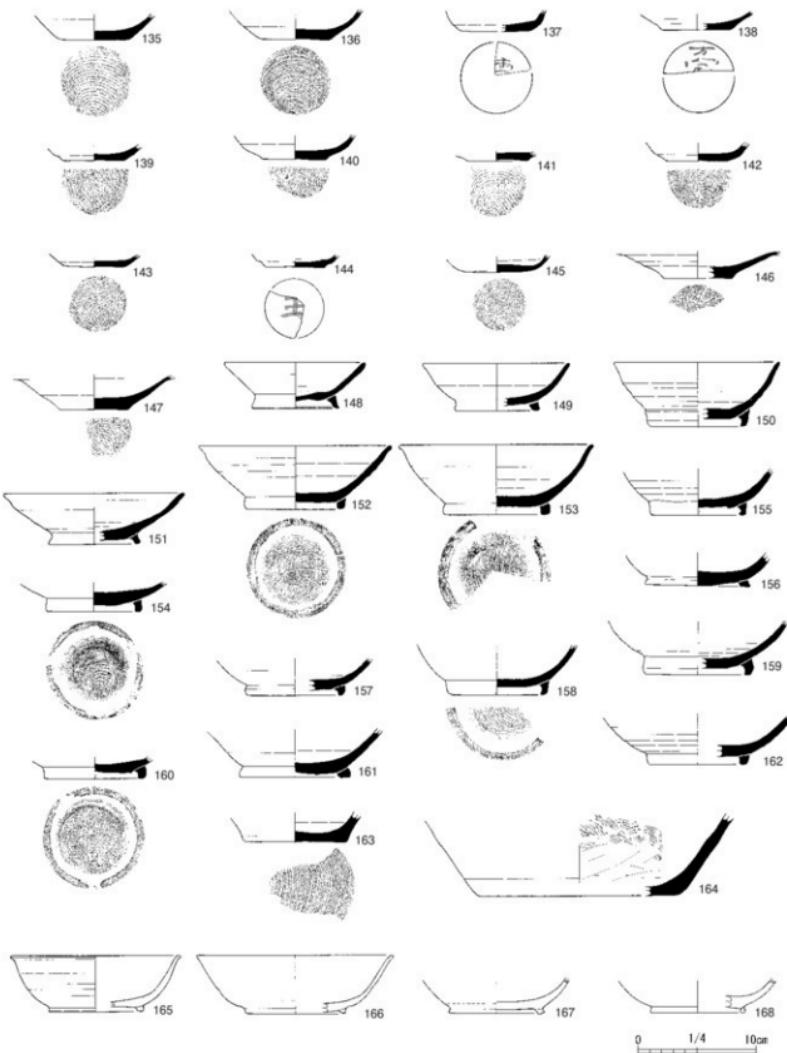
第101図 遺構外出土古代遺物～須恵器実測図 1 (1 / 4)



第102図 遺構外出土古代遺物～須恵器実測図 2 (1 / 4)



第103図 遺構外出土古代遺物～須恵器実測図 3 (1 / 4)



第104図 遺構外出土古代遺物～須恵器実測図 4・灰釉陶器実測図 1 (1 / 4)

掲載した資料は塊類を中心に126点を掲載した。その内訳は、灰釉陶器類・山茶碗窯系を含む塊類が86点(165~214・222~257)、灰釉皿が7点(215~221)、山茶碗窯系の鉢(無台碗)が3点(258~260)、山茶碗窯系の小碗が26点(261~286)、同山皿が4点(287~290)である。以下、黒笹14号窯式期の資料より概要を説明する。

165~168の塊は黒笹14号窯式期に比定される資料で、出土量は全体に少ない。いずれも腰の張りが強く、全体に厚手につくられ、底部には断面方形の角高台が付けられる。底部外面の仕上げとしては、糸切り痕を回転ヘラケズリまたは回転ナデ仕上げによって消している。また、外面の腰部から底部にかけて回転ヘラケズリを施すものもある。灰釉は、内面のみが全面刷毛塗りによって厚く施釉される。

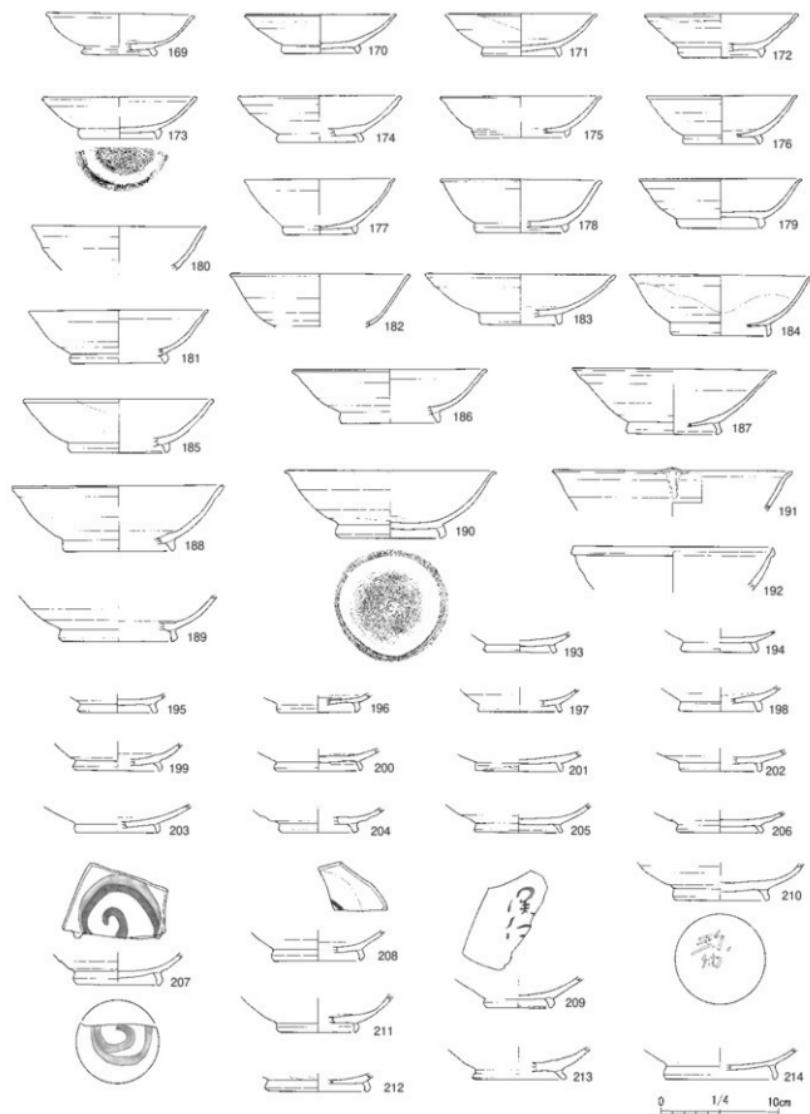
169~214・222~225の塊は、黒笹90号窯式から折戸53号窯式期にかけての資料を中心で、東山72号窯式期以降のものは少ない。黒笹90号窯式期の塊は、体部の腰の張りが黒笹14号窯式期の塊に比べて比較的弱く、ゆるやかに立ち上がって口縁部に至り、端部でやや外反する。器壁は相対的に薄手につくられている。また、底部には断面三日月形を呈する、いわゆる三日月高台が付けられる。底部外面の仕上げとしては、回転糸切り痕を回転ヘラケズリまたは回転ナデ仕上げによって消し、外面体部は腰部に回転ヘラケズリを施すものが多い。施釉は刷毛塗りによって施され、黒笹14号窯式期に比べて薄く施釉されている。施釉位置についての詳細は不明であるが、残存部分よりみると、内外面体部のみ、内外面体部および内底面、内面体部のみ、内面全体などがある。

折戸53号窯式期の塊は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部は外反しないものが多い。器壁は黒笹90号窯式期に比べて全体に厚くつくられ、断面三角形状を呈する低い高台が付けられる。底部外面の回転糸切り痕はそのまま残されている。また、体部下半に回転ヘラケズリが施されることなくなる。施釉は漬け掛けによるもので、口縁部の内外面に弧状の釉際のラインが残る。東山72号窯式期および百大寺窯式期の資料についてはごく少量で全容は不明であるが、輪花や玉縁の塊や、体部の深いもの、器壁が全体に厚手のもの、高台の粗雑化が進んだもの、あるいは断面三角高台などの破片がこれらの窯式に相当するものと考えられる。

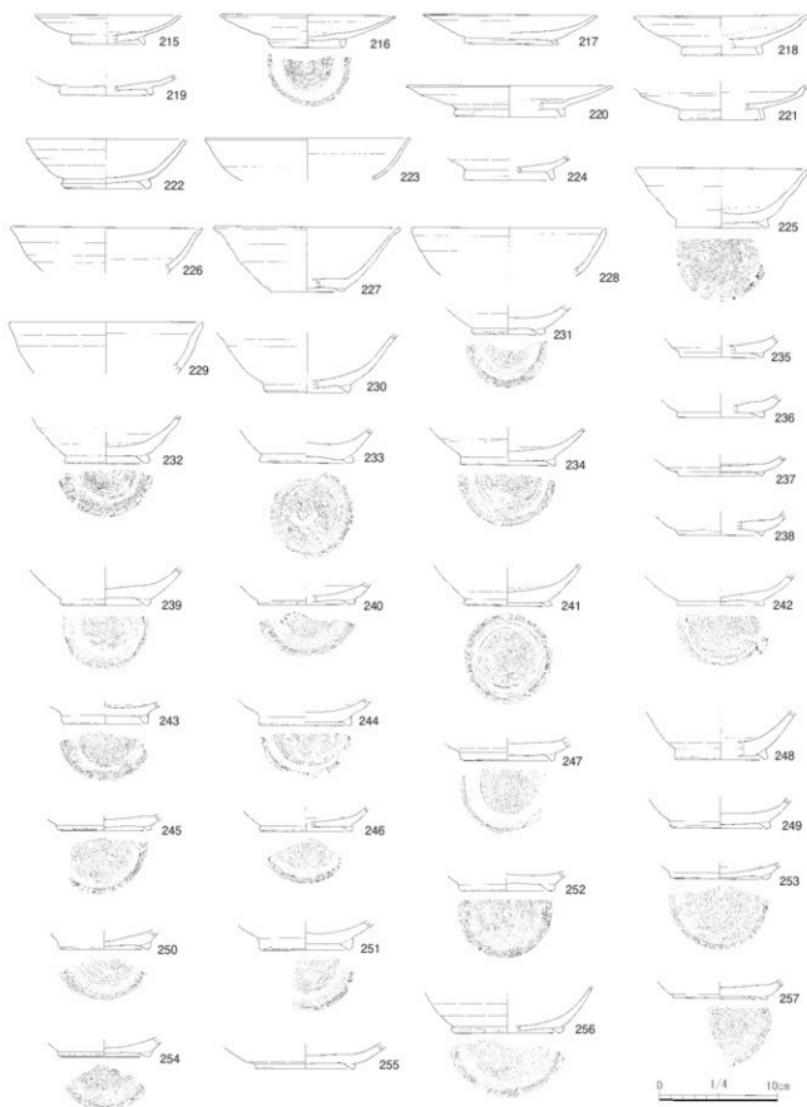
さらに、灰釉陶器では黒笹90号窯式および折戸53号窯式期の資料に墨書・刻書の事例が認められる。灰釉塊210の刻書は黒笹90号窯式期の事例で、底部外面にヘラで「珍納」と記されている。

215~221の皿および段皿は黒笹14号窯式から黒笹90号窯式期に比定される資料で、出土量は全体に少ない。前者は角高台を特徴とし、後者は三日月高台が付けられる。底部糸切り未調整の222・224は折戸53号窯式期に比定されよう。また、191・192の輪花塊や白磁碗を模倣した玉縁塊は東山72号窯式ないし百大寺窯式期に相当するものと考えられる。

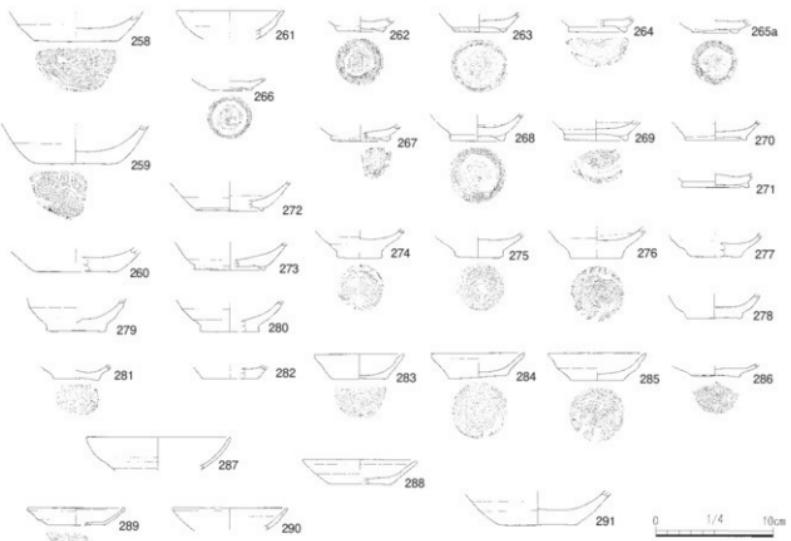
226~290の資料は、無釉の、いわゆる山茶碗窯系の製品で、山茶碗生産の成立期の段階に相当すると考えられる。器種には山茶碗(226~257)・鉢(258~260)・小碗(261~282)・山皿(283~290)などがある。山茶碗・鉢・小碗は前代の灰釉陶器と比べて質的に劣っている。とくに高台は形骸化し、山茶碗や小碗の高台には粗粒圧痕が付着している。これらは概ね11世紀後半から12世紀前半の所産と推測される。なお、291はロクロ土師器环の底部片である。



第105図 遺構外出土古代遺物—灰釉陶器実測図2 (1/4)



第106図 遺構外出土古代遺物—灰釉陶器実測図 3 (1 / 4)



第107図 遺構外出土古代遺物－灰釉陶器実測図4(1/4)

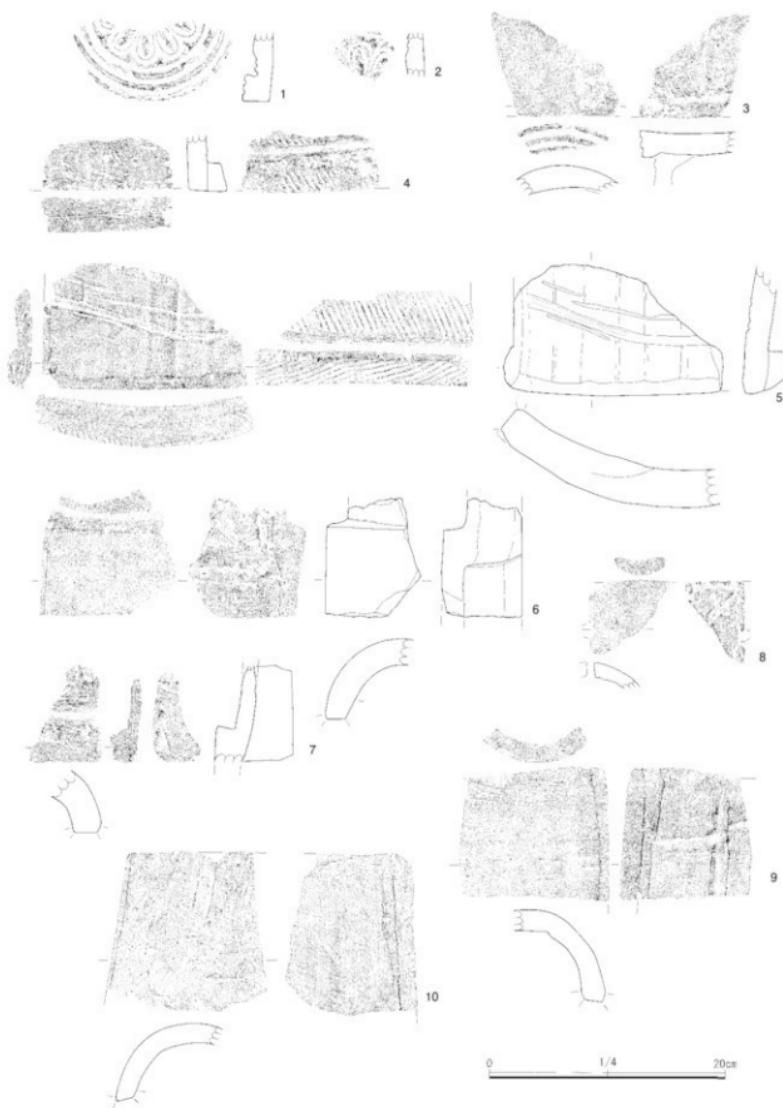
3) 瓦(第108~111図、第47表、図版39~41)

上町向町地点は、隣接地の上町D地点の調査以降、古町庵寺跡の推定地として注目されてきたが、今回の町道新設改良工事に伴う調査地区からは白鳳期の寺跡を示す具体的な遺構やまとまった遺物を確認することはできなかった。したがって、ここでは出土した瓦のうちで、図示し得た資料についてその概略を記しておきたい。

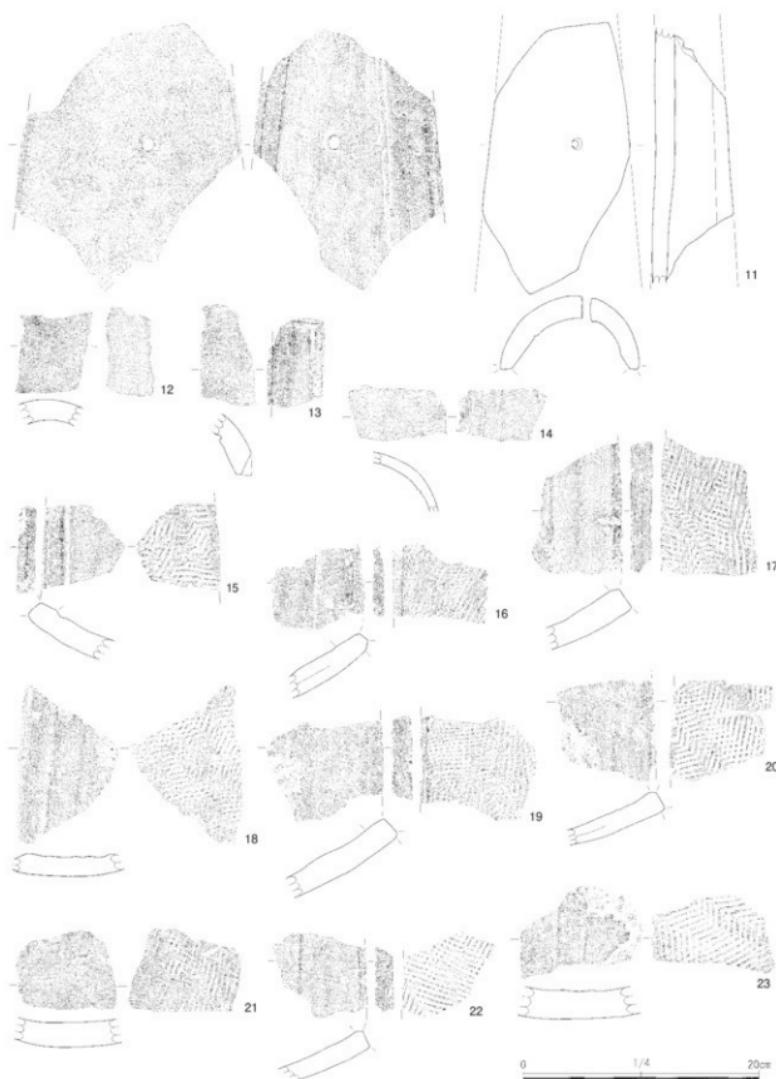
まず、出土した瓦について述べると、出土量はコンテナ(55×39×14cm)で約2箱分程度である。これらは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などに分けることができるが、いずれも小破片で、全体の形を留めるものではなく、大半が表土層や中世の遺構群などから出土したことを考え合わせると、出土した瓦の多くは二次的に散逸したものと推測される。なお、図示し得た資料は43点である。

個々についてみると、軒丸・軒平瓦はごくわずかで、全体の特徴や規模を記すことはできないが、瓦当面の文様から判断すると、軒丸瓦(1~3)は内区に10葉の蓮華文を配し、3条の圓線を周縁にめぐらす三重圓線単弁蓮華文の軒丸瓦である。また、軒平瓦(4~5)は顎部に平瓦部と同様の斜行叩き目文が加えられた資料である。瓦当面はヘラで調整され文様は施されていない。上町D地点では押引き重弧文と篦描きによる三重弧文、それに無文のものがあったが、無文のものはごくわずかで、多くは押引き重弧文のものであった。なお、両者は組み合うものと考えられ、現高山市国府町所在の芦谷窯跡(丸山窯跡)からの供給と推測される。

丸瓦(6~14)は、行基葺式(無段式)と玉縁式(有段式)の二者があるが、玉縁式のものは全体に少ない。また、類別にあたっては凸面の叩き目の種類や調整によって分類することができる。全容を



第108図 遺構外出土古代遺物—瓦実測図 1 (1 / 4)



第109図 遺構出土古代遺物－瓦実測図2 (1 / 4)